

伐を企て得る如き戰略的構想力は持たなかつた。而かも天賦の細心と手兵の不足とは、ナポレオンがアスベルンの役後、神算を以て敗北の顛より戦勝を扭ち取り遂にワグラムに敵を壊滅した様な超人的剛膽を現はすのを、彼れに禁じた。然かし戦術の方面では、サラマンカの役に元帥マルモンの陽動を看破し、迅速な懲罰的打撃を加へたる如き著大なる技倆を示した。此のサラマンカの役は、ナポレオンの戦術的技能の示した最も優秀なる實例に匹敵し得る所のものである。これら二人の武人を嘆美したナビエは次の如く彼等の主性格を概説してゐる。曰く『ウエリントンは非常に卓越した活動の神速果斷、早急裡に全戦役の運命を決定する優秀な靈感的能力を所持してゐた。而してそれはナポレオンに對しては、凡ゆる人類に許される程度以上に賦與されて居た。特別に軍事的天才を生成するのは、此の性質である。何故なれば戦争のコンビネーションは宏大無限のものであり、又頗る複雑であり、不羈なるものであり、而かも極めて輕微な動機によつて大なる影響を蒙るものであるが故に、非凡な能力を有する將帥にして、初めてこれを暗

闇裡に摸索し得、而して敵を屈する要訣を悟了するからである。而して將帥の眞價は、過失によつて計るべきものでなく、其の精緻な計畫の規模、或は數によつて量らるべきである。』と。

ナビエはウエリントンを以て、ナポレオンと格段の等差あるものとはしてゐない。彼れの此の説は永く記憶せらるべきものである。如何となればそれは、最も偉大なる將帥は、最も過失少なき人であるといふ、淺薄な説を反駁するからである。然かし此の説も總べての單純な消極説の如く、吾人を十分には感服させ得ない。と云ふのは球戯に於いて、最強打者は決して危險に陥らず、又敵に機會を與へずして球戯を終るとも云ひ得るからである。フランス人は當時ウエリントンが安全な非活動的戦術を採るのを馬鹿にした。然かしサラマンカ、ヴィットリア、及びウーートルローは、此の嘲笑に對する彼れの痛烈な答であつた。彼等フランス人は彼れを侮蔑したが故に、彼れは彼等の元帥を破り、遂には彼等の皇帝をも破つたのである。或る一面から見ると、彼れはナポレオンよりも偉大な人物であつた。

殊に目的を達する手段を擇む賢明さに於て、匹敵し得るものは一人もない。今次に二つの實例を擧げて見よう。ナポレオンはモスコウに獅嘯付いて居た爲めに、精銳の軍を失つたのに反し、ウエリントンには半島戦争の際、莫大なフランス軍の來攻に逢ふや、安全主義を取つてマドリッドを放棄し、それを以てヴィットリアの役に役立つ兵を保持することが出來た。又ウ・イトルローの戦役では、公爵ウエリントン(は麾下のヴァンデリアとヴィヴィアンの騎兵旅團を徒らに戦線に送らずして後方に控置し、機到來と知るや、ナポレオンが此の日の運命を決するものと見做した一道路にこれを進出せしめた。ナポレオンがウエリントンに智慧なしとせる粗蕪な所説に悔いた時は既に遅かつた。ウエリントンの識斷は常に光彩あるものではなかつたが、全く正確であつた。而して此の正確なる識斷が、運命を滅亡に赴かせる、制御し難い諸性能を、厳格な統御の下に保持したのである。

斯くして常人の到底想像することが出來ない程偉大であつた、ナポレオンの軍事的能力の上にも亦公平な『自然』の平等を欲する力が働いた。即ち威嚇の行使

と超人的威力とは、人類を自己保全の爲めに結束させるからである。リーダーは大衆を率ゐて起つ。彼等は何から何まで戦争王と競争し得る力は有つてゐないが、彼れがやり過ぎた時は速かに報復を加へる。ナポレオンが少壯時代に持つてゐた強烈な『自己を識る力』を、晩年まで保持してゐたならば、連戦連勝によつて、自分の明確な批判力が偏曲し、又大勢力を持続するに缺くべからざる所の憑據を量察する性能が毀損されてゐるに氣が付いたであらう。即ちナポレオンの没落は、彼れの性格を透して働き而して勝利の窮りなき足跡に附纏つたネメシス(懲罰の神)の下した罰責によるものと稱し得る。

第四講 立法者

若しナポレオンに秀でた一事があつたとしたならば、それは各人に適する、満足な法規を案出し、すべての利害を商量したことにある。パスキエ備忘録。

『進軍する無差別』 此の語はよくフランス革命軍を解明する。故に平和及び秩序回復の希望が油然として起つた時には、最大なる將帥が又最も堪能な國民の指導者であることは當然であつた。何故ならば事實軍隊を統率する天分と、社會組織を組立てる天分とは、別方面に於ける別種のものではないからである。成功する將帥は、事件の蓋然的な進路を豫見する才能、衆人の性格を洞察する能力、相反する利益を調和する正しき鑑識等を具有しなければならぬ。吾人がこゝまで檢察して來た通り、ナポレオンは『戰爭學は他の凡べてのものを包含する宏大無邊の學問である』と云つた。確かに武人は屢々立法者或は行政家としても卓越し

て居る。ペリクレス、シーザー、カロロ大帝、アルフレッド大王、ウィルム勝王、エドワード一世、クロムウエル、ペテロ大帝、ワシントン、フレデリック大王等の経歴がそれを證明する。

ナポレオンが立法に其の偉大なる手腕を示したのは、少壯時代の熱心な自己修養に負ふ所が甚だ多い。彼れが古今の主要な國民の歴史と政治の書物に書き入れた夥しき註釋は、如何に此等國民の爲した事蹟に、深い興味を有してゐたかを物語つてゐる。其の一二の例を擧げて見よう。曰く「ベルシア人は犯罪の刑罰を宣告するのに、罪人の爾前の経歴を大に參酌し、而して又全生涯に互つて爲した善行を、一犯罪によつて抹消し去ることを許さなかつた。」と。又スバルタの歴史を研究しては、其の中で殊に半ば物語的である、リコルゴスの立法に特別な注意を拂つた。リコルゴスは王權を拘束し、市民の勢力を強大ならしめると共に、その増長を抑制し、而して彼等を専制政治及び無政府状態の兩者より庇護しようとした。ナポレオンは云ふ、「リコルゴスは愛國心を以て、國民を鼓舞する必要を認め、然

かしそれも或る程度に止むべきを知つた。又同時に國政に取つて極めて重要な支持となる其の『平等』なる特性の爲めにデモクラシーを擁護するを必要とした。故に彼れは耕作地を國民に等分に分與することを圖り、金銀貨幣の使用を禁止し、鐵貨を通用せしめた。」と。彼れ(リコルゴス)の制定した、あの國民が共同の食堂で會食する規則も亦ナポレオンの意に適つたものであつた。又更に第二講で述べた通り、此の年若いジャコペン黨員はルーソーの獨斷的な國家統一の意見を信奉し、政治的社會的の統一を破るものは其の何たるやを問はず、凡べてそれを攻撃した。即ち彼れの信條の第一は、國民を代表する中央權力の政治に存した。

ジャコペン黨員時代彼れの懐いた上述の如き根本觀念は、青春生活の幻滅、及び戦争と云ふ峻嚴なる事實の爲めに歪曲せられて了つた。然かしそれは消失したのではなくして、彼れの心の奥底に潜在し、思想を充實し、事物の校比を暗示し、議政府とする演説を力強いものとした。彼れとして政治上最も重要な仕事は、總べてを統一すること、各州間に横はる關門の撤廢、特殊な階級制度及び教區制の廢止、國

民に唯僅かに自治の形式を許し、而して彼等を代表して執政すること、中央政府に對し、過去の周密な研究、現在の要求に關する鋭敏なる理解、及び將來に對する合理的な希望等に應處し得る知識と力とを賦與し、其の自由に活動し得る範圍を擴大すること、これであつた。

而かもナポレオンが世界の原動力の中心に入つたのは幸にも、革命の熱情が、フランスと其の屬邦の舊い障壁を殆んど總べて掃蕩し了つた時であつた。茲にジ・コペン政治の理論が、恒にフランスに於て勢力あつた君主政治の本來の面目と一致したのである。此の故にフランスの生命に宿る新舊二要素は、知識の専制政治が興隆するに、大なる援助を與へた。即ち専制共和兩政治の代表者たるナポレオンは、嘗つて相衝突した此等兩勢力が、終に融合した點に立つて、理想に向つて押進み、而かも何人と雖も未だ嘗つて擔はざりし幸運に駕御したのであつた。騷擾の十年に次いで來たものは秩序であつた。これは自然の原則である。斯くして彼れは立法者となり、行政者となり、更に彼れの意の儘に、國家の立法と行政との兩

機能を同一視し、それらを單純化すべく歩を進めた。フランスの王政、フランスの革命政治は共に、ナポレオンの中に融け込んで了つたのである。

ナポレオンの行政的天才は、千八百年非常手段を以て遂にフランスを彼れの掌中に收めた。而かも尙イタリア、マルタ、或はエチプト等に於ける彼れの政治上の組織に注意するものは、驚くべき力量の發現を認める。彼れの政治の修業は千七百九十六年、北部イタリアで始まつた。彼れは先づ第一にフランス軍の手で征服、或は解放された此の地方の行政權を、確實に掌握し、一方本國總裁政府に對しては、ロンバルド人やモデナ人の獨立を欲する熱望を彌が上にも燃え上らせて、總裁の自分に加へる督隷權を制壓し、自由自儘に振舞つたのであつた。彼れは又被征服人民や敵國軍隊から物品を盜掠するフランス軍御用達、其の他のものの、委託物費、涓を、出來得る限り制止した。尋いで彼れは此の様な犯罪を審問する委員會を設定し、そして告發された事件の調査に、一ヶ月の餘裕があるならば、凡べての犯罪を狩り立てると揚言した。

更に吾人は當年僅かに二十七歳の青年であつた彼れが、イタリア人に臨むに如何に確固たる方針を以てしたかを、注意すべきである。オーストリア軍に最後の決定的打撃を加へた後、彼れはフランス總裁政府に向ひ、北イタリアに新らしく起つた諸共和國の國民に、本當の自由を與へる爲め、當時それら國內の代議士選舉を左右した、僧侶の勢力を削減すべく努力する旨を通告した。而して彼れは此の目的を達すべく、ミランの新共和政府の政權執行を、責任を以て停止した。彼れは千七百九十七年五月八日附で、パリーの總裁政府に、次の様な手紙を送つてゐる。『吾人は今四種類の委員會の下に、軍法、民法、會計法、及び行政法を起草してゐる。此等は結局憲法の先驅となるものである。余は先づ第一に總べてを淘汰しようと思ふ。斯くして三週間以内に此の新らしいイタリアの共和國は完全に組織され、そして獨り歩きの出來る様になるのを希望してゐる。』と。茲に初めて此の年若い將帥の驚嘆すべき精力と敏腕とが見られる。ナポレオンは又、當時宗教と在來の社會組織とに、猛烈な反對を持つてゐた、イタリアジャコペン黨員が、從來社會の中

欠

欠

F. エチプトの法律及び教育の狀態如何。

G. エチプト人の思想に其等法律及び教育を適合せしむべき改良方法如何。自分は嘗つて一學術研究會が實用の爲めにこれより以上切實なる衝動を受けたことがあつたかどうかを疑ふものである。

エチプトの行政に就いては、ナポレオンは十四ヶ州を管轄してゐるフランスの將軍連が擇んだ、名士會を召集した。言ふまでもなく、それは單に軍政の本體を隠蔽する、薄いスクリーンとして役立つに過ぎぬものであつた。然かし彼れが配慮も其の甲斐なく、西洋の能動的精力の體現が、頑迷なる東方の『受動』と邂逅した結果として、必然其の間に軋轢が起らざるを得なかつた。數多い軋轢の典型として次の様ながある。ナポレオンは一つの命令を發した。それは凡べてエチプト人はフランスの旗色である三色の帽子リボンを着け、ナイル河の船舶は總べて三色旗を掲揚すべしと云ふのであつたが、千七百九十八年九月四日、斯の如き煩瑣な干渉は、モズレム教徒を憤らせ、遂に十月二十一日カイロの暴動を惹き起したので

あつた。

フランス軍がエジプトを占領してゐる間、其の商業は、戦争及び夥しい新規則——土民を當惑せしめ且苛ら立たせた——の兩者によつて、大損害を蒙つた。ナポレオンが本國の危急を知つて歸國してから後、残つて其の繼承者となつたクレールの手紙は、缺損の程度をよく説明してゐる。フランス軍の財庫は全然空虚となり、將卒に給與する俸給は四百萬フランも滞り、六百萬フラン以上の借金が出来た。そしてナポレオンが強徴金を取立てたので同國は急激に疲弊し、其の爲めに軍隊の要求を満足させることが出来ず、又泰西式の積極政策の要求にも應じ得られなかつた。これらは明かな事實である。又クレールは、大砲小銃、或は火藥の製造は失敗し、兵士は身に襤褸を纏うてゐると述べてゐる。空氣は非常に險惡である。クレールは更に、ナポレオンが突然エジプトを去り、彼れ自身を久しい以前から危急の状態に陥つてゐた財政問題に直面せしめたことを、激しく攻撃してゐるからである。疑もなくナポレオンはマルタに於けると同様、エジプトに於て

も政策の對象を誤察してゐた。東方人が信條だとか或は習慣とかには、深く意を配るが、ヨーロッパ人の重要視する學術だとか繁榮だとかには、全く無關心であるのを、彼れは忘れてゐた。不可動性の東方に於ては、慎厚と自制が政治道德の第一である。立法者としてあれ程立派な天稟を有してゐたナポレオンも、此の最も重要な資質を缺いてゐた。彼れの性質は東方の統治に必要な『慎重』の限界内に止まるべく餘りに燥急であり、其の自信力は餘り深く根ざし、エネルギーは餘りに多面的であつた。されば彼れは歸國して、パリに入り、東方征服者として歓迎はされたが、事實に於て彼れの背後に半裸體の軍隊と、疲弊し盡した國土とを棄て、來たのであつた。

エジプトに於ける政治上の大失敗は、ナポレオンの抱いた青年的の意氣込を弱めたやうに思はれる。然かし彼れはフランスに對しては確かに雄偉な技能を發揮したのであつた。其の多面的な活動力は、孤獨を喜ぶ憐れな東方人を統治するよりも、長らく紛亂裡にあつても、なほエジプトに比して繁富な國土を統治する

に一層よく適してゐたのは明かである。エネルギーは後者の場合有效であると同程度に前者に對しては有害なものである。然り、フランスもエネルギー過剰の爲めには苦しんでゐた。然かし此のエネルギーは政黨の争鬭を現す所のものであつた。各黨は政權を獲得した短時日の中に、それぞれ布告を發する、而かも其の頻繁なること一年間一千度にも及ぶが、其の把持してゐる政權を、陰謀で成功した反對黨の爲めに忽ち奪はれて了ふ。而して反對黨は又同じことを繰返す。即ちフランスは此の朝令暮改の浮動政治に害されたのであつた。斯かる舞蹈病に苦しんだフランスには鎮靜劑が必要となつた。ナポレオンは驚嘆すべき診斷を下してこれに投藥したのである。

世間は千七百九十九年ブリュメール(十一月)のクーデター前の、フランスの災禍を恐らく過大視してゐる。社會的方面から見ても、又軍事的方面から見ても、最大の危期は此の時既に過ぎ去り、對佛聯合軍は各方面で、國境遠く撃退されるし、内では過激なジャコペン黨は撲滅され、諸事百般悉くシエイエース指導の下に秩序を

立てられ初めたからである。然かし此の冷血動物シエイエースの勢力はナポレオンの前に凋萎した。第一統領(ナポレオン)は豊富な機智と熱烈な誠心とを以て、シエイエース編纂の憲法を改正することの適是なることを説明した。曰く、『吾人は何を爲すべきであつたか。シエイエースは各方面に影ばかり投じた。然かし其の影は何處かで實體を求めようとした。而して即ち予は此の要求を充たすものである。』彼れの言葉は事實であつた。彼れは此の複雑な機構の中樞に座し、其れを制御しフランスを整へた。茲に至つて從來他動的の衝器に過ぎなかつたフランスの憲法は、變じて能動的の機關車とはなつた。唯不思議なのはシエイエースが、民主政治が獨裁政治に變つた此の大變化を平然默過したことである。事實シエイエースはローデレルに、『余は考へ抜いた揚句、事の整理は唯一人で事足り、そしてそれはボナパルトより外にないといふことが解つた。』と云つてゐる。又或る時彼れが云つた様に、ボナパルトは文官の才能を併せ有する唯一人の武將であつた。全く當時他のフランスの將官連は粗野で且無智な人達であるか、又は

社會的事業に關與することを好まない一介の武弁に過ぎなかつた。唯一つの例外はベルナドットであつて、彼れは他の人達とは異つてゐた。モローは戰に臨んでは果敢堪能であつたが、政治にかけては全く小學生と擇ぶ所がなかつた。彼れは或る時ナポレオンに反抗して、彼れ(ナポレオン)から貰つたレヂ・ンド・ノールの勳章を飼犬の頸に懸けた程の男であつた。

大人物が缺乏してゐたことは、ナポレオンに取つて非常に好都合であつた。抑もデモクラシーは、大衆が絶えず自信、自尊、及び希望によつて涵養鼓舞されてゐなかつたならば、成功は望み難い。大衆が意氣沮喪したり、躊躇逡巡する様では失敗である。フランスは恐怖時代以來、屢々蹉躓したり動搖したりした。其の五ヶ年の間有爲な指導者がなく、只口先許り達者な演說屋ばかり多かつた。練達な實行家、賢明な行政家を後へ遙かに棄て置いて、修辭にのみ巧みな饒舌家が易々政權に近づくことは、デモクラシーの壞滅である。此の事實は遠くギリシアのクレオン以來變らざる所のものであつた。而して斯くの如き變態の危険は、堅忍不拔の政

治家、政治の舞臺監督の出現によつて輕減される。然しながら古來大衆の運命は、概して雄辯を立身の第一條件とした人々によつて決定された。そして苦い經驗を經た後初めて局面が實際家に好い様に展開したのであつた。フランス程動搖の甚しかつたのは、其の比を他に求め得られない。千七百八十九年(大革命の勃發當時)には、到る處に雄辯家が充満してゐて、言論は非常に勢力があつた。そして暫くの間は言論を以て、徹底的に事を行つて行つた。ミラポールの友人デ・モンは、『ロンドンでは誰一人國政を變理しようなぞ考へないのに、パリに於ては猫も杓子も政治を行ふ能力ありと己惚れてゐる』と皮肉つてゐる。

如上の事實は、フランス革命の推移とナポレオンの興起との一部面を物語るものである。千七百九十九年に至つて時勢は遂に實行家に運つて來た。若しナポレオンが軍司令官と終身官の職權を併有したならば、取りも直さず、彼れの霸權は保證されたものであつた。而して彼れはそれを完全に實現した。古代ローマ人に見る如き、大事業を組成し得る其の天稟は、衝天の愛國心によつて、又舊フランス

の舐めた苦い経験と、新フランスの抱負を比較し得る其の歴史的知識によつて而して革命時代の囁語を棄卻し、事象を有りのまゝ直視せんとする決心によつて刺戟せられた。嘗つて國民議會は抽象的な人物に對して頗る御丁寧に立法した。此の法律上の抽象人物が實際の人間と異なつてゐるのは、丁度牛肉のエキスが生牛でないのと同様であつた。ナポレオンは假想人物を對象とせず、パリイ人、ノルマンディ人、プロヴァンス人を對象として立法しようと思懸けた。これに先んじて千七百九十七年九月、彼れはフランスの立法家に對して、次の様な侮蔑の言を吐いた。曰く、『周囲に向つて眼もなく、耳も無い立法部は、最早時の拍子によつて通過した夥しい法令で、吾人を控制することは出来ない。此の機關は一の矛盾を以て他の矛盾に代へ、煩瑣なる法典の裡に、無法律の國民を遣して行つたものである』と。ナポレオンは現行法律に大淘汰を加へ、削除されないうで殘存したものは、それを遵守する方針を取つた。立法の第一要素は簡明と實行とである。

彼れの法令改正に關する最初の大努力は、千八百年二月地方政治の方面に行は

れた。他の方面でも大體左様であつたが、此の地方政治に就ても、革命政治家は改革に逸つて、飛んでもない遣り過ぎをしてゐた。彼等は國內を非常に小さく細分し、その一區劃毎に選舉によつて成立した議會を置いた。其の結果選舉が度重なるので、選舉民は投票場へ赴くのを面倒がり、且此の郡區制度の役人の位置を填充することを厭ふ様になつた。フランス國民の三十分の一が、地方官の何かの役目に就いてゐたといふ事實から、此の制度が如何に多く國民の知識と、愛國心とを必要としてゐたかを判ぜられたい。人民の利益を計るべき法律が、人民の知識より進んでゐる時は、いつも此の様な目的と喰違つた結果に立到るものである。頻繁な選舉は農民を倦ませたが、投票には決して疲れない二つのクラス、即ち運動屋と選舉狂には、面白かつた。間もなく此の組織は全部破棄されて了ひ、其れに代つて、パリイから直接指令が發せられ、大體宣傳委員即ち地方ジャコベン・クラブに依つて、地方政治を監督する様に改變された。改革はされたけれども、千七百九十九年に到つては、諸制百度の頽廢其の極に達した。茲に於てナポレオンは先づ第一

に、此等焦眉の急に迫つた問題に意を注いで善處した。これより先既にシエイエースと其の仲間は、此の問題の解決法を發表してゐた。それは即ち地方政治に對して責任ある州知事を、パリ(中央政府)に於て任命することであつた。然かし乍ら千八百年二月十七日、ナポレオンの發布した法令は、前任者シエイエースの實行した如何なるものよりも、思ひ切つて峻烈なものであつた。地方の自治政治は茲で一新制度に向つて進んだ。而して此の度の制度は、發議權も行政權も、悉く皆第一統領に歸屬するものであつた。各州の最高權は、國家の首長たる第一統領が任命し、且彼れに對して執政上の責任を有する。知事に屬した。又知事補なる役目にあるものは、州より狭いか或は新らしく設けられた區域即ちアロンデスマンを管轄した。更にメイヨルは一層狭い地域のコミューン(町村)の行政事務を司つた。而して此れら知事、知事補、及び國內の小都市村落の首長たるメイヨルは、第一統領ナポレオンの任免する所に係つた。然かし此の内メイヨルは、或る場合には知事が任命することもあつた。而して此れらの官吏は凡べて、選舉によつて成立した

地方議會によつて輔佐せられた。然かし此れら各議會の權限は、一年の中僅か二週間の會期中にのみ限られてゐた。それから此等地方議會には其の選舉區に對して、國稅を割り付けたり、地方稅を議決したりする職權が與へられてゐた。

斯くしてナポレオンは、最近十年の間、選舉によつて成立した團體が、局部的に且發作的に運用した政治機關を、一氣に彼れ一己の管理の下に置き換へて了つた。これと同様な變化は、又治安判事に向つても加へられた。即ち以前人民によつて選舉された此の役目は、今は州知事——ナポレオンの意の儘となる——が任命することゝなつた。然かしこゝに見逃がしてはならぬ最も驚くべき事が残つてゐる。それは國政の監視機關である護民院が此の様に民意を抑壓する、獨裁政治的法案の通過に對し、毫末も反對の意志を表示しなかつたことである。即ち茲にフランスは殆ど一足飛びに、地方自治制より、壓制の前驅である獨裁政治に移つて行つたのであつた。

シエイエースの當を失した政治組織は、パリに行はれた此の變化の進行を一

層迅速ならしめた。彼れが編纂した憲法は、立法機關を四部門に分けた。即ち法律を立案する議政府、第二が法案を單に批評するのみで、修正や削除が出来ない護民院、第三が法案を討議する權能なく、唯其の可否を議決するのみの立法院で、最後が此の奇妙な組織の締括りとしての元老院であつた。元老院の主な役目は、他の三部門を統轄聯絡するにあつた。或るアメリカの剽輕者が、アメリカ合衆國の憲法は、アメリカが自分の聲を濁してまで喋り得る、巧妙な仕掛であると云つてゐるが、シェイエースの憲法もこれに多くの類似點を持つてゐた。此の憲法では、護民院の任務は論ずることであり、立法院の役目は語らざることであつた。又ナポレオンが痛評した様に、『一百人(護民院)は喋る外、何事をも爲し得ない。そして三百人(立法院)は一言も云はずに投票するのみで、一言の批判をも爲し得る權能を與へられてゐない。要するにこれは庸智の昏夢に過ぎない。』第一統領は直に護民院の組織を改變し、定員百人を五分し、其の一部二十人宛を、毎年順次に改選することを元老院を利用して宣言した。此の改變は取りも直さず、本來憲法の番犬であつ

た護民院を、第一統領の傀儡に墮落せしむる計略であつた。ナポレオンは千八百一年一月二十九日、護民官中最も硬骨な分子、殊にベンジヤミン・コンスタン、ドーノ、或はシ・ニエ等を酷い言葉で攻撃した。曰く『彼奴等、精神治療家だ。水に突込んでやるといふ。奴等は余の着物に寄生する害虫だ。諸君は余がルイ十六世の様に、自分自身を敵の攻撃に委すと思つてはならない。余は絶対にその様なことは許さない』(Thibaudeau, "Bonaparte and the Consulate" 三十一頁参照)

千七百八十九年以來、フランスで非常に旺盛であつた自由を求むる本能的衝動が、一個の專制的精神の爲めに、苦も無く征服されたことは、無類の驚異である。屢擾に疲れたフランス國民は、千八百年ニボースに起つた王黨員の隱謀後、同事件には何の關係もなかつた。シ・コペン黨首領に加へられた、無理な流刑處分にも、不満の色なく此れを黙過した。而して千八百年から同二年に互つて、ナポレオンはオーストリアを破り、又イギリスとは非常に有利な平和條約を締結し、且コンコーダットとして知られた、ヴァチカン宮(ローマ法王)との有名な協商により、農民と敬虔

なローマ正教徒の後援を得た。彼れの此の問題(コンコordat)に對する處置は、如何に數多き形容語が示すよりも、一層明瞭に彼れの性格を現はすものであるから、自分は幾分丁寧なこれを觀察して見よう。

彼れは北イタリアにゐる中、宗教の力とフランスの正教徒の誠實とに、非常に深い印象を與へられた。其の結果彼れはマレンゴの役後程なく、大僧正マルティニアナに向ひ、若しフランスの正教徒とコンステイション・ナル派の僧正全部が教權を放棄したならば、彼れは進んでフランスの教會禮拜の儀式回復を、ローマ法王と協商する心持のあることを告げた。其の後早速彼れは、第一統領として、フランスの教會が分屬してゐた二つの宗派から、公明に選ばれる有徳の教師を、ローマ法王の僧侶叙任權に代つて、自分が任命することを希望した。

世間周知の通り、千七百九十年革命政府の發布した法令は、全フランスの教會を、依然法王に對する忠順を大切に保持するローマ正教と、國民議會の新法令に服従を誓ひ、ローマ法王への歸依を放棄した、コンステイション・ナルとの二派に分

割した。其の後ローマ正教の僧侶達は、革命の敵と見られ、革命の騒亂の最も悪化した時には、コンステイション・ナル派すらも、教會の禮拜式を司ることを禁じられ、テロリストや自稱テロリストが唱へた無神論は、千七百九十七年から九十九年に互つてフランスの人心を甚しく荼毒した。然るに此の時ローマ教僧侶の不撓勇敢な行爲は、依然人皆な濁世の繁榮に眩惑された此の時勢とは、没交渉な道德の威嚴を以て教會を裝甲してゐたのであつた。斯う云ふ風であるので、事態は僧俗の協調を欲してゐた。斯の時ナポレオンは第一統領に就任し、此の對ヴァイカン協商(コンコordat)の遂行に、未だ嘗つて見なかつた才智と活動とを示したのである。

實際時運はナポレオンに取つて絶好無二であつた。これより先、革命家は僧侶に、使徒繼承權に關する信條と矛盾した宣誓をさせようとして失敗した。乃ちナポレオンは革命主義者が大衆の道念に關して爲した、念の入つた不必要な干渉を撤去せんことを決意しようとした。然かしこれと同時に一方では、革命の際沒收

したり買収したりした寺領も、これを僧侶に返さず、依然農民の爲めに保留し、又舊王朝時代に行はれた寺院保護の十分の一税も復活せず、農民の自由を保護する方針を樹立した。斯く彼れは物質方面で教會を抑へ、國家の支給する僧俸のみに頼るやうに強ひたが、此の政策は彼れの政治上の目的と非常に好く合致したばかりでなく、又千七百八十九年にミラボーの抱いた豫望——それは後幾干もなくジヤコベン黨によつて破壊されたが——を充たす所のものであつた。革命家の行爲の中でも、第一に國民の道義心を冒瀆し、第二に國家が寺領を沒收した代償である僧俸を廢止した事程愚劣なものはない。茲に於て問題は強剛伶俐な人物の裁量を必要とした。ナポレオンは即ち農民の疑懼を安んじ、僧侶の憤恚を慰和し、宗派の分烈を癒合せしめ、而して又強大なるローマの教權を身方に引入るべく、行動の針路を撰んだのであつた。彼れの一生涯には談判や交渉が可成り澤山あつたが、これ程多量の利益を獲得し、多くの怨恨を溶解し、夥しい敵を身方としたものはない。彼れは並み並みならぬ鋭い判斷により、此れらの利益は、法律或は公安に

貢獻することを豫見した。されば彼れのヴァティカン(法王)に對する交渉が困難なる重要案件の解決を見るまで、議政府でも知らなかつた程非常に迅速で又巧妙に、且秘密の裡に運ばれたのは尤もなことであつた。

ナポレオンが彼れとローマ法王との協商が近付きつゝあることを最初に暗示したのは、千八百年八月マルメイゾン宮殿の庭園でローデレルと會談した折であつた。ブリュメールの變にナポレオンの有力な支援者であつた彼れは、議政府の内務部長であつた。其の巧妙な整理的手腕と輿論を表示する才能は、彼れをして優秀な顧問たらしめた。此の時ナポレオンは、官吏の公物私費について謗語してから引續いて、フランスが過去は勿論現在に於ても依然腐敗してゐることを非常に慨嘆し、而して此の國の最も必要とするものは道德だと強調した。而して更に言葉を續けて云つた。『然かし宗教無しで何處に道德があるだらう。』と。ローデレルがこれに對して、宗教は國家に隸屬すべきもので、國家を支配すべきものでないと敢言した時、ナポレオンは次の様な面白い言葉を加へて、彼れの意見に贊成し

た。「宗教無しにどうして社會の秩序を維持することが出來よう。社會は運命の不公平無しには存立し得るものでない。そして人々が宗教を離れては此の運命を我慢することは出來ない。例へば茲に一人の男があつて、飢餓の爲めに將に死なうとする時、傍に飽食の結果病氣となつた人があつたとする。さうした時彼れは、一の典據によつて、世界に貧者と富者の並び存するは、神の意志である。然かし今後は永久に、物の差別は現在と異つて現はれるだらう」と諭示されでもしなければ、此の甚しい差違は到底諦らめ切れるものではない。」と。彼れはこれと同様の意見を、ほかでも屢々發表してゐる。「彼れは宗教を獨自のものとして考へないで、寧ろこれを政治上の道具として取扱つた。即ち彼れはそれを人心不穩の場合注射して、偉大な效力を奏する政治的緩和劑と考へ、又警察官が單獨に、餓ゑた貧民に拮抗し得ない場合、これを鎮める精神的鎮靜劑を用意してゐるものとして、僧侶を觀たナポレオンが法王と協商することは、此の他尙一の利益を彼れに與へるものであつた。それはローマ正教が締盟者となる時は、勤王黨員(ブルボン王黨員)をも身

方とすることを期待し得たからである。此の交渉を開く動機は、千八百一年六月十日マルメイゾン宮の庭園で、樞密顧問のテポードウと交した會話の中に、甚だ明瞭に表はれてゐる。

過ぐる日曜日に自分が獨りで此處を散歩してゐた折、ルウエル教會の鐘を耳にして、其の音に深く感動させられた。腦裡に呼び覺まされた幼時の聯想は、頗る著明であつた。余は獨語した。「余と同じやうな人間が、これと同様に衝動されるならば、其の單純な信仰心に與へらるゝ印象は如何に深いものであらうか。かの哲學者や思想家はそれを何と云ふだらうか。一つの國民は一つの宗教を有たねばならぬ。而してそれは政府の支配下に屬すべきものである。然るに現在の狀態は敵のイギリス政府に養はれる脱走貴族(大革命の難を外國に避けた)の僧正五十名が、フランスの僧侶を管轄してゐる。彼等の勢力は、當然我が宗教界から一掃されなければならぬ。而かもこれを爲

し得るものは、ローマ法王の權威以外には求められないのである。多分法王は彼等を免職するか、或は辭職させるだらう。其の爲めに吾人はフランス國民の大部分が信奉する、ローマ正教を承認し、それを組織立てねばならぬ旨を宣言すべきである。乃ち第一統領は五十人の僧正を法王に推薦し、法王はそれを正式に任命する。僧正は少教正を任命し、國家は彼等に俸給を與へる。故に彼等の凡べては政府に忠誠を誓約する必要がある。服従を拒んだものは放逐され、政府反對を宣傳するものは懲戒の爲めに僧院長に引渡される。法王は政府が教會の財産を賣却することを承認し、又共和政治に對して感謝祝福するであらう。其の代り吾人は教會の祭奠に於て、「神よガリアを救ひ給へ」を歌はう。茲に法王の上諭があるが、それには多少變更を要する語句の介在するを認める。民衆自ら欲するならば、余を目してローマ教徒と呼ぶも可なり。事實余は何の宗教にも歸依してゐない。エチプトにあつた時は一個のマホメット教徒であつた。而して今フランスに在つては、國民の爲めに

カトリック教徒であつても宜しい』と。

こゝに簡單ながらコンコードットの筋書が解る。ナポレオンは即ち、ルウエル教會の鐘聲に鼓舞せられ、又全フランスの僧侶を、五十名の脱走僧正の監督から、法王が任じ、第一統領の命に従ふ、同數の新僧正の配下に移すといふことに刺戟せられて、此の交渉を始めたのであつた。とかう信じ得られるのである。パリに於ける法王代理の大僧正達との商議に、彼れは例の明快な機智と器量とを示して、屢相手の専門である教會史や宗制等に就いても、これら老巧な辯論家連を駁撃した。古來如何なる統治者も、此の時彼れが電光的に専門家を反駁し、それを混惑せしむべく、論題を俄仕込する程の巧みさを示したものはない。接衝を重ねてコンコードットは、千八百二年四月十八日の復活祭に、ノートルダム寺院で堂々と發布された。ナポレオン始め三統領は大祭典に列すべく、威儀凜然これに赴いた。茲に注意すべきは、ナポレオンの家族が初めて盛裝して、これに參列したことであ

る。各國大公使や高官連も亦威儀を整へ、従者には制服を着せて、臨席することを求められた。此のナポレオンの要求は、曩に共和的單簡を保持した人々に取つては、一種迷惑に感ぜられた傾きがあつた。如何となれば、絢爛たりし其の行列の末尾には、序列の番號を臨時に畫いたり、或は間に合せに貼り付けたりした、普通の貸馬車數輛が認められたからである。

コンコーダットの成立は、恐らくナポレオンの生涯で、最大の成功であつたらう。であるから、其の後彼れが法王ビウス七世を酷遇するのを慎んだならば、ローマ正教は彼れの帝位の最も強い支柱となつたに違ひない。コンコーダット成立の當初、彼れは宗教が政治に及ぼす影響の大きいのを知り、これを丁重に取扱つた。千八百四年十一月、翌月パリに舉行せられる彼れの戴冠式に於て、彼れに戴冠させる爲めに年老いた法王の來るのに際し、彼れは官吏に、二十萬の兵を率ゐる大武將の如く彼れ(法王)を待つべく命じた。此の注意は、極めて微薄な感情や些細な習慣までも、少しも見逃さずに利用し、以て如何にせば自己の勢力を伸張し得るかの手段を知悉してゐる、人間性の犀利な觀察者、ナポレオンの特性を良く示してゐる。

此の立身に役立つ彼れの性能を示す一例として、帝政實施の宣言をしてから後、間も無い千八百四年五月二十二日に、或る樞密顧問に云つた彼れの言葉を引用して見よう。『余は遣外傳道使の制度を、再興しようと思ふ。その理由は宣教師をして、アジア、アフリカ、或はアメリカいづれに於ても、其の訪れた土地を偵察せしめ、余に取つて非常に便利だからである。彼等の着用する神聖な僧服は、彼等を保護するばかりでなく、其の政治上或は商業上の研究踏査を隠蔽するに役立つ。傳道師の主長は最早ローマに居らずに、パリに駐まるべきである。』と。これはローマ正教傳道委員に對する、ナポレオンの且現代的な見方であつた。

ナポレオンは先に述べた様に、僧侶を後援する價値を明白に知りながら、却つてそれを疎隔する馬鹿な行爲を敢てした。それは彼れが組織的信條によつて、教會を統御しようとする方針を採用したことである。其の結果遂に彼れは法王を千八百九年五月、ローマから逐出し、サヴァナヤフアンテヌブローに監禁し、コンコ

イダットによつて成立した、平和事業の大部分の不履行に至つて、幕を閉じた、長いそして激しい争闘を惹起した。此の一個の防禦力なき老人に對する無益な迫害は、ナポレオン帝國の運命に取つて、戰場での如何なる敗北よりも、一層重大な悪影響を及ぼしたものであつた。第一統領として非凡な手腕と巧妙な懐柔を示した彼れが、遂には露骨な迫害にまで及んだ思ひ上つた侮辱を以て、ローマ法王を遇したことは、彼れの性格及び經歷に於て見る謎の一つである。

ローマと結んだ協商は、ナポレオンの他の事業の出發點となつた。時の順序から見ても、又重要さから云つても、先づ第一に擧ぐべきものは、レジ・ンド・ノールの制定である。此の新制度の意味を了解する爲めに、吾人は千七百九十九年の憲法により、全フランスの成年男子から復式選舉を以て、約五千人の名士が選出されたことを想起する必要がある。此の名士は勿論國民からの被選者であつて、此の中から更に立法者と主要な行政官が選出されるのであつた。此の國家の名士の選

欠

欠

三年に定められたシンシンナタスの勳位を廢止したことを、嘆稱せざるを得ない。千八百二年春から夏へかけての、立法上の成功によつて、ナポレオンはフランスの將來を決定した。フランスは彼れの覇權を默許した。而して同年八月二日、彼れは自分の繼承者を指定する權能を保有する、終身の第一統領となつたが、それと同時に又、護民院に大打撃を加へた。當時同院の勢力は非常に大きいものであつた。かの保守的な元老院の無法な行爲すら、同院の嚴正なる批評を如何とも爲し得なかつたものである。護民院はレジ・ンド・ノールの制定と、民法・典の或る條項に反對し、大に彼れを苦しめたので、彼れは護民官を、「何處に行つても出逢ふべし」と罵つた程であつた。更に彼れは云ふ、『護民院はこれを數部門に分ち、其の論議は祕密に保たれる様にしなければならぬ。さうすれば彼等は欲するが儘に無駄口を叩くことが出来る。』と。斯の様な事情から、彼れは護民院の權限を減少しようとして心掛けた。彼れの希望は、千八百二年八月四日の元老院の議決の結果、法律となつて現はれた。即ち護民院の議員は五十名に減ぜられ、議員は元老院の選擇

する所となり、定員を五分し、其の會議を秘密會とした。これと共に彼れは自分に阿諛する團體、元老院の權限を擴大し、其の命令は立法院を通過した法令に取つて代ることゝなつた。其の他議政府は樞密院の創設の爲めに、權能の大部分を剝奪され、全く彼れの意の儘となつた。此れらの改革は、共和主義から專制主義への反動を完成したものである。換言すれば、民衆の總意がナポレオン一個の意志の中へ吸収されたのであつた。

立法者としては、第一統領ボナパルトは、皇帝ナポレオンより遙かに卓越してゐた。此の時代の彼れは未だ、自分に對する反對が微弱ならば敢てそれを壓壞しようとはしなかつた。否、議政府なぞに於ては、議員連の感情を害しない様に、却つてこれに媚びる如き態度すら取ることがあつた。博識温健を以て聞えた一議員ベレード・ドラ・ロゼールは、ナポレオンの臨席に活氣付いた、或る日の會議の模様を、目に見る如く巧に書いてゐる。ナポレオンは屢々同會議に對して彼れの臨席に就いて、抱いてゐる意向を聲明した。蓋し彼れが臨席するのは、決して自分の威勢で

議員連を畏縮させる爲ではないと云ふのである。然かし、チュイルリー宮階段室の太鼓の響は、屢々彼れが出場の第一警報を送つた。いつも彼れは侍従を先導にして、當直の侍従武官等に供奉されて、入つて來た。そして一段高く設けられた席に即き、それから議案に目を注ぎ、或は其の時進行中の議論に耳を傾けた。然かし、それが彼れの興味を引かなかつた時は、深い默想に耽つたり、又は現在の問題、將來の計畫に對し意見を述べたりした。而かもそれは必ずしも常に要點に當つて居るとは限らなかつたけれども、纏つた考を簡潔に且明らかに表はしてゐた。轉々として纏りのない空氣の中へ、彼れが臨場することは、一層議事の進行を遅延せしめた。議論は屢々側道へ逸れるが、誰一人元へ戻らうと考へるものはなかつた。然かし、それ程、フランスの運命を照らす光は赫突たるものであつた。又或る場合、ナポレオンは疑問を穿鑿して、問題の本體を明白ならしめた。此の疑問の穿鑿は、克く彼れの聰明を示す所のものであつた。自分の聰明に對して、彼れは十分の自信を有つてゐた。次の様に彼れが云つた明からさまな言葉が、それを證明する。

曰く『卿は、余が議政府に於て、何故斯く侃諤の討論を許すかを知つてゐるか。それは別でもない、全院中余が最も優れた論客だからである。余は自分自身を、敢て相手の攻撃に曝露する。なぜならば、余は自分を如何に守るべきかを知つてゐるか。』と。

ナポレオンの熱心な研究癖の爲めに、會議の時間はまゝ非常に延長され、時としては晚餐に僅か十五分を費すのみで、午前九時から午後五時まで、繼續されることすらあつた。閉會間近になり議員達が疲勞の色を示しても、彼れは猶ほ元氣満々たるものであつた。そして會議が行詰まつた時には、戲談交りに突如閉會を宣した。又徹宵の會議の時の如き、彼れは常人の弱さに對し、斷然たる隔絶振りを示し、居眠る議員に『おい、君達、僕等は未だ俸給を貰つて居ないぜ。』と揶揄して、彼等を勵ますこともあつた。又屢々彼れは頗る上品なユーモア振りを示した。新法令の極めて専門的な點を討議した時のことであつた。老年で經驗に富んだ法律家トロンシェーが捧げた深い敬意に對し、彼れは斯う云つてゐる。それは千八百一年

十一月十五日のことであつた。『彼れ(トロンシェー)の様な人の言葉は、吾々に取つて全く權威あるものである。彼れ以外のもの(列席者の)は軍人か或は財政家である。立法議員ではあるが法律家ではない。従つて吾々の意見は取るに足らぬものである。此の様な討議に於て、余は屢々十五分後には全然誤であつたと氣が付く意見を、憶面もなく述べてゐる。余は實際自分の貫録以上に價値ある人間と認められようとは思はない。』と。此の時ナポレオンは未だ權勢及び其れに伴ふ有害な影——阿諛——に汚されない最良の状態にあつたのである。

ナポレオンの最大且不朽の事業、フランス法典の編纂に當り、彼れの最も深く念頭に置いた所のものは、相反撥する君主政治の思想と、革命時代の思想とを、調和することであつた。彼は幾多の點で、舊い習慣を再用した。例へば父の子に對し、夫の妻に對する支配權の擴大を主張した如きそれである。茲に於て彼れ生得のコルシカ思想と、大革命の折、民心を支配した自由平等の思想との、衝突を免れなかつた。前述べた様にコルシカの風習では、非常の場合父が子を殺すのを許され、又夫

の妻に及ぼす権力は、殆ど東洋的に絶大なものであつた。一方大革命時代の無政府状態は、却つて家長の権力を重んずる、古代ローマ的思想に赴く反動を助長した。ジャコベン黨の放埒を利用したナポレオンは、今やこれに反する夫の絶對的優越を主張する場合となつた。彼れの言葉は斯うであつた。曰く「夫は妻に向ひ、お前はお前は外出してはいけない。芝居へ行つてはいけない。お前は斯く斯くの人に逢つてはいけない。」と云ひ得る絶對權を有たねばならぬ。」と。然かし氣丈の婦人のこれに對する當然の答は、次の様ではあるまいか。——「若しあなたがさう仰言るなら、私は敢て芝居に行きませう。彼れにも逢ひませう。」と。一考を要する點である。

茲に於て吾々は再び物事の取締や支配統制に就いての、ナポレオンの性向を研究して見よう。彼れは確かに、愛、又それが無い時は、夫婦の名譽、或は個人の名譽は、結婚生活の主要な保護條件であること、並びに餘りに法律規則を増加することは、却つて如上の有益な感情を薄弱にする傾向あることを、知つてゐた筈である。然

るに彼れは總べての點で、強く婦人を壓迫した。彼れの所謂ローマ的思想に従つて、人妻は夫の財産の監理は勿論、自分の財産の監理すら全然禁ぜられた。勿論それを抵當に入れることなどは出来なかつた。其の上婦人は革命以前の時代に蒙つたと同様に、不幸な隷屬状態の下に推込まれた。グリゼルダの時代を作り出すには必要である、精神的虚勢は、彼れが千八百六年二月二十日議政府で、左の如く其の概要を發表した教育方針によつて具現された。曰く「吾人は少女の教育案の爲めに、悩む必要はないと思ふ。彼女達には其の母達が得たよりも、良い待遇を與へる必要はない。國家教育は彼女達には過分である。と云ふのは彼女達は決して、公の爲めに働くことを要求されないからである。行儀作法は彼女達に取つて總べてであり、結婚は彼女等の顧みる全部である。」と。此の方面に關するナポレオン法典の缺陷は甚だ大きなものがある。婦人の地位はこの爲めに非常に悪化された。故に此の法典に深く影響を蒙つた國々では、現今でも尙、大革命の法律と習慣に依つて認められた權利を、婦人に賦與すべく努力しなければならぬ始末

だ。此の外同法典の重要な點に注がれたナポレオンの力は多く反動的であつた。即ち不相當な重刑の賦課、苛酷な法令の固守等がそれである。

註　ボツカチオのデカメロンに出て来る、從順にして忍耐強き婦人。

然かしながら、同法典は又一方種々な方面で、大きな進歩を示してゐる。其の一二を擧げて見るのに、離婚問題上の和解法は、當時の時代精神と一家團樂の要求兩者を、充たすものであつた。又一家の子供全部へ、殆ど平等に遺産を分配することにしたのは、又革命思潮への讓歩であつた。然かしナポレオン當人は、此の子供全部に對し、均一に遺産を分配することは、畢竟人口増加を妨げる結果を招來すべきものとして、非常に残念がつたものである。兎に角、民事訴訟法、刑事訴訟法、刑法、或は商法等の附屬法文と共に、ナポレオン法典は成文律の合理的且調和的な一體系として現はれたものであつた。斯くの如き法典はユスティニアン大帝以來、未だ嘗つて他に現はれたことはなかつた。否ナポレオン法典はユスティニアンの法典以上の成績を擧げ、人類社會に於て初めて、貧しい者や無學の者が法律とは如何

なるものかといふことを知る機會を與へたものであつた。如何となればナポレオンは、物事を明確に考察する彼れ獨特の習癖を、法文作製の上に有効に働かせた爲め、此の法典の全條文は、殆ど一目瞭然に理解し得られるものであつたからである。——此の理想には、フランス人よりも一層實際的なイギリス人も、尙未だ到達することが出来なかつた所であつた。或る程度まで物事を簡單にしようとした努力は、極端にまで奔つた。ナポレオン自身もこのことの事實なるを承認してゐる。而かもそれから來る弊害を避けることは出来なかつた。法文表現法の闡明は、往々完全な説明と、發生率の高い不慮の事件に、法を合適せしむることを犠牲にしたからである。とは云へこれを、不整や曖昧を通用性とするドイツ、イタリア等の法律、乃至その封建的習慣律に對照する時は、全く一の社會的福音と見られるものである。後年セント・ヘレナに全生涯の清算をなす時、彼れは正しく、自己の榮譽は前後四十回に及ぶ大戦小役の勝利にあらずして、議政府に於ける討議、及びナポレオン法典にありと、云ひ得たであらう。數多きナポレオンの鴻業の中、此の法典

程彼れの力強い性格の印象が明らかに刻み込まれてゐるものは、其の比を他に求められない。

あの驚異すべきナポレオンの活動は、何れの方面に於けるよりも、國民教育に就いて最も彼れらしい特色を發揮した。彼れの教育方針を構成した觀念は、ルイソールが既に其の暗示的小説の『エミール』に依つて發表した所のそれであつた。フランスの總裁政府から統領政府時代に互つて、ベスタロッチはエヴェルドンで、彼れ獨特の實驗を開始し、又ロバート・オーエンはニュー・ラナークで、同様の根本方針に基いて幼稚園を始めた。ヨーロッパ諸國民の將來は、此の大問題に對する、彼等の態度によつて、大體決定せられたと云つても過言ではない。然らばナポレオンの教育方針は、如何なるものであつたらうか。

ジャコベン黨は千七百九十年に、從來行はれてゐた半僧院的の教育制度を破壊した。ナポレオンも幼時ブリエンヌで、此の制度の下に教育され、教師連から常に

小人島と嘲られてゐたものであつた。後千七百九十三年に國民集會はこれに代ふるに、各學級へ入學自由な、小學校及び中等學校の學制の大計畫を立案した。此の問題の基本的意見書を書き上げたコンドルセーは、教育の目的は、『人類の全般的漸進的完成——社會の總べての制度や組織が、皆それに向つて進むべき最後の目的である——を助成する爲めに、體力、知力、及び徳性を涵養すること。』でなければならぬと定義を下した。有望な學生は、容易に大學へ進むことが出来る様になつた。他の諸國ではいづれも、千七百九十二年の四月に、コンドルセーが發表した。此の高遠の理想には、未だ到達し得られなかつた。けれども當のフランスに於ても、大革命の騒動と財政逼迫の爲め、此の高邁な計畫の實施が困難であり、千七百九十九年パリーの小學校は僅に二十四校に過ぎず、田舎に至つては、其の數極めて少ないものであつた。中等學校の數は寧ろこれに比較して多かつた。而して其の教育方針は、全く科學的であり功利的であつた。斯くしてコンドルセー初め幾多の教育改良主義者によつて唱道された、才能發達の大目的は、單に理想に止まつて

了つた。然かしナポレオンの統領政治による、平和と繁榮の到來は、此の理想に幾分接近することを豫期し得られたのであつた。

然かし此の理想の具體化は進歩主義者の希望に添はないものであつた。と云ふのはナポレオンは初等教育に對し、教師の俸給は、學者の俸給金から支出したけれども、經營上の責任はこれを地方議會に嫁して、自分としては幾干も、否何等爲す所なかつたからである。此れは凡有ゆる細目や教儀を破壊する遣り方であつた。テポウドウが云つた通り、ナポレオンの政府は、下層階級、取り別け田舎の下層民に高い教育を施すことを獎勵するも、寧ろ其の啓蒙を怖れたかの様に見えた。中等教育に對するナポレオンの態度は、大變其れと趣を異にしてゐた。彼れは地方財源で維持する中學校、或は中央政府が監督する官立高等中學校の如き、中等教育を發達せしむることに依つて、その開發を計つた。此の國家監督制は、彼れが未だ頭角を現はさなかつた、千七百九十五年十月二十五日の法律で確定されたものであつた。然かし今や此の制度は、彼れの新專制政治に適はしく、一層の發展をなした

のである。而して此等の學課目は總裁政府時代よりも、範圍が擴張されて、古典と現代外國語とが加へられた。然かし其の教儀は彼れの柄に相當して、殆ど軍國主義的であつた。此等の高等中學校に、彼れは約六千四百名の給費生を在學せしめることにした。而して其の中四千名は初等學校の優等生に割り當てられ、残りは士官と官吏の子弟に分配された。従つて高等中學校は非常に濃厚なる官僚的色彩を帯びてゐて、學課目の如きナポレオン自ら規定したものであつた。其の課目は中學校のそれに比して幾分非功利的であつたが、それでも尙精神力の伸張を計るよりも、寧ろ一の職業に確實に成功させる方針に基いたものであつた。此の他ブリタニウム(公賓館)に隸屬するサンシル其の他の専門學校に就いても、ナポレオンは其の教育に特別の注意を拂ひ、其の教育は、『良い職工と陸海軍の國立工場に於ける、機械工業に必要な人間を養成し得る』底のものであつた。此れら學校の學生は、決して政府に奉仕することを強制されはしなかつたが、彼等が自發的に奉仕を申し出づる様に導かうと、周到な注意がなされてあつた。

國民教育を政府の意の儘にしようとする方針は、フランス大學の建設によつて確實化された。此の大學は國民教育の總轄權を行使する所のものであつた。されば同大學には、皇帝(ナポレオン)の組織的性格の痕跡が深く刻み込まれたのが見られた。ナポレオンは暫く問題を熟考した後、千八百六年二月二十日——それは彼れがアウステルリッツの戦に大勝し、パリに歸つてから間もなかつた——議政府に向ひ、同大學に關する意見を發表した。彼れはかう云つてゐる。「余は國民教育の爲に、大學總長、大學教授、及び一般教師の養成所となるべき、一機關を創設しようと思ふ。而して總長を初めとして此等の人々が、高遠なる精神によつて刺戟されることを希望する。教育の爲めに獻身しようとする若人は、教育を國家最高の職務たらしむる底の希望を、明確に懷くべきである。此の大教育制度の基礎はこれを専門學校に置き、上部工事は元老院に據らしむるがよい。然かし此の計畫を實行するには、少くとも二十五歳或は三十歳以前に結婚しない、獨身主義の原則が制定されなければならぬ。」更に同年(千八百六年)三月一日彼れは同問題に就い

て、再び意見を吐露して曰く、余の希望は、其の首長のローマにあらざるエスイタ教の教規を制定するにある。而して此の新エスイタ教の唯一の目的は、教徒自身等を有用の材たらしめ、且、公共の利害と等しき利害を有すべきことがそれである。……社會には判然と種類の違つた二派の首長があつて然るべきだ。其の一は年少者を教育するものであり、他は年少者を統治するものである。なぜならば此の二つの仕事は全然類を異にする才能を要求するからである。』彼れは言葉を續ける。「余はフランスの社會に公民の守る規律を作らうと思ふ。從來社會には軍事と宗教の二通りの規律があるばかりであつた。……此の公民の規律は、教師團體の創設によつて強められ、更に官吏の一大團體の現出によつて、一層確實なものとなるだらう。……要するに余が國民指導者の團體を組織しようとする主要目的は、社會に於ける政治上、道徳上の輿論を、指導する手段を握らうが爲めである。』同年三月二十日、復た曰ふ『斯くの如き國民指導者の團體は、約一萬人の團員を包容するだらうと思はれる。又大學の教授達は——其の名前からしても——教育上の

絶對權力を保有せねばならぬこと、及び彼等は政府に忠誠を誓つて就職すること、この二つは極めて重要なことと考へる。」と。

此等の目的に遵つて、フランス大學は千八百八年に創立された。同大學の教授連は、一人残らず政府に従順たるべき宣誓を求められた。否、單り同大學の教授のみならず、一般の學校教師も同様に宣誓せしめられた。彼等は「教育の劃一を目的とし、又國家の爲めに宗教、君主、郷土、家族を愛する國民を養成すべき指導團の規則」を遵守すべく誓言した。即ちこれは全く教育團體であると同時に、又政治團體でもあつた。確乎たる主義に基く教育によつて、政治上の安固を求めんとすることは、ナポレオンの早くから懐いた希望を實現したものである。「……國民が幼少から教育されないでは、彼等が共和主義者であれ、尊王主義者であれ、キリスト教徒であれ、又異教徒であれ、其の國は正當に國家とは云ひ難い。何故なれば、斯かる國は曖昧且不確實な基礎の上に、立たざるを得ないからである。而してそれは常に亂脈であり不安定である。」これは彼れの言葉である。

法律の萬能、及び人間の可撓性を極度まで信じるのは、其の人甚だ憐むべきである。彼れは民衆を、彼れ獨特の鑄型に注入すべき熱鐵の熔液と考へた。そして彼等に自分の意志の押型を、永久に刻み付け得られるものと考へた。此の様な壓制的エネルギーも、擾亂後に於ては、驚異的な仕事を成し遂げるものである。それは人情が無政府状態を忌み嫌ふからである。故に偉大な組織的才能を有する政治家は、此の傾向を利用し、舊い制度の中でも善良なものを保存して、これを新時代の要求に適應せしめ、神速に、渾沌たる擾亂の中から、秩序を作り出す。然かしそれには餘り熱し過ぎない様に注意しなければならぬ。元氣横溢の人物には往々念入りに仕事を遣り過ぎる缺點がある。ナポレオン以後のフランス史は、將來殆ど改變の餘地ないまで完全に作られた機構のピラミッド的均整を、迴避すべき必要を力説する。而してこれは取りも直さず又ナポレオン法典とフランス大學が示めす缺點の主なるものである。州區組織の政治やコンコードも同様の概評を免れることが出来ない。と云ふのはそれらは、餘りに仕上がり規丁面すぎる爲

めに、變化多き現代生活の諸條件に適合し得ないばかりでなく、又餘りに效率が高い爲めに、政治家の個人的働きを發達せしむるに不適當なる國家萬能主義を齎すからである。

ナポレオンの立法上の功業は偉大なものである。大革命を鎮壓したのは、ブリ・メールのクーデター(千七百九十九年十一月)ではなく、彼れの立法事業であつた。此の意味から、『大革命を壊滅したのは自分である。』とセント・ヘレナで云つた、彼れの主張は正當である。彼れはあの大革命を起した人類の熱望を満足させ、而して其の大革命を鎮壓した。彼れは該博なる歴史上の知識と、幼少からの特色であつた實務的明識を以て、當時のフランスの要求に合致する、新舊の調和に成功した。されば十年に互る動亂の後、フランス國民は熱誠を以て、彼れの事業を禮讃したのであつた。

さあれナポレオンの事業には幾多の缺點があつた。而してそれは大體彼れの性質に於ける缺點と、相似たものであつた。熱と力の過剰は彼れの經歷の所々に

現はれるが、此のことは又立法事業の上に於ても、少なからず見られる所のものである。而して又それは行政上の弊害と同様に、固くフランスを束縛した。ナポレオンは後世の批評を顧慮しなかつたが、これは彼れとして重大なる失策であつた。と云ふのは大建設家の努力も、民族の本能や、次の時代の要求に比較する時は、甚だ微小なものであるからだ。立法家のモデルは均整單純なピラミッドでなく、錯雜せる根幹、繁茂せる枝葉を有する樹木であらねばならぬ。バークは其の著、『フランス革命回想録』に於て、次の様な名言を述べてゐる。曰く『人間の本性は複雑である。社會の事物も亦頗る複雑である。故に單純な力の性質や方向は、人間の本性や、百般の人事に合致すること困難である。』と。であるから若しナポレオンが、國民の變化して止まざる要求を満足させることが到底出來ないと悟つたならば、彼れ自身に取つては勿論、フランスに取つてもそれは幸福であつたらう。又若し彼れがバークの天稟を欽崇した後代人の批評を尊重したならば、其の立法は、假令均整を失つたとしても、一層社會を裨益する所があつたであらう。然かし事實は

これと反対であつて、彼れは長い動亂で疲れ切つたフランス人の性質を、餘りに急激に凝固せしめるやうなことを敢へてした。事實彼れはフランス國民に、其の時代としての最大の功業を爲し得た要素となつた。「堅固」なる資質を賦與したが、一方將來に於ける國民の適應性と其の發展とを犠牲に供して了つたのであつた。ナポレオンの自己過信は、これをアテネの立法者ソロンの特質であつた立派な自制と、將來に希望を抱く先見とに比較する時は、非常に見劣りがする。ソロンはアテネが未だギリシア諸國の間に、確かりした地位を占め得られなかつた、混亂内訌の際に生れたが、合適な法律を制定して、祖國の運命を安堵ならしめた。吾人の知る限り、彼れの法律は専ら誨諭的方法を骨子として立てられた。彼れは貴族の權力を削減し、民衆に参政權を與へ、また啓蒙教育を奨勵したが、國家が教育を拘束しない様に注意した。彼れは又ドラコの刑法を緩和し、且從來子に對して絶對無限であつた父の權力を大いに縮少した。蓋しソロンの法律はどの點でも、人間の性質内に存在する信用、人間の高貴な本能を信する決意、強制よりも戒諭への倚

頼を表示してゐる。彼れは執政官を辭して後、アテネが彼れの作つた法律を、其の改竄を許されざる十年間に自由に試験することが出来る様に、外國へ出掛けたと云はれる。アテネは其の期間後、實驗に徴してそれを改變し得られることは勿論であつた。人類の高致なる本性を信じ、アテネ人を政治的發展の永遠の大道に導き、自身の行藏によつて、公德の精華である『無私』を同胞に明示したソロンは、此等の點から見て、理想の立法者と做すべきである。

反動政治の時期に立身したナポレオンは、次代の人心に深い考慮を拂ふ人々を嘲笑した。而して彼れは時代の要求全部を充たす決心を以て、フランスの生命へ、餘りに深く彼れの性格を印刻し過ぎた。彼れは迅速に巧妙に、又其の時代としては、驚くべき効果を語る手法によつて、此の目的を貫徹した。然かし乍ら、此の爲めに不斷の進歩の保證であるべき適應性——フランスの總べての方面に於ける——を犠牲に供して了つた。ナポレオンはフランスを、引き緊つて一纏めになつた有機體とした。これは千八百十二年全ヨーロッパの羨望の的となつた。然かし

それが因となつて彼の女(フランス)は、千九百十二年に至り、多種多様の現代的要求に應じ得られないことゝなつた。斯くの如きは、ナポレオン式鐵框に拘束された或物を感じる。フランス一流の知識階級大部分が下す斷定である。遮莫れ批評はこれで十分である。一人の政治家にして、現代及び未來雙方の要求を充たし得る場合は極めて稀少である。而して吾人は、彼れがセント・ヘレナで云つた次の言葉に對して十分に賛意を表し得るものである。彼れ曰く、『余は無政府の深淵を埋め、渾沌を整理した。余は大革命を淨化し、大衆を高揚し、而して君主政治を強大ならしめた。』と。

欠

欠

く終始するは不可能なり、とセント・ヘレナで云つた斷言を否定する。當時フランスの知識階級は、千八百一年以後には平和的な政策を取ることを、ナポレオンに期待してゐた。而して千八百四年に彼れが皇帝となつたことは、多くのフランス人を怒らせ、其のために自然彼れと國民との關係を緊張させたのであつた。事實ナポレオンは皇帝としてフランス人の大多數から援助された。然かしそれは國民が、彼れの皇帝たること其の事に満足したためでなく、彼れがブルボン王室の再興を阻止すること、及び其の附録である、嚴重な階級制度、封建的課税、十分の一税、又は貴族僧侶の民有地奪還等の防遏を、國民に保證したからである。然かし有識階級には、何故にブルボン王室排斥のために、彼れが皇帝になる必要があつたかを、了解することが出来なかつた。ナポレオンの無限の野心や、不屈の意志を知らない人は、眞實彼れが穩かに大僧正の役目を果し、そしてルイ十八世をフランスに召還するだらうと想像したいやうな氣がした。然かしながら、これより前、千七百九十九年の歳末、既に彼れは西部フランスの勤王黨員二人ヒド・ド・ニューヴィユとダン

ディニエとに向ひ、甚だ明瞭にブルボン王族の召還に反対の意見を示したのであつた。ナポレオンは彼等に向つて云つた。「光榮に身方せよ。予の麾下に参加せよ。予が政府は青年と有識者との政府である。」ダンディニエは憤然肩を怒らし、て答へた。「吾等の住むべき所は他にある。」此れに應へて第一統領は云つた。「何！卿等はボナパルトの制服を着るのを恥とするか。然らば卿等は、どうして此の國亂を鎮定しようとするのだ。」ヒド・ド・ニューヴィユが代つて云つた。「それには二つある。一は即ち正統の君主としてのルイ十八世。他は光榮を以てフランスを掩ふべきボナパルトである。」第一統領は苦笑した。然かし彼れは二人に、金輪際ブルボン王族を召還せざる旨を強調したのであつた。ナポレオンは二人を動かすことが出来ない、と知るや、熱して歎鳴つた。「予は卿等の町や家を焼拂ふぞ」と、……斯くの如きはナポレオンの何時も變らぬ態度であつた。彼れは舊王政のために、共和主義を犠牲にしようとした様子を、一度も示したことはなかつた。されば彼れと親交あるカンパセレー、其の他の人々は、彼れが自己擴大のために

共和主義を犠牲にするのを知つて大に憤慨した。新皇帝は此の氣運を感知した。而して彼れはこゝに一種自分に對する不信用に就いて不快を感じ、それは一轉して倨傲な態度と變じたのであつた。此の調子は、幸福であつた統領時代とは、全然反對のものであつた。華美な饗宴、新位階の驟雨、不信なるアルピオン(イギリス)に對して煥發せる烈々燃ゆるが如き宣言、艦隊或はブローニエのフロティラへの國民精力の集中、華やかにして非常に有益な公共事業、これらは凡べて國民の注意の轉換や、信任失墜の陰蔽に役立つものであつた。然かしこれとても其の全部を被ひ隠すことは出来なかつた。但共れから後、千八百六年のプロシア征服の礎、大藏大臣モレアンは、重立つたフランス人の實際の心中を知らうと努めたが、その結果彼れは、多くのフランス人が曩に、此の戦はフランスの災害であると豫言し、又プロシア王フレデリック・ウイリアムを世界の自由のため復讐する者なりと稱してゐたのに、ナポレオンがイエナで勝つてからといふものは、彼等(フランス人)は手を返す様に、神は條約の神聖な擁護者たらしむべく、ナポレオンを強大ならしめたの

だと云ふ様に變つたと云つてゐる。又彼れは、此れら所謂神の攝理の手製者達は、敢てブルボン王家の復位を望んでゐるものではないと云ふことをも認めた。然かし彼等は唯何時かはナポレオンの失脚すべき日の來るのを豫想し、そして「モレアンは曰ふ、『次に立つべき政府は如何なる種類であらうとも、其のために、忠誠を致すべく考へてゐた。』此の言葉には無限の意味を含むものである。或るフランスの名士は、ナポレオン三世に就いて、次の様な奇警の言を吐いてゐる。曰く『此の方は發明であるがために非難される。』と。一世ナポレオンに對して、此の言葉は更に一層剴切なるものである。彼れの鋭敏なる構想力は、彼れの周圍を動きのとれない状態にまで立到らしめた。そしてそれは彼れの一生涯を通じて、彼れを左右する原動力となつた。

數年間に實驗は遺憾なくし遂げられた。革命の郷土に於ける其の『相續息子』は、反共和主義を能くも實施し得た。斯くしてナポレオンは出版の自由を監視するため、元老院に一の職制を設定し、完全に其の自由の束縛に成功した。又他に

個人の自由を保護する一職權をも制定した。然かしながら茲に只『皇帝の承認』といふ名のみの下に、多くの人々が獄舎に監禁されてゐたことも記憶せねばならぬ。パスケーが道破した通り、ナポレオンが完全に支持した革命時代の法律は、僅かに千七百八十九年以後沒收した土地に關する部分に過ぎなかつたのである。

蓋し、時を経るに従つて次第に（執政者の）自己中心に傾くのは、獨裁政治には免れ難い所である。而して其の專横性は、新しい勝利を加へる度に擴大して行く。茲にナポレオン政府の大臣連や議政官等は、『皇帝の貫祿』の威光を、彼れの風采や態度の上に認めざるを得ざる事柄に出逢つた。彼れが従來は國民を呼ぶに『公民』の語を用ひてゐたのを『臣民』と變へたのは、其の著しき例であつた。このことあつてから數ヶ月の間に——殊に戴冠式でローマ法王より聖油を受けて後は——彼れは儀容整備した儀式典禮を宮廷へ輸入し、一方練達な助言者を排斥するに至つた。又カンパセレー、タレーラン、或はフシェー等には高官位は授けたが、裏面で彼等相互の憎惡を煽立て、其の勢力の増大するのを抑制する如きことを敢へて

したり、又些細の過失に對して苛酷な譴責を加へたりなどした。以前はナポレオンが公明に國事を討議した所の議政府は、次第に性質を變じて、遂には只彼れの命令或は元老院令を、忠實に記録する一役員會と退化して了つた。彼れの命令は此の會を通過することによつて、僅に法律の形式的装ひをするのであつた。チルジットに壓壞的媾和條約を締結し、意氣揚々パリに凱旋してから後は、彼れは一層傲岸な氣分を露はにした。モレアンは議政府での討論中起つた、ナポレオンが相手を威壓する辯駁論法を次の様に述べてゐる。「斯ういふ時には」——モレアンは云ふ——「彼れは自分の辯論を、火の付いた様に急激な論證を以て防禦するか、又は酷烈な批評を以て相手を打ち砕くのであつた。然かし多くの場合、尙一層攻勢に出でて、端倪すべからざる反對論の洪水を注ぐのを慣手段とした。さうする時は、相手が彼れの論旨を捉ふることも、破ることも出来ないからであつた。斯かる「懇談」タレーランはナポレオンの議論をかう云つたは、彼れの議論が不當なため、氣持を悪くした人達の胸中を慮つて、彼れ自から其の人達に言葉をかけて、始末をつけ

るのが恒例であつた。而かも此の様に彼れが無理を通した場合にも、ナポレオンはいつも相手を、自分の論旨に服従させる種々の理由を、巧みに見付け出した。又往々話が岐路に入り、彼れ獨り二時間も喋り續けた後は、彼れは自分の掛けてゐた椅子を指し、爽かな諧謔的一瞥を、並み居る議政官に投じながら、よく斯う云ふのであつた。「此の席(玉座)にすわれば、聰明であることの容易なのは、自分でも知つてゐる」と。けれども一方彼れは抗辯した人達に怒を抱く様なことは、滅多になかつた。嘗つて或る議員が、ナポレオンに叱られたのを、時経ても尙心配してゐると聞くや、「彼れが心配するのは大間違だ。余はそんなことは疾くに忘れて了つてゐる。」と云つた。」

これはナポレオンの特性である。彼れは狹量で偏屈な性質の人によくある、個人的忿恚を表したことは殆どなかつた。大體、ジョージ三世のチャタムに對する、ロベスピエールのダントンに對する、フレデリック・ウイリアム三世のシュタインに對する應待がよく説明する、主權者が側近に加へる「意地悪る」を必要としな

つた程、彼れは其の接觸する人々より、嶄然卓絶してゐたのであつた。ナポレオンには頑強と果斷から来る幾多の缺點があつた。然かし其のために却つて、全盛時代でも、弱い人達に泣き付かれるのを免れた。彼れは人を觀るに、十分深い興味を以てしたかどうか疑はしい。蓋し彼れは人間を自己の目的の道具と視て、其の能力に従つて其の價値を決定し、又彼れらの祖國愛と名譽心とに訴へて國民の心理状態を高揚し、彼等を驅使すること自分自らを驅使する程苛酷ではないが、彼等を精一杯勞作せしめた揚句、其の無能を明かにしてこれを遺棄したのであつた。然かしナポレオンは彼等の無能なるを、深く憤慨もしなかつた。恰度人が利れないナイフを見るのと同様な氣持でそれを見た。即ち彼れはナイフを研ぐか、然らずんばそれを擲去したのである。或る時彼れは、大臣シャンパニーが官文書保存所の繁雜な調査を含む報告を、用意してゐなかつたので、嚴しく咎責したことがあつた。シャンパニーが、記録係長オートリヴが病氣なので、報告が用意されなかつたと陳べるや、ナポレオンは足痛風で非常に悩んでゐる。或る議政官の方へ急に向つ

て、次の様な皮肉たつぷりな言葉を吐いた。『さうか、記録係が皆んな病氣ならば病院へ行け、他のものを雇ふ。』と、事實彼れは人々を、フランスの榮譽と自己の勢力擴大とのため、強壓の下に働かすべきものと信じてゐた。彼れは又政治を、鋭敏な洞察、深遠な計算、及び不變の決心を必要とする、大規模の將棊遊びと考へてゐた。即ち國民は將棊の駒であり、其の勝者が得べき賞與は世界帝國であつた。全ヨーロッパの上に延びて行くナポレオン帝國は、吾人に取つては恰もミルトンの天才によつて描き出された、幻の町の出現の様に見える。

忽ち地面から、大きな建物が、

水蒸氣の様に、立ち昇つた。

實に吾人は斯の様な奇蹟を、此の建設者の強大なるエネルギー、多方面的な能力、及び彼れの全部下より其の全力を榨出す比類稀なる手腕等によつて説明し得

るものである。一日に十二時間乃至十六時間働き、晝食を僅か二十分内外で呑み込み、常人が三時間乃至四時間の睡眠で得ると同量の休息を、熱い入浴に費す一時間に取る。ナポレオンは、旺盛なる活動力と、現今大トラストの支配人に必要な、集約せる意志とを以て活動した。彼れは働くのを好んだ。彼れの秘書メヌヴァル男爵が其の回想録中に記述してゐる様に、彼れの心的能力は偉大なものであつた。メヌヴァルは曰ふ、『全能力を舉げて活動するに足る程の、十分な材料を見出し得ず、又仕事の増加に正比例して能力の昂進する、彼れの頭腦の吞噬的活動力は、常に何事に對しても不足なるを知らなかつた。』と。ナポレオンはセント・ヘレナでラ、カールズ伯に向つて云つた、『仕事は余の本領である。余はそのために生れ、而してそれに適當してゐた。余は自己の脚や眼の力の極限を知つてゐる。然かし未だ仕事に對する力の限度を見たことはない。であるから、余はあの可愛相な秘書メヌヴァルを、危ぶなく殺さうとした位であつた。従つて余は彼れの職を解いて、マリアルイザの許に保養せしむ可く送らなければならぬやうな事になつた。』

それは其の奉仕(マリアルイザへの)に於ける職務は、單に冗職に過ぎなかつたからである』と。

透徹百練の精神に嚮導せられ、不動の意志によつて推進せらるゝ此等の力は、彼れをして廣範圍な政治上の細目全部を總攬處理すべく可能ならしめた。斯くして彼れは封建的な偏狹と、宮廷的な冷淡とを打ち棄てて、世界を抱擁し、世界を強壓する知識を以て、これに代へ、サン・シモンの『王冠を戴ける工人』のモデルとなつた。ナポレオンの政治を、千八百七年までベルリン政府部内で旺んに行はれた纏りのない二重制に、或はハプスブルグ家の繁雜で尊大な政治振りに、又はイギリスの保守的政治に比較して見られよ。然らばナポレオンの奇蹟的霸權が諒解し得られよう。それは因襲を掃蕩する理智の優越であり、懦弱に打ち勝つ精悍の極頂である。

ナポレオンが國民の熱烈な奉仕を得るために用ゐた刺戟劑は、愛國心か、彼れの

人物に對する國民の信仰、或は光榮に對する愛著等であり、而して最後の手段としては、強迫であつた。吾人は今更こゝで、フランス人の愛國心に就いて一言も付け加へる必要はないが、兎に角それは革命軍の成功後が最も熾烈であつた。而してナポレオンは、此の祥つて據り所のない感激を引きつける磁鐵となつた。強烈な信仰を振り起させるのは、力強い稟性の特質である。そして、誰れもこれまで、ナポレオンの様に斯くも深甚な獻身的奉仕を享受したものはない。此の感情はメヌヴァルの回想録中どのページの上にも盛り上つてゐる。或る時彼れメヌヴァルは、皇帝の反對者が赴く、オペラの假裝舞踏會や、其他同様な場所へ、よく出入したために、皇帝から意外にひどく咎められた。ナポレオンは斯く嚴しく詰責はしたものの、秘書官メヌヴァルが少しも逡巡しないのを見て、相變らず深く彼れを信任し、メヌヴァルも亦此の知遇に忠誠を以て應へたのであつた。情深い性質であり、沈著で且非常に控へ目な彼れ(メヌヴァル)は、生れながらにして大天才の忠實な隨伴者に適はしいものであつた。従つてナポレオンの偉大に關する、最も有力な證

據は、此の秘書官が遺した滿遍ない讚辭の中に呈示せられてゐる。又軍隊のナポレオンに對する忠誠は、それがヨーロッパの半ば以上、即ちカディズ(イスパニア)からモスコウ(ロシア)まで、彼等の骨を撒き散らしたのでも知れる。然かし茲にモスコウの役に參加した將校の物語つた、取り別けても悲哀な二つの物語がある。元帥ベルチエーの幕僚であつたフサンザーク公は次の如く敘述してゐる。ナポレオンの所謂『大軍』がモスコウに於て、半ば飢に陥つてゐた時、ナポレオンはクレムリンの宮廷で觀兵式を舉行したが、其の時今まで蹠踉としてゐた將兵は、現在直面してゐる窮狀を、全然押隠すかの様に、非常に元氣らしい端嚴な態度を取り、殊更快活な顔付を示した。實にそのフランス軍の有様は、斯くの如き軍隊を以てすれば、何處までも到達せらるべく、又如何なることをも爲し得べしと、彼れに信ぜしむる底のものであつた。もう一つの出來事は、既に彼れが餘儀なくモスコウから退却し、風雪と闘ひ、多大の落伍者を出しながら、ベレジナ河を渡つてウイナルナに赴く、戦慄すべき場面に關したものである。それは軍曹ブールゴーニエが述べる所であ

るが、退却軍が夜營の折燃やす薪材の缺乏に因り、夜毎に幾千百人が寒さに斃れつゝあつた時、將卒中の或る者は、『皇帝のために、これを持ち歸られよ。』と云つて、ナポレオンの從者に、手にしてゐたステッキを渡したと云ふのである。

ナポレオンの性格と其の驚嘆すべき精力は、國民の獻身的熱誠に對する不斷の懇であつた。例へば彼れの弟ジェローム・ボナパルトが海軍に入る時それに與へた、秋霜烈日的な訓示は、此の間の消息を物語るものである。ナポレオンは曰つた、『卿は年若くとも死ぬことが出来る。然かし御身が何の功名も立て得ず、祖國に對して無用の材であり、そして御身の生存に就いて何等痕跡を止めないならば、御身は死ぬことを許されない。』と云ふのは、そんな生存は全く生活したことを意味しないからである。』又其の後ジェローム・ボナパルトがボルチモアのバターソン嬢と結婚しようとして、ナポレオンの許可がないのに、乗つてゐた艦から去つたことがあつた。彼れは弟の身分違ひの結婚と海軍々規の無視とを非常に怒つて、直ちに花嫁(バターソン)をアメリカに送還すべく命じ、又花婿に就いては、メレー夫人

に次の様な手紙を送つて自分の意見を披瀝した。『若し彼れが、余が彼れに許す唯一回の接見に於て、彼れの擔ふ名聲に適はしからざる振舞を示し、又彼女との關係を何處までも止めないならば、余は彼れを容赦しないつもりだ。若し彼れが一人の阿婆擦れ女のために、陸上海上兩方面で、國旗を棄て、余の名譽を汚す不埒を改めないならば、余は永久に彼れを見棄て、しまふつもりである。余は彼れを、年若き將卒に勤務の神聖なることと、婦人のために軍旗を見棄てる時、彼等の犯す罪の如何に大なるかといふこととを例示する典型としようと思ふ』と。吾人は其の運命を無慚にも打碎かれた、此の花嫁を憐まざるを得ない。然かし又弟ジェロームが破壊した、フランスの國規と海軍々規とを支持せんとする、ナポレオンの行動を辯護することにも、相當の理由を見出すものである。

軍旗と雙頭の鷲の旗とに向つては、特別の尊敬が拂はれた。であるから軍旗授與の式は、ナポレオン帝國の初期に於ける華やかな示威の好い機會であつた。軍旗授與は常に拍手喝采裡に擧げられた。千八百十三年の戦役の始まつた頃のこと

とである。一補充兵はナポレオンが鏖の上に衝立ち上つて、軍隊に軍旗を保護することを誓ふ様態へた。其の言葉の中に躍動するインスピレーションを感受して云つた。「余補充兵は、——單り自分ばかりでなく、總員も亦——皇帝が余等の衷心から叫ぶ、然り、君よ、臣等はそれを誓ふ」の言葉を握り得たのを感じ得た」と。此の様な軍旗への獻身的精神によつて、ナポレオンの軍隊は、彼等自身の名譽、並びに祖國の名譽を表象するそれ(軍旗)を敵手に渡す程ならば、寧ろ彼等自身を全滅に委すものであつた。アイラウの役で、コサク兵團に包圍され、小丘の上で孤立無援の悲境に陥つた歩兵第十四聯隊の奮闘、或は又千八百十四年ラフェル・シャンブ・ノワーズで、ブリタニア國民軍が、再三再四繰返される聯合軍騎兵の襲撃に全滅されるまで、降伏せず抵抗した、驚くべき防戦等を見られよ。これらはよくフランス軍上下の、軍旗に對する獻身的精神を具現したものと云ひ得られる。斯くの如き偉大なる行績は、超人的剛勇を物語るものである。而して最後の五分間に於て、戦勝を身方に獲得せしむるものも亦これである。千八百六年十一月、ナポレオンがイエナに

欠

欠

ック、ホーヘンローエ徒輩の醜行を認容する所のものである。余は斯かる將軍連を裁判するのは、何んな法術であるか、又法律はどんな刑罰を、斯くの如き犯罪に課すべきであらうかを知りたい。」と。ナポレオンはデューボン始めイスパニア人に降参した主な將官に刑罰を課するため、軍法會議の手續を規定した法令を携へて議政府に臨んだ。彼れは目に涙を浮べ、絶望的瞬間に於ても尙此等不幸なる將軍達の前に開けてゐた彼等が取るべき最後の手段を數へ立て、自分の面目を汚した人々の罪を痛論した。而して彼れは叫んだ、『然り、コルネイユの著ホレイスに於て、老ホレイスが、自軍に三倍する敵と戦ふ敏捷な彼れの息子は、如何なる手段を取る事が出来るかと尋ねられたのに對し、『彼れは恐らく死を採るだらう。』と答へ、又更に、彼れは彼れに對する救援に對して、一種の高貴な失望を感じるだらう。』と云つたのは正しいものである。』彼れは尙言葉を續けて云つた、『コルネイユを非難し、而して彼れは第二の句によつて、第一の句の効果を稀薄ならしめたと強辯する人々は、人間性に就いて多くを知らざる徒輩である。』と。斯かる英雄的行爲

と降服に隨從する不名譽とに對するナポレオンの鑑戒は、後年詩聖ハイネが『二人の擲弾兵』の中に嘆美したる如き軍隊を作り出した。事實此の如き兵隊は、千八百十五年六月十八日の夕刻、ウー・トールローの役、勝敗の決既に明かとなつた時、尙も將軍カンプロンヌの、『近衛軍は死すことを知りて、降ることを知らず』といふ不朽の激勵に鼓舞されて、ラ・ベル・アリアンスの斜面に、彼等の身體を曝したのであつた。ナポレオンが兵士や國民の忠誠を喚起し得なかつた場合は、彼等に恐怖の念を抱かせる手段を採つた。彼れも亦多くの政治家の様に、人間性に就いては餘り深い見解を持ち合せてゐなかつた。而かも此の點を考ふるに當り、吾人は先づ兇暴な革命が末期になると、人間は其の最惡な側面を曝露することを知らなければならぬ。斯かる時には暴漢や陰謀家が、間々彼等より正直で堅實な同僚を飛び越えて、立身する傾向がある。而してナポレオンは斯くの如き時代に生ひ立つた。既に述べた通り此の時代の思潮は彼れの少年時代の理想主義を枯死せしめ、其の代りに頑固で皮肉な思想を注入した。それ以後彼れは求めて、人間の弱點と缺點

とを見付けようとした。而かのみならず却つてこれを誇張して説いた位であつた。或る議政官が評した様に、『ナポレオンは其の到達した遙かな高所から俯瞰して、自分以外の人間を實際の大きさよりも小さなものと誤察した。而して此處に彼れの滅亡の原因が、潜在してゐたのである。』此の觀察には確かに深い眞理が含まれてゐる。人間を侮蔑する者は、それを疎隔することによつて往々亡びるものである。

ナポレオンの容貌には何所かに、相手に恐怖とまでは行かずとも、少くとも不安の念を生じさせる或るものがあつた。彼れは人に向つて寛宏であり又魅惑的であることも出来た。然かしながら、其の晴れやかな顔付が、瞬く裡に不興の色に曇り、或は愛嬌に充ちた兩つの眼から忽ち怒の閃光が放射される、其の變化は、南歐人の特性として、頗る急激なものであつた。であるから用心深い人は、常にそれに對して注意を怠らなかつたし、又最も敏感な人達には、將に臻らんとして、尙未だ臻らざる危険の前兆も豫知することが出来た。ナポレオンの命令でナンシーに拘留

された。或るイギリスの旅行家が述べてゐる所によると、彼れの顔は高慢ではあるが、分別と溫和な色とが現はれてゐ、其の眼は深い考慮を示してゐた。然かしそれから約十週間を経て、アウステルリッツの大戦の後、バリーに凱旋した時には、彼れの眼付や態度は、嚴然たる威容を示さうと考へたものか、恰も見物人を威嚇するかのやうに、傲慢の風がはつきり現はれてゐたといふことであつた。

ナポレオンが大戦争をした後は、いつでも其の氣分の中に、これと同様な變化が起るのを常とした。されば彼れの大帝國が盛大の極點に達した頃には、器用な宮内官は凡べて主君の此の氣まぐれな心持を満足させようと努めたものであつた。アレクサンドル・デ・ヴアルは、自分が女王オルタヌのサロンで、女王の友達の一團にドラマを讀み聞かせてゐた最中、何の豫告もなくナポレオンがそこへ入つて來たのを、一同がどんなに驚いたか、其の様子を述べて、「部屋に居たものは直ぐに立ち上がり、一列に並んで恰も軍隊がやるやうに、迅速に不動の姿勢を取つたと云つてゐる。又或る元帥も、『皇帝』の聲が響くと同時に、一種恐怖の空氣が宮廷内に醸

生されるのを明白に自認し、そして此の氣持は單り彼れ一人のみではなかつた。といふのは彼れは此の様な場合に、彼れの外に手足を慄はせてゐた數人のお上品な人達が居たのを知つてゐたからである」と云つてゐる。ヴァンダム將軍は可成亂暴な人であつたが、それでもナポレオンの目の前では、落ち著き得ずに周章して勝ちであつた。彼れ自身もこれが彼れの知る最も恐しいことであつたと白狀してゐる。終りにナポレオンの異性に及ぼした威力を見るに、千八百十二年五月、ドレスデン宮殿で、彼れが貴婦人の一列に並んで敬禮をしてゐる前を通過したことがあつた。此の時貴婦人連の背後に並んでゐた紳士達が見てゐると、偉人が婦人連の前を通過するに隨つて、丁度紅潮が高く低く移り行く様に、一種強烈な激動の迸りはなはが、婦人達の肩から肩へ傳はつて行くのが見られたと云ふことである。

然かし斯の様に、いつも人々に恐懼の念を抱かせるのは、ナポレオン自身に取つても決して幸福でないことが終には證明されたのである。さて力強き天性は、智的且果斷的批評に對しては頗るおとなしいものである。スタエル夫人は早くか

ら、ナポレオンが率直な反對者を尊敬するのを知つてゐた。これより前千七百九十八年、彼れが或る赤裸々の返答によつて遣り込められた例を彼の女は擧げてゐる。ナポレオンが當時美貌と快活とで持て囃されてゐた貴婦人に、或るサロンで逢つた時、彼れは其の夫人の傍へ歩み寄つて甚だ無遠慮な態度で問ひ掛けた。「奥さん、私は政治に容喙する女を好みませんよ。」と。彼の女は應へた。「將軍、全くさうです。然かし婦人の生命が保證されない國では、婦人達が其の理由を知らうとするのは、已むを得ないことではないでせうか。」これに辟易して彼れは一言も無かつたといふことである。スタエル夫人は更に續けて曰ふ、「ナポレオンは正當な反對には黙從する男である。彼れの専制を耐へ忍ぶ人達は、彼れ自身ナポレオンが非難されると同様に非難さるべきである」と。これには深い眞理が存在する。確乎たる反抗は、強き人の最も善い資質を喚起する。強い人が反抗に逢はないと、往々遣りすぎをする處がある。第一講で既に研究した通り、ナポレオンは如何に激怒しても、まさかの場合には、偉大なる克己を示して常軌を逸しなかつた。

此の様な際には、恐らく驚愕が、恰も魔術をかけた様に、彼れを縛つてしまひ、そして彼れの行動を大體指揮する正義の意識の發動に、餘裕を與へるらしかつた。何故なら彼れは自分でも云つてゐる通り、「余は剛直であるかも知れない。然かし根柢に於ては、公正な男である」からであつた。其の他彼れの脱線を妨げる緩和力となつたものは、他人の力に就いて、其の力強さを稱讚することであつた。ナポレオンは自己の榮譽に關する鋭敏な意識を以て、彼れが迷惑を掛けた人々の抱く、同様の意識を顧みざるを得なかつた。而して常に人間を仕事に用ひる道具と見做しながら彼れは、彼等の熱心なる支持を登録しようとしたのであつた。されば若し彼れが議會に於て手剛き反對に出逢つたならば、恐らくそれは彼れ自身のみならず、ヨーロッパに取つても幸福であつたであらう。然るに大革命は二流の人物か或は日和見政治家のみを残して、不撓不屈の人材の大部分を殺してしまつたので、彼れに堂々拮抗する人物が存在しないやうになつた。これはフランスに取つて洵に大きな損害であつた。

然かし議政府が、此の専制政治に、何時でも全く黙從してゐたと想像してはならない。議政官中の歴史家であつたコルムナンは、議政府の反抗とまでは行かないが、其の不賛成振りを次の如く述べてゐる。『議政府は聰明にして穩健な審議により、其の主長(ナポレオン)の猛烈な憤激を抑制し、以て國民に對し誠意ある奉仕をしたこと其の幾度なるかを知らない。議政府に於て暫々起つた深い沈黙の長い合間よりも、一層印象深い、又事實一層雄辯なる何物をも想像し得ない。而して又名譽あり、衷心公共的精神に富む議政官が、皇帝親臨の議場で、而かも度胸のない人々の奴隸的呟きの中で、甚だ大膽に、道德のために、又自由のために、強説したことの幾度なるかを知らない。』と。

議政府の取つた此の態度は、確かに立派なものであつたが、然かし其の効果はフランスに取つては、些少云ふに足らざるものであつた。即ち彼れをヨーロッパの主長としたチルジット條約直後、彼れ(ナポレオン)は護民院を不用のものとして解散して了つた。そればかりでなく、若し更に欲するならば、同様な都合の好い論法

で以て、彼れは他の凡べての立法機關を廢止することが出來た。何故なれば、樞密院や各省を通じて働く皇帝の意志は、無制限の勢力を持つてゐたからである。彼れは自分が任用する官吏が、民衆的であるかどうかといふ點なぞには殆ど關心を持たなかつた。事實彼れは、官吏を任用するに、彼れより他に一人の保護者無く、従つて彼れに忠誠を致さざるを得ざることを屢、第一條件として、非民衆的な大臣や知事を採用した。百眼の巨人アーガスの如き皇帝は、あらゆる行動や報告を、『これは自分に對する忠誠を示すや否や』といふ見地から見た。此の注意周到な特性は、遠征中でも少しも弛緩することがなかつた。『彼れは其の宿營中たると、或は軍事行動中たるとを問はず、出征先より遠くフランスを統治するのみならず、其の政務の一切を手づから處理せんと欲し、而してそれに成功した。』とモレアンは云つてゐる。ナポレオンが戰爭中、普通の政務を細大漏らさず自身執行せんとした模範的實例は、アウステルリッツ大戦の前夜、彼れが陣中で處理した、雑多の仕事の中に見られる。即ち彼れは、部下の主立つた將校に作戰計畫を説明してから、今度は側

を振り向いて、パリーの北郊サン・デニーに建設しようとする寄宿學校の組織を口授した。此の學校は、レジ・ンド・ノールの勳位を帯びる人達の娘を收容するものであつた。彼れは其の後長い年月の間、此の學校の基礎となつた校則を、明日の大戦に關係のある種々雑多の仕事から、僅かに捻出した一二時間の中に作り上げたのである。

斯かる多角面的な活動の結果、ローマ帝國以來ヨーロッパが一度も經驗したことのなかつた、最も甚しい専制政治が現出するに至つた。ナポレオンは自分が政府の機能に關して抱いた理想を、次の様な比喻の中に概説してゐる。そしてこれは彼れが創設した政治體系の意味を、立派に表明するものである。彼れはモレアンに云つた、『社會の體制上、政府は宇宙に懸かる太陽の役目を演ずる。而して社會に於ける諸種の事物は、嚴正に各自の軌道を辿つて、中心にある此の發光體の周圍を旋廻しなければならぬ。』と。然り、彼れ自身は此の中心をなす天體であつた。そして彼れの意志は、取りも直さず重力の法則であり、各自の軌道を廻轉する、

大臣、元帥、立法者、地方長官等を制御したのである。極めて輕微な脱線も、太陽の發する怒の一閃に阻止された。彼れ而して唯彼れのみ、如何なる問題をも凡べて解決し得るのであつた。古代ローマ以來、各時代に於ける多くの皇帝、或は多くの國王の獨裁政治を防遏した權力は、此の時既に少しも存在する所がなかつた。而して斯かる事情は彼れを、先蹤者よりも高い位置にまで昇らせたのであつた。カロロ大帝始め、カロロ五世、イギリスのヘンリ八世、ペテロ大帝、或はフレデリック大王等は各々、人種的、地方的、憲法的、貴族政治的、又は官僚政治的等々、種々の障礙に出會したが、ナポレオンは、民意の無上權を實現せしむべく、あらゆるものを均等ならしむる潮流が、總べての障礙を掃蕩した其の國土を支配したのであつた。而して自由平等の標語に依つて、均等化された大衆の裡に、特長ある個人を泯没させた。不自然の企に對する反動は、十年後の今日此の魁偉なる一個人を、最高の位置にまで騰進せしむべく、後援したのであつた。其の人(ナポレオン)に依つて、個性は奇異なる復讐と、絶對に他より侵害せられざる勝利とを獲得したのである。

彼れは自ら革命思潮に反對して、秩序と君主政治への反動を助長する鬪將を以て任じてゐた。彼れがロシア遠征に失敗した爲め、ヨーロッパ諸國の帝王が一時に起つて、フランスへ侵入すべく用意を整へつゝあつた千八百十四年の春、彼れはシヤプタルにかう云つた。「馬鹿奴等、彼奴等は俺れが革命を押し潰し、そして二十年に互つて、君主政治を鞏固なものにしようとなつたのを知らないのだ。俺れが行つてしまつた後で、彼奴等は革命思想の激流を止めるのに、自分達の力が餘りに弱くつて、到底それに堪へられないことを悟るに違ひない。そして其の洪水は十年の間に、彼等を一人残らず、押し流してしまふだらう。」と。此の言葉は當時に於けるナポレオンの心中を能く説明してゐるものである。然かしこれより先、彼れの勢威の絶頂にあつた時ですら、彼れは其の帝國の全盛の、彼れ亡き後は永續しないことを言明してゐた。嘗て次の様に議政府で云つてゐる。「これら總べては、余が支配してゐる間は、持續することは明かである。然かし余の死後、余が子供は、一年に二千フランの収入があつたならば、先づ彼れ自身を幸福であると云つて可い

であらう。」と。

熱烈で神經質な性格によく見る此の直感——來るべき凶事に關する——は彼れが内外の敵に加へた、あの猛烈果敢な攻撃を克く説明する。即ち彼れは自分の親政の中に、凡べての反對を根絶しようとなつた。革新された社會を基礎として、君主政治を確立しようとする計畫は、確かに大きな又活氣ある理想であつて、それは重大なる結果を將來する所のものであつた。彼れの公共事業が、物質的繁榮に與へた衝動は、過賞するに困難である。ナポレオンは此のために、自身を、息をもつかせず驅使した。而して地理に關する明徹なる識見と、人間の根本的要求に對する其の洞察とは、彼れをして容易に、フランスとヨーロッパの大半に互る、交通及び商業を發達させる方針を劃出せしめたのである。フランス以外の國土に於ける、其の計畫の概観は、暫く第七講に譲り、此所ではフランスの繁榮を増進した計畫の主要なるものを、一瞥して見ようと思ふ。

ナポレオンは元來ローマのシーザーの様な人物を崇拜した。其の結果、彼れは

自然シーザー風の施政方針、殊にシーザーが首府ローマと各地主要都市間の直接交通を確保し、平戦兩時に於て帝國各部の連絡を緊密ならしめた。道路系統を研究するに至つた。ナポレオンは自ら、隣接諸國の征服者兼鎮靖者を以て任じてゐた。そして道路と運河は、事實彼れの隣接國統治に必要な道具であつた。彼れは、敵の攻撃に曝露された邊境への道路、就中パリよりコロニー、マインツ、或はストラズブルグに至るもの、又マインツからコロニーに至るライン左岸に沿ふもの等に、大改良を加へた。それから又アルプス山脈を越え、イタリアに出づる、モン・セニ、モンジ・ネヴル、或はシンブロン峠等を経由する道路は、大砲を引き具す軍隊が通行し得る様に改善され、雪崩の虞ある場所には、トンネルが開鑿された。ナポレオンは義子ユージェーヌを、ミランに駐在するイタリア太守に任命して、千八百五年後、彼れに向つて、急信は必ずパリとミランの間を五日で届く様に、道路と飛脚機關を改良すべき旨を訓令した。彼れ(ナポレオン)が北海岸に兵を集めて、イギリス侵寇準備を整へてゐた頃は、パリからブローニー、シャルブル、プレスト等

に至る道路を最も重要なものとし、パリから北イタリアのトリノ、南海岸のツロン、及び西方イスパニア國境に至る道路を、それに亞ぐものとしたけれども、ストラズブルグやコロニー(ブラッセル經由)に達するものは、餘り重要視しなかつた。勿論此の等級は、其の後對外政局の推移に伴つて變化し、ライン流域に達するものや、シンブロン峠に至るものが、ナポレオンの意中では第一位を占めることゝなつた場合もある。千八百十年彼れがヴァレ州を併合したのは、千八百七年に完成した、ローヌの上流谿谷を遡る、シンブロン街道を監制しようとする希望が、原因であつた。此の一大組織家の獎勵は、全フランスの交通機關を改善するに十分であつた。大革命は、所謂舊時代に行はれた、名主の命令の下に村民が道路の修繕に衝つた賦役を廢しても、それに代へるに何等目星しいものを以てしなかつたので、ナポレオンの企てた此の改善は、非常に人目を惹いたものであつた。

これより先、千七百九十三年、革命政府は、送信の手段として、一技師クロード・シャップの發明に係る、腕木信號柱による重要な通信法を採用した。そして夜間は此

の信號柱の腕木にランプを繫揚したので、晝夜を分たず、一信號所から發する通信は、七哩半以内にある隣接信號所で受信された。此の方法で音信は第一等線のパリ、リニエ間(百五十五哩)を瞬く裡に送られたのであつたが、ナポレオンは此の有効な機關を更に大擴張して、西方はパリとプレストとを結び、東方にはヒューニゲンとパリと連絡し、又南方はリヨンを経由して、イタリアのミランと通信を遂げた。然かしナポレオンは信號漏洩の危険を顧みて、高等政策に關する事柄は、早飛脚に頼つた様に考へられる。千八百五年遞信大臣ラヴァレットは先頭左馬騎手(馬車)をして、驛より驛へ高速度で信書を傳達し、其の發着を帳簿へ記入させる規則を作つた。此の方法は時間と費用との兩者を大變節約することが出來た。斯かる組織が完備して以來、ナポレオンのミラン駐在イタリア大守に對する通信は、八日で返信を手にすることが出來たし、又ネーブルスとパリとの間のものは十五日後に返信を接受し得た。従つて此の優秀な通信系統は、ナポレオンの成功に深く貢獻する所があつたものである。

フランスの運河系統も、皇帝の下に大きな發達を遂げた。從來フランスは此の點では、イギリスに一籌を輸してゐた。イギリスでは既にブリンドレイがブリッチウ・ター公のために、ウォルズレイ、マンチェスター間に開鑿した、ブリッチウ・ター運河を始め、其他同様の企圖が大成を收めつゝあつたのみならず、十九世紀の初頭にも亦、カレドニア運河、リドゥリバブル運河等の如き大工事が計畫され、或は既に着工されてゐた。唯フランスではナポレオン以前には、運河が餘りなかつた様に云はれてゐるが、斯かる批評は、オルレアン運河やランゲドック運河等を計畫し、又は實際開鑿して、ガロンヌ上流と地中海を連絡した、コルベイルを始め手腕ある大臣連に氣の毒な批評である。然かし要するに十八世紀末に於けるフランス國內の運河の總延長は、約五百哩であつたのが、ナポレオンに至つて、更に千二百哩の運河が開鑿され、國內の主要な水系は、凡べて皆連絡を取り得る様になつたのであつた。此れらの中で最も重要な運河は、サンカンタンを経由して、オアーズ河とシェルト河とを結ぶものであつて、これによつて千八百十年初めて

ベルギーの石炭が廉くパリへ輸入されることが出来た。又ストラスブルグよりソヌ河に至る延長二百哩を越ゆるものも、重要なものゝ一であつた。兎に角斯かる事情からしてナポレオンの時代となつて、パリ、リヨンを筆頭として國內の大都市は、以前よりも廉價に且迅速に、生産品を輸出し、食糧品を受け納れることが可能となつたのである。此の情態は政治上の平穩を齎すに頗る好都合であつた。ナポレオンはシャブタルとローデルの二人に向つて、自分は飢餓が原因する騷擾を怖れるけれども、單純な政治運動には無關心であると語つたことがあつた。後者の場合に就いて彼れは、『余は容赦なく葡萄弾を用ひる。而して千二百の兵と四門の大砲とは、全パリを其の店舗の中へ押込むことが出来る。』と云つてゐる。然かし彼れは餓に迫つた人民の苛立つた心理状態をば甚しく慮れ、多くの商店が失業しない様に、常に多額の金帑を支出するのを厭はなかつた。そして此の方策は一再ならず危機に奏效したのであつた。内相^註シャブタルも亦これに應じて、緊急の場合に廉賣すべく、パリに莫大の穀物を貯藏して萬一に備へること

を忘れなかつた。運河や河川を利用して、パリに廉價に而して容易に、穀物を搬入する問題は、ナポレオンの書翰の所々に散見する所である。又同様の考から、彼れは千八百五年三月六日に、モウ町の北方地區からパリに飲料水を供給するために設計された、延長六十七哩のウルク水道を、小形の荷足船の運航に利用しようと、企てたことがあつた。

註、シャブタル回想録によれば、此の政策は明かに古代ローマの共和政治及びローマ帝國の施政に則つたものである。

ウルク水道に關する原案は、一種變つた経緯から生れ出た。それは或る日ナポレオンがマルメイゾン宮の庭園で、シャブタルと會見して、重要な用件に就いて意見の交換をなした時のことであつた。彼れは斯ういふことを曰つた。『余はパリを世界一の美しい都にしたい。十年後には人口を二百萬にしたいものだ。』と。

これに對してシャブタルは次の様な意味のことを答へた。其の様な莫大な人口を即座に作り上げることが、パリイを邸宅とし、それを藝術、科學、或は産業の中心と爲し得る偉大な君主でも不可能なことである。又二百萬の人口を維持するには第一に糧食の供給、産業製品の販賣に對して十分なる方策が無ければならない。然かしながらパリイには此れら二つとも十分に具備して居らぬ。ルイ十四世はロアール河の水をセイヌ河に落し込んで、一年の大部分同河(セイヌ)の航行を可能ならしめ、中部フランスの生産物を首府に持ち込まうと考へたことがあつた。(シャブタルは尙續けて曰ふ) 現在パリイは百萬の人口でも、これを扶養することは困難である。であるから、人口の増加は自然法則に任せて置くのが遙かに賢明である。シャブタルの言葉が終ると、ナポレオンは云つた。「宜しい。其の議論は確かだ。然かし余はパリイのために、何か大きい且有益な仕事をして見たい。此の點について御身にどんな意見があるか。」シャブタルは答へた。「それではそれに水を供給されたい。」『何、水、パリイには澤山な泉と大きい河があるのに。』これに

應じてシャブタルは、パリイでは飲料水が不十分で又高價であるため、小さな家庭ですらも、一日の生活に必要な手桶の水二杯に、二スウ即ち十センチムを支辨せねばならないことを指摘し、更に路傍の飲料水槽、並びに撒水機關の不備なことを説いた。これに對してナポレオンが其の救済策を求めたのに、シャブタルは二通の方法を教示した。其の第二の方法が即ちウルク河の水を水道によつてマルヌの河谷を下らしめて、パリイの北東ラヴィレットまで導き、其所から更にパリイ全市に給水しようとする案であつた。直ちにナポレオンはこれに應へて、云つた。
『^註余は後者を採用する。卿が歸宅したならば、ゴイテイを呼んで、明日ラヴィレットで運河の開鑿に従事すべき五百の人工夫を、用意するやう傳へよ。』と。

註、パシイの『フロロシ・ロイ傳』によれば、ウルク水道の計畫を最初に提言したのは、當時のセイヌ縣知事フロロシ・ロイである。

一見した所、賢人政治が、分科委員や委員等の委員會制度、或は議會の議決等に依る政治組織に對して都合の好いことは、絶對的である。然かしシヤプタルが云つた様に、此の時は此の偉大なる専制者も、自分の思ふままに仕事を運ぶことが出来なかつた。技師ゴイテイは五百人の工夫が濠を掘り始める前に、先づ敷地測量の必要を極力主張したので、火急な着手は幾分遅延を來した。其の他尙一つ工事を延引せしめたものがあつた。それはパリーに對する飲料水の供給と、荷足船の運輸とを結び付けようとする、皇帝の希望そのものであつた。此の考は、百餘年前に社會を支配した衛生思想をよく説明してゐる。^註而してかの千八百十年と十一年に悪疫が蔓延したのは、ウルク水道の不潔に因るものであると云はれてゐる。ナポレオンがウルク水道の計畫に對して抱いた特別な關心は、次の出來事によつて察せられた。それは彼れが或る日ボンデイの森で狩獵をした時、彼れは此の水道を横ぎつたが、工事が中止されてゐるのを見て大變に憂慮し、即刻狩獵を止めてパリーに還り、そして責任者全部に即夜彼れの面前に出仕するやう命じたことであ

る。而して吾人が、此等責任者を待つ接見が如何なるものであつたかを、想像するのは敢へて困難なことではない。

註、『ナポレオン書翰集』或はランザック・ドラボリーの『ナポレオン治下のパリー』によれば、千八百十年及び十一年に於ける熱病の流行(パリーの)はウルク水道の不潔が其の原因であつた。

ナポレオンが計畫も出來ない前に、工事を始めようと強情を張つたのは、唯此のウルク水道の場合にのみ限られたことではなかつた。或る夜而も眞夜中近い頃、彼れは建築技師のファンテイヌを迎へにやつて呼び寄せ、そしてファンテイヌに向つて翌日軍隊の記念のために、カルーゼル街に凱旋門を建築すべく、五百人の工夫を用意するやうに命じた。ファンテイヌは未だ工事の基礎となる、見積も設計もないことを切言したけれども、それは結局無駄であつた。そしてナポレオンは

どうしても翌朝工事に着手せねばならぬと、頑張つた。宮内大臣デュロックが、五百名の工夫の既に地面を掘り始めたのを見ての驚きは、非常なものであつた。デュロックは直ちに使者をダールの所に遣はして、自分に其の事を豫告しなかつたことを咎めた。然かしダールもそれに就いては何も知らなかつた。そこで二人は更にフォンテイスを迎へにやつた。彼れは初めて彼等が迷つてゐる謎を解いた。こゝで漸く三人揃つて、既に基礎工事を始められてゐる、有名なカールゼルの凱旋門を設計すべく、全力を注いだのであつた。

ナポレオンの斯かる行動は、麾下の大臣や官吏を、常に緊張の下に置くと共に、又續いて來るべきものに懸くる期待を以て、政治社會を倦怠に陥らせなかつた。ナポレオンの勁健な活動性の好適例である。斯ういふ方針は抽象的理想や黨争で、極度に神経を刺戟された國民に取つても亦頗る効果があつた。ナポレオンはフランスに精神的安靜と猛烈な筋肉的訓練を課した。専門學校を卒業したばかりで、無政府主義に傾き、且神経過敏な思想倒れの青年が、軍隊に入り、訓練係の下士に一

二年教育されて蒙る變化も、これと同様な性質のものであつた。前に受けた教育では、凡べてが頭腦を養成する様に仕組んであつたのに、今度受けるものは、肉體の訓練が主要な課目であるので、鋭敏で懷疑的な學生は、變じて鈍重従順な新兵となつた。疑もなく當時フランスは、此の如き方向を取る變化を必要とした。けれどもそれが餘り急激だつたために、フランスは其の性能の權衡を破壊されて、適時に其の輿論を主張する場合にも、勢ひ受働的ならざるを得なくなつたのである。

斯くしてフランスの物質上の進歩は、頗る大なるものがあつた。パリイは美化され且豊滿にされた。ルーヴルの美術館は世界美術の逸品の淵藪となつた。ナポレオンはセイヌ河に架する四つの橋を設計し、それを實現した。その橋々には彼れが戰に勝つた地名の、アウステルリッツ、イエナ、アルツ、及びセイヴルの名を冠せしめた。又多くの道路へ舗石を敷き、歩道を設けた。(千七百八十九年以前、即ち大革命が勃發する前には、パリイに於て歩道を有し舗石の敷かれた道路は、僅かに三條に過ぎなかつた)而して又新たに道路を作り、それらにも戰勝地に因んで、リ

ヴ・リ、カスチグリヨンド・ラ・ベイ、或はピラミッドなど名を付けた。又有名なノートルダム寺院は、其の前面の觀覽や其の建築を望見するに邪魔になる數個の建物が取り拂はれ、又附近は相當な建物で填め塞がれて、其の美觀を一層助長せしめられた。後年ナポレオン三世に仕侍した男爵オースマンは、彼れ(ナポレオン三世)は煉瓦のバリーを迎へ、大理石のバリーを遺したと云つたが、此の變化は實際はナポレオン一世とシャブタルによつて始められたものであつた。シャブタルはバリーを美化する計畫は全部自分の提案に依つたものであると云つてゐるが、これは誇言に過ぎないので、此の大進歩はナポレオンが遂行したところで、彼れは只單にナポレオンの手先となつて働いたのに過ぎないものであつた。

リヨンを大都市にしようといふことも、ナポレオンの頭に浸み込んだ考であつた。實際彼れはバリーよりもリヨンを好んでゐたと云はれてゐる。彼れは嚴しい保護政策によつて、同市の絹絲業を奨励しようと圖つたので、リヨンの商人はこれを非常に有り難く思つてゐた。そしてフランス帝國の境界が擴張されるに伴

つて、リヨン市民の製産品にも、ベルギー、オランダ、北部ドイツ、及びイタリアの大牛に於て、從來よりも遙かに大きな市場が開かれて行つた。ナポレオンは、不景氣や一時的の金融逼迫に際して、製産品を買上げて、リヨン始め大きな都市の製産業を保護しようとも試みた。斯ういふことが原因となつて、彼れが千八百十五年春エルバを脱出して、バリーに至る途上、リヨンは極めて熱誠なる歓迎を彼れに致したのであつた。フランス國民は昔から強い保護政策的な傾向を示してゐる。さればナポレオンは、商業の國家的組織を擴充することによつて、フランスの民心を捉へようとした。千八百六年三月、イギリスとの媾和の曙光が、幾分か見える時ですら、彼れは議政府で、次の様なことを云つた。『イギリスとの媾和締結後四十八時間内に、余は外國製品の輸入を全部禁止し、且航海條例を發布する。それは我が港灣から外國船を全部驅逐し、船舶はフランス材で建造し、船員の三分の二は、フランス國を採用すべき旨を規定するものである。イギリス炭やイギリス人も、フランス國旗を繫揚する船舶でなければ、我が海岸へ上揚陸することを許されない。此の結

果、最初は大きな叫喚が、國民の間から起るだらう。それは現在我がフランス商業界には甚だ悪い風潮が瀰漫してゐるからである。然かし其の後六年も経つと、吾人は甚大なる繁榮を享受する様になる」と。其れより一寸以前、彼れは又次の様なことを云つたこともある。「余の財政組織は、多くの間接税の設定に基礎を置く。蓋し税法と税率とは極めて妥當なものであり、而かも國家の必要に應じて、増徴され得るものでなければならぬ。現在余は六億五千萬フラン(二千六百萬ポンド)を以て満足するも、一旦緩急の場合には立ち所に一億フラン(四百萬ポンド)の收入を増加し得る能力を、保有することを希望するものである。さり乍ら、余は現在余の子孫が多分行使し得られないと思はれる程、多くの手段や方略を持つてゐる。而して余の子孫は斯かる方略を恐らく抱懐しないであらうから、余は彼等のことを、自分自身と同様に考へて後圖を計つてやらなければならぬ」と。然かし此の間接税法は、幾干もなく非常に苛重なものとなつて來た。而して後になつてからナポレオンは、其の誅求が彼れの評判を悪くしたことを自身でも承認した。然か

し乍ら税率は苛重であつても、租税の原理からこれを見る時は、決して國民がそれを嫌ふべき性質のものではなかつた。フランスは今まで、統領政治と帝政時代——即ちナポレオンの執政年間——程、保護政策的であつたことはない。フランスの製造家は、大陸制度の禁止的政策を歓迎したものであつた。

確かに此の制度(大陸制度)は、イギリスに恐るべき損害を興へた。そしてそれは殊に千八百十年以後に甚しかつた。其の結果イギリスに對する爲替相場が、平價の三十パーセントに低下したので、ナポレオンはロンドンに於ける經濟上の信用が、直ちに崩壞するものと豫期した。であるから彼れは、海上に於けるイギリスの壓迫を打破するために、苦闘に堪へおほせる様、出來得る限りの手段を用ひて、盟約國を鼓舞することに努め、而して彼れは巧みに此の題目(イギリスの經濟的破滅)を繰返して、千八百十年の後期に、財政上の法令を發布することに成功した。然かし此の法令は彼れの屬邦、殊に北部ヨーロッパの諸國に、戰慄すべき困苦を齎したのであつた。モレアンが云つた通り、ナポレオンのあの驚くべき生涯に於て、最も感

嘆に値する一事は、此の苛酷にして而かも大規模な政策を實行せんとした、其の執拗さである。世人は此の企に就いて考慮するに當り、皇帝の強大なる綜合力を嘆すべきか、乃至ヨーロッパの諸國民が、一時でも認容した自己放棄と服従との程度に感心すべきかに迷ふ。此の實驗は當時の如く社會の全部が財政經濟に關して極端に無知で無かつたならば、勿論不可能であつたらう。ナポレオンは廣大なるフランス帝國內に於ける商業の發達は、海外貿易の全滅によつて蒙る損失を補填するものと信じて疑はなかつた。然かし其の結果は、彼れの希望を痛く裏切つたものとなつて現はれた。而して此の企の失敗は、千八百十二年から翌十三年にかけて、ロシア、スウェーデンを始め大陸諸國の大部分が、續々彼れに對して叛旗を翻した、根本原因となつたものと考へられる。

ナポレオンは晩年に至るまで、重商主義者であつた。それは彼れが千八百十七年九月十九日、セント・ヘレナに於てグルゴールに話した言葉が其の事實であることを證明する。曰く、『イギリス人は魯鈍だ。若し余が彼等の立場に立つたならば、

最後の條約に於て、自分獨り支那海や東インドに航海して、通商し得る様に約定しただであらうに。彼れらがオランダ人にバタヴィアを遣しフランス人にブルボン島を遣したのは、迂愚の骨頂である。……アメリカ人は其の後支那海を航行するのを許さるべきではなかつた。フランスの敗退した今日、イギリス人は戰列艦三十隻を以て、アメリカの全海岸を封鎖するのは困難でない。……アメリカ合衆國は無力だ。故に現在イギリスは世界の牛耳を取ることが可能である。殊に大陸から兵を撤し、單に海上王國としてゐることに依つて。……さうすれば、彼れは其の欲する所を行ひ得るのだ。』と。吾人は此のナポレオンの言葉を、全部眞正直に受取るのを警戒しなければならぬ。と云ふのは、ナポレオンの性來である狂熱性は、屢々彼れ自身を彼れが考へてゐる所よりも、遙かに彼方まで驅り去らしむることがあつたからである。かのモレアンが云つた様に、『彼れの狂熱性は、彼れをして規定の目的を越ゆるまで、走らせることが往々であつた。』然かし聰明なる讀者は、眞面目と沈黙のチャンピオン、カーライルがアメリカ即ちフィリスタイン人や、

馬車を持つ紳士等を縦横に評論する際に、彼れ、カールライルに許すと同様の廣い寛容を、燥急の氣分に焦立つナポレオンにも許してくれるであらう。それは暫く措いて、皇帝の經濟觀は明らかに、ルイ十四世やコルベール時代のそれであつた。彼れはフランスと其の屬邦とを、堂々たる企業によつて發達させようと欲した。即ち彼れの目指す所は、西インドの砂糖、或は東方諸國の絹、或は染料等の供給を仰がずとも存立し得る様、彼れの帝國を自給自足の一單位たらしめ、以て敵を壓倒しようとするにあつた。而して人類の有する精力と忍耐が、爲し得る最大限の仕事に於て、彼れは成功したのであつた。然り、主要なる幾多の産業、殊に糖根より砂糖を製出する工業は、彼れが種々の手段や工夫を考へ出すのに苦心したことを證明する所のものである。何人と雖も未だ嘗つて、彼れの如く強硬に、全大陸をしてそれ自身に頼らしめ、而して其の潛勢力を發揮せしむべく、強要したものはない。ナポレオンは失敗した。然かし彼れの企てた仕事は、彼れの特色と彼れ自身の影像を焼付けた、其の時代の特長である壯大雄渾を以て飾られてゐる。

ナポレオンは單に商業、産業、乃至大帝國の政治や機構を統制するばかりでなく、又輿論の趨向をも嚮導しようと努めた。大革命のために早熟したフランスの知識階級を指導する業は、彼れのヘルクレスの仕事の中でも、餘り簡易なものではなかつた。然かし吾人が考慮に入れなければならぬ點は、大革命の刺戟に疲勞したフランス人の頭腦が、國民集會や總裁政府が間斷なく課した種々雑多の取締りを能く受容れたといふことである。國家と云ふ大船を勤王主義のシラと、無政府主義のカリブデイスとの間を、安全に操縦し航過するには、政府が印刷物を取締る必要があつた。ナポレオンは保守と急進との中間の政體に都合好い制度を承け繼いで、初めてそれを具體化したのである。統領政治の初頭から、彼れは斷乎として、印刷物を統制すべく決意した。千八百年一月十七日(統領政治の創設直後の法令によつて、三統領は六十に垂んとする新聞を廢刊し、檢閲に従順なもの僅か十三種の續刊を許したのみであつた。新聞雜誌の創刊は、政府の直接の許可がない

時は出来なかつた。そして此れと同時にナポレオンは、總べての書籍、小冊子、貼札等をも嚴重に取締る様に、圖書頭に命じたのであつた。

ナポレオンの印刷に關する意見を述べた手翰は、間々人と仕事との兩者を管理せんとする、彼れの狂躁振りを示してゐる。彼れは千八百五年五月三十日、ミランからパリーのフーシエに向つて、北イタリアの變化(國境の)に、ロシアが不平であるといふ風説に就いて送つた手紙で云つた。『ロシア、あの腐敗した薄弱で無智なロシア政府を利する様なことは、一行も新聞に書かしてはならぬ。事實ロシア政府は現在幾分強氣を誇示してゐる。然かし其の元氣は、大體其の内閣自身が何事も爲し得ないといふ虚勢的な氣持から反つて發生してゐるものに外ならぬ。此れはイギリス人の破廉恥な態度と、好個の對照を示してゐる。兩者は共に包圍せられた城塞に比すべきものである。……漫畫にすれば、一人のイギリス人が財布を手にして、金を貰つて貰ふ様に、諸國に懇願してゐる圖である。然かしこれは全く凡有る事件を起す實際的方法である』と。翌年の春になつて、ナポレオンは更に

残つてゐる新聞の幾つかを、外務省の代辯人とした。加之千八百六年三月六日に復た彼れはタレーランに送つた手紙で云つた。『モニター紙の政治記事は、外務省で書かなければなるまいと考へる。そして一ヶ月後其の結果如何を見て、他の新聞や雜誌が、同紙の記事の復寫以外、政治を語るのを禁じたいと思ふ』と。

斯かる折シ、トープリアンのベンから、次の文章がメルクルド・フランス紙へ現はれた。而してこれに對するフランス官界に起つたセンセーションは、想像するに難くないものであつた。『詩神ミューズは屢々罪惡をも描寫する。然かし詩人の言葉には汚れた罪も、美化する底の或るものが存する。而して唯歴史家のみが、罪惡の慘害を有りの儘に描出し得るのである。淺ましい沈黙の裡に、奴隸の腰に付けた鐵鎖の響と、密告者の囁きの外何も聞えない時、而して萬人が暴君の前に跪き、而かも彼れの寵遇を享くるは、不名譽を蒙ると同様に不安の場合となつた時、歴史家は大衆の復讐を身に負うて現はれる。ネロは繁榮するも甲斐なし。如何となれば、タンタスは既に帝國内に生れ出たからである』と。此の勇敢な文章は千

八百七年七月四日、即ちチルジット條約締結前三日に現はれたのであつた。シャトーブリアンは其の備忘録に、ナポレオンが此の文章を読んで、『シャトーブリアンは余を目して、彼れを理解しない馬鹿者と思ふのか。余はチャイルリー宮の階前に於て彼れを斬らん。』と云つたと記してゐる。差當り皇帝は同紙を監視すべく、特別監察官を設置した。そして彼れはフランスへ歸つてから、八月十四日附の手紙でかう書いた。『直接間接を問はず、ブルボン王家のために盡すものは、聖書の物語と、ダヴィッドがアハブ家に對して如何なることを爲したかといふことゝを忘れてはならない。此の話は又シャトーブリアンと其の徒黨にも當て嵌まるものである。』と。

フランス軍の占領を怒つて、マドリッドの市民が騒動を起して後、千八百八年五月二十一日、ナポレオンはフィッシュェに、パリーの諸新聞は政府の機關紙モニートルが示す手引に依らなければ、此の事件に就いては、何事も書いてはならないといふことを警告した。即ちモニートルの掲げて手本としたものは、『此の事件でフラ

ンス人が死んだものは僅か二十五人で、一方イスパニア人で命を墜したのは、凡べて職業的の騷擾屋か、或は低級な暴徒に過ぎない。』といふのであつた。其の後又彼れは千八百九年七月二十六日シエンブルンに滞在中、パリーにあるフィッシュェに不穩な記事を掲載した廉で、ガゼット・ド・フランス紙の主筆を罷免し、禁錮一ヶ月に處すべしと命じたことがある。而してフィッシュェを譴責する意味で附言した。曰く『實際警察官は文字の読み方を知らない様だ。彼等は毫も物事に注意しない』と。ナポレオンは山河幾百里を隔つるシエンブルンに居てさへも、萬事に意を配つてゐたのであつた。出版物の主要な記事は、一つとして彼れの巨眼を避くることは出来なかつた。而かも斯かる嚴密な注意にも尙彼れは満足しないで、千八百十年二月五日勅令を發して、フランスの出版物全部を、一層嚴重に管理することにした。そればかりでなく、此の目的を達成するために、パリー市内の印刷屋を六十と限定し、而かも彼れらに服従と善行とを誓はせた。千八百十一年の秋季となつては、パリーで發行してゐた最後の四新聞をも、終に政府の掌中に入れて全然其の傀儡と

して了つた。斯くしてこれより後三年間、即ちナポレオンが失脚する千八百十四年まで、事實上フランスに出版物は存在しなかつたのである。

これに關聯してナポレオンが、マダム・ド・スタエルに對して取つた處置は、甚だ特異なものであつた。此の二人の間には先天的に相容れざるものが存在してゐた。事實最初彼の女はナポレオンを尊敬してゐたのであつたが、間もなく彼れと反對の極點に立つ様になつた。そして其の著『コンシダレーション』の中で、ナポレオンの性質を指して、造つた傷を自から麻痺させる、冷たい刀劍の様に感じるとさへ批評する程になつた。一方ナポレオンの側から見れば、彼の女は自分の殊に嫌ひな二つのもの、即ち熱狂的理論家と天才的女論客といふ點から厭やになつたのであつた。さればナポレオンは、第一統領時代既に此の怖ろしい舌と、四十リグ(約百二十哩)の距離を、保たなければならぬ様な次第であつた。和睦しようとする數度の努力も其の甲斐がなかつたが、千八百十年に此の閨秀作家は、著書『獨逸』をパリで出版するに就いて、其れを監督するために、敢へて法律で許されてゐる最

小距離、即ちパリから四十リグの所まで來り住むことになつた。而して彼の女は此の書に於て殊更に、ドイツやフランスの政治に就いては、一言も費さず、而かも同書が同年二月五日の取締令の干渉を免れることをすら希望してゐた。一方ナポレオンも最初は、ブラウンシュ・ワイヒ公の記事と、彼の女がイギリスを稱揚した記事の四分の三を削除させて、其の出版を許可する心算でゐたが、其の内に考が變つて、全部の出版を禁止して了つた。二人が漸く仲直りしようとしたことも、これで駄目となつた。ナポレオンの侍従コンスタンは、彼れ(ナポレオン)がそれを火の中へ投じたと云つてゐる。而して現に印刷中であつた同書を、ナポレオン自身サヴァリーに命じて、沒收させたことも事實である。サヴァリーは其の旨に従つて、スタエル夫人に、フランスの雰圍氣は全然彼の女と反對であることは明瞭であり、『且吾々も貴女が稱讚する國民(イギリス國民)の中に、模範を求める迄に進歩してゐない。貴著は全くフランス的でない。自分は其の印刷を差止める。』と宣告した。其の結果マダム・ド・スタエルは、一週間の中にフランスを立ち去るの餘儀な

い仕儀となつたのであつた。

註　パウル・ゴイシェーは、ナポレオンが後年エルバ流亡中、同書の没収はサヴァリーの責任だと主張したのを反駁してゐる。

此の事件は不屈な態度を持する操觚者に對して加へたナポレオンの行爲の典型的なものである。而かも彼れは言論の自由を束縛しながらも、其の反抗を欲せざるのみか、却つて積極的援助を望んだものである。然かし斯かる厚顔な要求は剛直な思想家凡べてに取つて氣に喰はないものであつた。何時の時代でも偉大なる操觚者は、權威に屈して筆を執るものではない。斯くしてナポレオン帝國は、ナポレオンが反對者としたシャトーブリアンとマダム・ド・スタエルの作品以外には、飾りて以て其の文化を誇るに足るべき、不朽の文學的所産を、一つも持たなかつたのである。思想は抑壓された。フランス國民の汲めども盡きぬエネルギーは、

全く方面違ひな軍事的偉績、建築學的功業、産業の發達等にそれ自身を示現した。而して此の實利主義に對する反動は、さう早急に來ることはなかつた。これより先フランス革命が勃發した千七百八十九年から、恐怖時代の始まる千七百九十三年まで、フランスには新思想が沸き滾り、政治上や社會的の夥多なる實驗を以て、それは張り切れる程であつた。アーサー・ヤングは其の著『フランス旅行記』に於て、千七百八十九年にフランスを巡遊した際、パレローワールの店々からは、毎時間新刊冊子の發行されるのを見たと言つてゐる。彼れは又云ふ、『十三種は今日發行され、昨日は十六種、而して先週は九十二種の書籍が出た。……此等出版物の二十分の十九は、自由を讚美するものであつた。……而かも政府は斯く極端に放縱な發行をも、拘束制御すべく、何等の手段をも取らなかつた』と。然るにナポレオン全盛の十年間、フランス國民の思想は萎縮し、其の多方面的の精力は、唯一人の意志より發現する、規則憲法、法典、或は軍事計畫等の如きものに、具象化されるに過ぎなかつた。

ナポレオンがフランス並びに中央ヨーロッパの絶対君主となり、且打見た處彼の王朝の基礎が鞏固となつた時に、此の印刷と文學の自由に加へられた壓迫が始まつた。然かのみならず、彼れは千八百九年ワグラムの大戦から還るや、皇后ジ・セフィンを離別して、『帝國』なる一大機構を一層完全にしようと考えた。彼れのために一人の子すら生み得ざることを理由として、彼の女を離別するのは冷淡な所爲である。然かしながら此の場合、國家政策は彼れの行爲を決定し、又それは糟糠の妻に對する戀愛とは云ひ得ざるも、尙情愛とは稱し得べき私情に打勝つた。凡有ゆる點から研究して、此の離婚問題に關する限り、ナポレオンは今まで屢々加へられた程の非難を受くるには當らないだらうと思ふ。偉大なる統治者は、先づ第一に彼れの治むる國家の安定、及び甥の人格よりも、實子の人格によつて、一層確實にされる其の王朝の將來に關して、細密なる注意を拂はなければならぬ。乃ちナポレオンの關心は彼れに向つて、古き歴史を有つ王朝の一つと縁組することを勧めたのであつた。ジ・セフィンの後繼者であるオーストリアのマリアルイ

ザに對して、彼れは頗る妻君孝行の亭主であることを證示した。而して長い間渴望した嗣子の誕生する折、母の生命か赤兒の生命か、其のいづれか一つを犠牲にしなければならぬ危機に瀕したが、彼れは醫師に母の命を取止める様に命じた。此の決心は永く彼れの信用を高めるものであつた。彼れの生涯に於て、此の決心程多く、彼れの信用に貢献したものは其の比を他に求むることが出来ない。

勝利を獲る度毎にナポレオンの権力は強まつて行つたが、今度彼れの生涯を完からしむる嗣子が生れたために、彼れは遠慮なく、從來より一層強く権力の手綱を引き緊むるに至つた。そして千八百十年末には、西北ドイツ並びにハンブルグとリッベックの自由市を併合したので、彼れの領土はバルチック海岸まで擴大した。茲に於て一つの疑問が起つて來る。即ちナポレオンが、北は北海岸から南はローマの平野に至る、全陸地を包含する、此の膨脹し過ぎた國土を、果して能く緊結し得しや否やといふ問題である。此の大帝國を緊かり纏める方法としては、恐らくそ

ここには唯一つの手段があつた。それは最深の仁慈と卓絶せる手腕とによる統治これであつた。即ち大陸制度や出版法の寛宥、又出来得べくんば税法の停緩等は、人民の満足と帝國の安固を増進せしめたであらう。當時フランスは勿論、世界は一般に休息と安靜とを求めてゐた。然るにナポレオンの性質の中には、凡そこれと正反對に平和の思想を輕蔑する或るものが存在してゐた。されば此の重大の時機に際して、出版法や大陸制度は、從來よりも却つて一層苛酷なものになつて行く始末であつた。然かのみならず、第七講で述べる様に、ナポレオンはイスパニア人を慰撫することや、ロシア皇帝との不和を和げることや、肯ぜず、又幽閉せる法王ピウス七世を冷遇し、ためにコンコーダットによつて贏ち得た、敬虔なカトリック教徒の後援をも失ふ様なことになつて了つた。

此の熱病的焦思、物事を放任することの出来ぬ氣分には、それらが由つて来る種種の原因があつた。或る人達はこれを彼れの喘ぐ息づかひと、神経性虚脱によく姿を現はす、癩痢の痼疾に歸してゐるし、又或る人々は、身體の全機關を冒かし、其の

判識力を毀損する、一種の潜在的疾病に原因を求めてゐる。此の問題に就いて、余は唯推量するのみである。それは兎に角、此の太陽神は、彼れの弓を弛めなければならぬ時に、依然それを引絞り、ロンドンもカディズもモスコウも差別無く威嚇し續けた。而かも彼れは穩かな超脱振りを缺いてゐた爲に、大君主達の機嫌を損じ、世界に背を向けられることになつて了つた。これに反して彼れは部下の將卒に對しては常に寛大であつた。なぜならば彼れはいつも心から、彼等の同僚であつたからである。故に將卒も亦最後まで彼れを愛敬して止まなかつた。然かし一般國民は心から平靜を欲し休息を求めてゐた。而して此の熱望が取りも直さず、彼れの弛むを知らざる熱誠を、否認し去つたのである。

フランス人の性質である快活な無頓著は、彼れの氣持とは全く相容れざるものであつた。チャールス二世が死の床に就いてから、餘りに長く死ぬことが出来な

いのを、廷臣に詫びた様な、湧き出づるユーモアを彼れは持合はさなかつた。尙彼れには、フレデリック大王が嘗てウンテル・デン・リンデン街を馬で通つた時、彼れ(フ

レデリックの似顔を畫いた漫畫を見ながら示した様な、宏やかな態度で笑ふことも出来なかつた。フレデリック大王は此の時畫の傍へ行き、侍者を呼んで云つた。「人達が見るのに、頸を伸ばさずとも済む様に低い所へ懸けよ。」斯くして彼れは、國王萬歳の歡呼の裡を、悠々と馬を打たせて去つたのであつた。ナポレオンは恐らく斯かる場合には、漫畫家を禁錮するか、或は自分を英雄らしく畫かせたであらう。如何となれば、彼れの鋭敏精緻な性質を以てしても、彼れは尙且ユーモリストの飄逸振りに富む、挿話を扱ひ兼ねたからである。或る時ナポレオンはタレーランに向つて、自分が先に死んだならば、彼れも殉じなければならぬと嚇した。大臣は答へて云つた。「陛下、其の御注意は、私が陛下の御長命を神に祈るには不必要で御座います」と。此所にナポレオンの弱點があつた。彼れは人に安氣笑、戲談を興へ、又は拳骨を緩めさせる、諷刺的超然振りを持合はせてゐなかつた。極盛期に於ける彼れは、全世界に命令しようとして頑張つた。イギリス人、イスパニア人、ロシア人、ドイツ人、著作者、新聞記者、法王、大僧正、凡有る種類の人々は、凡べて一列に並べられた。

然かし世界は何の時代に於ても非常に嚴重にそれを支配する人々に對して倦怠を感じるものであるが、此のナポレオンの極端な編隊に對しても遂に倦きて來たのであつた。即ちヴィクトル・ユゴーの云つた、「彼れは神を拘束した」といふ評言には、眞理が含まれてゐる。

第六講 思索者

『陛下は現存するもの外は、信じ給はぬ』　ゲールゴイ『日記』

敢へて此の困難な題目を論ずるに當つて、アリストートルが其の著『倫理』の劈頭に掲げた諷刺的な「一つの問題を論ずるのに、關係材料が許す範圍に於て、事實を解釋したならば、其の論述はそれで十分である。」といふ言葉を想ひ出されたい。斯の條件は手腕家の思想を研究するには、特に缺くべからざるものである。而して此の場合、正確な學術を取り扱ふ學者の思想を研究するのとは違つて、明確な概念を握らうと考へてはならない。知識の此の方面——即ち學者の思想——を研究する人達は、手腕家の思想の本體を蔽ひ隠す偏好偏見に束縛されることから免れる。手腕家に取つては活動は生命であり、投機的な思想は副産物である。

ナポレオンを、彼れが主役を演じた事件から引離すことも亦頗る困難である。彼れは屢々空想を逞しうした。然かし彼れの隆盛期、即ち千八百六年頃までは、これを能く理性の下に統御した。彼れの性向は實際的であつた。彼れは言葉を考へず、事實を考へたといふ批評は、彼れの此の點を道破してゐるものである。大革命時代フランスの食物であり飲料であつた、成句と標語は彼れに取つては零であつた。而して彼れは、事實を有るが儘に直觀せんとする、徹底的な客觀性によつて、瞬く間にフランスを制御して了つた。何故なら、彼れが頭角を現はした時、フランス國民は既に非現實的な革命思想に厭きて來てゐたからであつた。千七百九十五年の夏、グーヴェルヌール・モリスは、フランス國民は絶え間の無い混亂のため、非常に疲労してゐるから、何等かの形式で、君主政治が再現するのは確實であると云つた位だつた。斯くして國民の感情は、強くナポレオンの心的發展の線と合致するに至つた。而して此の一致は取りも直さず、引續いて來たそれから後の事件の筋道を説明するものである。

青春期が過ぎ去ると、彼れは自分の思想から感情を逐ひ出して了つた。隨つて、彼れの演説と文書の形態は、明瞭であり、精確であり、又力強いものであつたが、いつも簡單で、又形式に構はないものであつた。其のステートメントは驚くべく内容豊富であり、手紙は事實の行列であつた。而して此等の書翰は、良く彼れの人となりを證明してゐる。彼れは議政府に於ても、決して美辭を列ねた演説を許さなかつた。そして其の希望する所は實際的の陳述であつた。千八百十年一月に、ナポレオンは外務大臣シャンパニーの報告を非難してかう云つた。『此の様式は實際的なものとしては、面白くない。余の要求するのは確實な論證であつて、繪の様な美辭ではない』と。彼れが百官有司を導くに用ゐた、適切なモットーは、『浮華輕薄であるな、命令を遵奉せよ』と云ふのであつた。明瞭と精確とに心酔したナポレオンは、常に幕僚からは、簡明にして決定的な返答を豫期してゐた。であるから、此れを爲し得ない者は、皆非常に苦心をした。此の場合最善の手段は、事實を捏造し、而してその欺瞞を蔽ひ隠す所の、僥倖に頼ることであつた。曖昧な物事に我慢し

切れない此の氣持は、屢々ナポレオンの言葉や動作の上に、明かに現はれてゐる。彼れの書翰から其の例を採つて見よう。千八百八年三月二十七日のことである。彼れはオランダ王のルイに、突然イスパニアの王冠を授けた。其の時ナポレオンは手紙で、其の利益を述べ立て、から云つた。『直裁的に答へよ。若し余が卿をイスパニア王に任じたならば、それを承諾するや。余は卿を信じて可なるや。答は唯二つである。『余は今日貴信を接受せり。余はそれを承諾す。……或はそれを承諾し得ず。』と。ウ・イトルローの戦役で、ブルモン將軍が脱走した時も同様であつた。同將軍の誠實を皇帝に保證したネイ元帥は、全く彼れ(ブルモン)は皇帝に對して非常に忠實であると思つてゐたと、答へざるを得なかつたが、皇帝は『行け、元帥、青いものは青く、白いものは白いのだ。』と云つて、ネイの辯解を粉碎した。彼れの男女に對する觀方も、同様几帳面で固苦しいものであつた。普く人類を向上せしむるために且人々の心に『人間の權利』といふ言葉を鑄り付くるために、社會一般が狂奔してゐる際、彼れは突如出現し、而して人々を目するに、完全となり

得べき人類の標本としてではなく、或る種の才能、習慣、偏見、及び缺點を有つ動物なりとの觀念を以てした。不用意な又痙攣的な人智の促進運動が、將に衰滅に瀕した時、表面に現はれた彼れは、その運動の誤謬を知り、人の頭腦を休め、人の身體を正しき姿勢に引直し、而して中正の歩調を以て、それを歩ましめた。ナポレオンはフランス國民、否全人類を、自力では到底進歩し能はざるものと信じた。されば彼れは常に、其の時代に於ける最も有爲なる人物の支配を、缺くべからざるものとして要求した。伯父の經歷を詳細に研究したナポレオン三世は、此の假定の水準を高め、普遍的眞理として云つた。『デモクラシー本來の面目は、それ自身を一個人の中に具現することである。』と。

であるから吾人はナポレオンから、人類の將來に關する深刻な意見を求むることを豫期してはならぬ。彼れの主要な功業は、理想主義の翼を刈詰めたことと、ベントムによつて發動せしめられた功利主義の衝動を實行に移したことであつた。其のフランスの國內政策に就いて見る時は、ナポレオンは王冠を戴くベントム主

義者であつたと稱し得る。又立法事業に於ては、彼れは舊フランスの因襲と新フランスの精神との、兩者を折衷した新生面を打開した。彼れの全盛期の政治は、協調精神の體現であり、而して其の精神に確實にして永遠なる表現を與へたものであつた。それ故、彼れの國民と政治に對する思想は、時に高く翱翔することもあつたが、大體は力強くして動搖せず、地面近くに中庸の飛翔を行つたものであつた。約言すれば、彼れの思想は着實であつた。然かしながら茲に注意すべき點は、彼れは協調主義者には珍らしく、無盡の勇氣を持つてゐたことである。協調の精神は屢々それ自身を、ミッドルマーチの中に出て來るブルック氏の様に、毎に雙方を賞める方法を見付けるのに骨を折る、腑甲斐ない人物の中に具現する。然るにナポレオンに於ては、協調の才能は光輝赫々、堂々として現はれた。政治思想家としての彼れは、ヘンリ四世やミラポールの直系相續者であつた。中庸を旨とする臨機應變主義の明白な陳述として、千八百年八月、彼れの云つた言葉を次に引いて見よう。『大衆が希望する通りに統治する。これが余の政治である。それは實に人民の主

權を認むる道であると思ふ。余は舊教徒となつて、ヴェンデアン戦争を鎮めた。又マホメット教徒となつて、エジプトに地歩を固め、法王無上權論者となつて、イタリア國民の輿論を身方とした。若しユダヤ人を統治しようとしたならば、余はソロモンの殿堂を再建したであらう。又同様に余はサンドミンゴの自由地方では、自由を高唱し、これと反對にフランス島(モーリシアス)に於ては、否都合によれば、サンドミンゴの非自由地方に於てすら、奴隸制度の存續を主張するだらう。余は常に奴隸制度を抑遏し、乃至それを軟化する意見を以て、その(奴隸制度)の實行を認め、秩序回復や綱紀肅正を考へて、自由を維持する。』と。

此の言葉は種々の點から注意すべきものである。ボナバルトはペンタムと同様、十九世紀に於ける中庸政治の根柢となる精神を、明かに看取したものであつた。即ち彼れは特權階級に頼る勤王主義の代りに、又狂熱者に支持された過激主義の代りに、大衆の要求に基礎を置く政治を創建しようとしたのである。彼れのステートメントの赤裸々振りも、同様注意に値する。ナポレオンは己れの政治の基調

をなす自己中心主義を、敢へて隠蔽しようとしなかつた。これは彼れが殆ど犬儒的卒直さを以て、その主義を聲明するを憚らざるまで、十分に力強くあり且淡泊であつたからである。彼れは思慮深く民衆を導き、或は確實に彼等を統治し得るものは、自分ばかりである。ことを知り、而してそれを明言するのを少しも怖れなかつた。

ナポレオンの政治問題に對する、鋭い識見と明快な解釋の例として、千八百二年九月彼れがスウィス聯邦の要人に向つて云つた言葉を取つて見る。

スウィスは他國と非常に違つてゐる。即ち近年貴國に連続的に大變災が振りかゝつた點地理的地位、言語の多種、宗教の雜多、將又諸州の風習が非常に異なつてゐる點等に於てである。自然は自ら貴國を聯邦とした。而して嘗て、賢明な人にして此の組織を變更しようと思つたものは一人もない。境遇と過去の時代精神とは、卿等を君主と臣民とに分離した。然るに正義と理

性とに合致する近世の環象と現代の精神とは、卿等の國土全般に互つて、合法的なる平等を創始した。貴國に於ける州の多くは、數世紀に互つて絶對的民主政治であるが、其の餘のものに於ては、或る一族が主權を保持し、従つて其の住民は統治者と被統治者とに區分されてゐる。貴國を圍繞する諸國、イタリア、サヴ・ヤ、フランス及びアルサス等の感化と其れら國土の精神とは、貴國の後に擧ぐる地方に、深甚の影響を及ぼした。あらゆる特權の否認は、取りも直さず貴國民の要求であり、又利益でもある。……

貴國に於ては、何一つ劃一することは出来ない。財政、軍隊、行政、皆悉く然り。卿等は未だ嘗て正規な俸給を拂ふ軍隊を、具備したことはない。卿等は大規模な財政計畫を組立てることも出来ない。卿等は從來外國の宮廷に、常置の外交使臣を派遣したことも無い。フランス、ドイツ、イタリアを區分する山脈の頂巔に位置する卿等は、これら諸國民特有の精神の若干を享受してゐる。貴國の中立、商業の繁榮、家庭的行政組織は、實に卿等の必要條件である。以上

の言葉は貴國民が政治に就いて余の意見を問ふ時、余が力説する所のものである。余の言葉が含む誠實な意味を、卿等に信ぜしむるに、多大の努力を必要とせざることを希望するは、余に取つて極めて當然である。

然かしナポレオンの實踐的思想は、併せ有するに想像力の翼を以てした。即ち彼れの史學の扱ひ振りに、其の例證を發見することが出来る。これに就いて、吾人は既に第二講で研究した通り、彼れは史學を人間教育の重要課目とした。然かしながら、彼れは從來の歴史の書方に満足しては居なかつた。これまで歴史家の採つた、癪に觸る様な曖昧さは、遂にジョンソン博士をして、歴史を文學諸部門の下位に置かせるに至つた。大體ナポレオンは、斯くの如き文藝歴史家の生温い態度に慥らなかつた。常に虚偽に對して敏感だつた皇帝は、歴史家が何處から史實や筋を手に入れたか知らうと努めた。後年彼れはセント・ヘレナで、將來の史籍のため、に確實な基礎を置くべく、最高權威の手によつて、殊に外務當局の手によつて、フラ

ンスの歴史を訂正すること、及び帝室圖書館に藏してある稿本を出版することが、彼れ(ナポレオン)の目的であつたと云つてゐる。自分の知る限りに於て、此の企ては斯かる種類の首班たるもの、一つである。而して又此の事實は、彼れを科學的史學の開拓者中に列する所のものでもある。然かしこれがナポレオンの史學に對する見解の全部ではない。まだある。彼れは、歴史家が想像力を有たなければならぬと考へてゐた。茲に彼れの言葉がある。曰く「歴史家は一の判官であり、後世の要して缺くべからざる機關であることは、異議なき所である。そして良い歴史は、法則によつて書かれるものとは考へられないが故に、歴史家は非常に多方面に互る要素と完全なる資質とを必要とする。何の特長も無く、各方面の知識が均整した人、或は分量の決つた才能の人間が、規則や法則に従つて書き得るものは、史學上の特殊論文——即ち事件の説明に力を注ぐ傾ある批評的觀察を伴ひ、信憑し得る文書を内容とした、徒勞多き研究の結果——に過ぎない。假令これらの調査、文書材料等が、悉備せる敘述の中に織込まれたとするも、此の種類の著作は、真正

の歴史と稱せらるべきものではなく、それは可い加減の歴史の疑似物と見るべきものである。従つて其の著者も、吾人が云ふ意味の歴史家ではない。」と。更にナポレオンは單なる史料の編輯者の限定にも非常に厳しかつた。而して彼れは、歴史には正確で且豊富な文書を準備することの、缺くべからざることを熟く知つてゐたが、又他方、敘述に生命を賦與し得るものは、單り創造的才能のみであることをも知つてゐた。

速かに問題の眞髓を把み得る人は、又よく截然たる話し方の出来る資性を賦與されるものである。議政府での談話以外、ナポレオンが長い演説をしたことは稀であつた。^註尤も議政府に於ける彼れの談議は、演説と云ふには餘りに家族的であり、又散漫なものであつたが、然かし乍ら問題を概括するに當つては、彼れはさながら別人の様に、簡明にして力強い論法を乗つた。吾人はブリーエンヌの回想録に戴せられてゐる、エヂプト行の乗艦オリエントの甲板で、ナポレオンが學者と宗敎論をしたことを、よく聞いてゐる。彼れは此の時學者達に、十分彼等の無神論の

蘊蓄を傾注させた後、徐ろに星宿燦爛たる天空を指して何と云つたかと云ふのに、『諸君、君達は實に巧妙だ。然かしあれは一體誰れが造つたのか。』と。斯う云ふ話をブリーエンヌからばかり聞いたのでは信じられないが、話題は違ふが、ローデルも亦同様のことを云つてゐる。ローデルが、第一統領は後繼者として、實子を選ぶべきか、又は養子によるか、兎に角其の必要あるを論じた折、ナポレオンの容喙は例の通り辛辣だつた。彼れは斯う云つて、ローデルを粉碎した。曰く、『余の自然の後繼者はフランス國民である。彼等は余の子である。余は唯彼等のために働くのみだ』と。即座に斯の様な高尚にして而かも人心を刺戟する言葉を云ひ得る人は、先天的に統治者たるべく生み付けられたものであつて、殊にフランスの様に、言葉に左右される國にあつては、一層然りである。ナポレオンと、どんな場合にも決して巧い口の利けなかつたルイ十六世を比較し、又演説が下手で行動が憶病であつたロベスピエール、或は印刷物の取締にばかり明敏だつたシェイエースを比較して見たならば、讀者は何故にナポレオンが、教養の足らない軍人や、役に立

たない辯舌家——以上に述べた連中はフランスの頭腦の別々な部分にアッピールした——を駕御し得たかを知ることが出来るだらう。即ち彼れはそれらの全體を支配したのであつた。

註、プロイイ公爵はそれを評して、支離滅裂、論旨淺薄、而して反復に充ちたもので、後年セント・ヘレナでした口授——回想録を作るため側近者に向つてした——とは、全く相違して居る。従つて後者は果してナポレオンの口授其の儘なるや否や、信じ得ないと云つた。

ナポレオンの經歷中最も興味ある精神方面の問題は、運命に對する彼れの態度である。若し運命或は運星に、彼れが屢々訴へた點から判斷したならば、彼れは一個の運命論者であつた。而して彼れが重大な報告に接した時、胸に十字を切る習慣は、此の推測の誤らざることを證明する様に見える。然かし甚しく複雑な性格、又非常に錯綜した問題に、皮相の論斷を敢へてすることは、慎まなければならぬ。

性癖は幼時の習慣の再現に過ぎずとせられる。而して、彼れが運命を絶對に信じたことを示す言動は、殆ど否絶對にない。尤も信念篤き勤行僧を除いては、如何なる人が徹頭徹尾運命の神が命するまゝに、自分を漂浪させるかといふに、それは疑問である。否勤行僧ですら、招かれてパンを貰はうと思ふ所では、勤行する。

扱てナポレオンは彼れの運星について、口から出委せに喋つたと同様に、又自己啓示の折言明した主張の中で、運星なるものを論難した。セント・ヘレナで將軍グールゴーに云つた驚くべき言葉が、これを證明する。曰く、『何だ、人間はいつも自由だ。いつも自分自身の主人だ』と。更に全盛時代屢々彼れは、總べてのことを計算に基いて行ふと、聲明してゐるのを斟酌して見よ。千八百六年六月六日附、兄ジ・セフ・ボナパルトに送つた手紙でかう云つた。『誰れでも戦に臨んで計算を度外視する時は、何一つ獲られない。總べての細目にまで深く思を致すものは、實に何かの結果を作り出す』と。而して千八百十三年十一月彼れは次の様に自分の行動の動機となるものを解剖してゐる。『余は或る場所を去つて他所に赴く。余はサ

ンクルーを棄ててモスコウに赴く。然かし其の動機たるや嗜好や友情によるものではなく、全く冷靜な計算に依るものである」と。若し或る人が絶対に理論と計算に頼るならば、其の人は完全な運命論者、少くとも東洋流に解釋した運命論者ではあり得ない。何故なれば其の人は自分の理性の充足を信じ、彼れの上により強大なる支配力のあるのを信じないからである。そして若し彼れが、自己の理性の正確なるを十分に信じて行動するものならば、彼れの信念は表面だけの單純な(付燒刃的な)哲學的信條、學問的の持説ではなく、それは彼れの心の深奥に存在する信念であり、彼れの一生を指導する根本原則である。

これはナポレオンに當嵌まるものであると自分は考へる。千七百九十三年ツロン最初の戦功以來、自信力は彼れの性格の一特質であつた。如何なるものも例へば其の數ヶ月後彼れに降りかゝつた、大災難でさへも、彼れを挫折することは出来なかつた。讀者は第一講で引用した、千七百九十六年四月戀女房ジョセフインに送つた、あの非常に目に付く言葉を、未だ記憶されてゐるだらう。「人々が余

に加へんとする害惡や、或は、運命の神が余のために用意する運命の上に、余が視線を投げる時、いつも余は眉一つ動かさず、又驚愕の色をも示さずに、到底信じ能はざる程の不幸を、嚴然諦視した。」此の文章を彼れが書いたのは、モンテノッテの初陣少し前であつた。次第に彼れは自分の力を知る様になつた。彼れはセント・ヘレナで、ロチの成功は、自分の信念と野心とを増進せしめたと言明してゐる。然り、ロチの戦役後一ヶ月、吾人は彼れが一時落膽の淵に沈んだのを見る。彼れは次の如く書いた。「吾々憐れなる人類よ。吾人は唯自然を觀るばかりで、それを征服することが出来ない。」と。然かし斯の様な文章は、それ以後、エチプトや、イスパニア又ロシアに於て、自然を輕侮した此の人の手紙には發見し得られない。事實イタリア遠征は、彼れを彼れ自身の主長とし、従つて「運命の支配者」としたものであつた。爾來ナポレオンは、自ら境遇を作り、境遇のために左右されないうやうに覺悟を極めた。彼れは、膽勇、精力、及び威信は、諸種の條件を決定するものと信じてゐた。千七百九十七年荏苒たる對奧媾和交渉中、彼れはミランから戦線のマッセナ將軍に

書翰して曰つた。『卿は何事に拘らず、決してオーストリア人に譲つてはならない。總べての點で最強であれ。故に假令取るに足らざる争や掴み合でも、それに勝て。云ひ換へれば單純な拳闘に於ても、オーストリア兵を打倒さなければならぬ』と。此の言葉は種々のことを説明するものであつて、後に彼れが云つた名言、『神は大軍に身方する』の前驅をなしてゐる。

エチプトやシリアに遠征した際は、勢ひ、彼れは運命に關して多くの言葉を口にした。然かし其の世界を壓倒し、自然を輕視する偉大なる精力は、特に『無』を考へ、靜思を嗜む東洋人の運命主義とは、何等の共通點も持たなかつた。ナイル河口に於けるイギリス海軍の勝利を、一時的の障礙と見、フランス人が考へたよりも大きい事業を彼等に遂行さすべく強ひた。此の英雄は決して運命論者ではなかつた。千八百五年八月ブローニーニに於て、ヴィルヌーヴが到着するのを待ち呆けた時、彼れが運命を罵倒したのは尤もであつた。(ヴィルヌーヴは此の時イギリス侵入軍を護送する爲にブローニーニに來る筈であつた。)然かし彼れは運命に惡罵を

加へるよりも、より一層それを此の提督に加へた。若し彼れが心から、運命が事件を左右する絶對唯一の裁決者であると信じたならば、彼れは彼の女(運命)に向つて、憤怒を傾盡し、そして一方ヴィルヌーヴには、全然責を負はせる様なことはなかつたであらう。事實、傑出した將帥に絶對的運命主義者はない。若し其の將帥にして盲目的運命論者であるならば、其の統率する軍隊は、微塵に粉碎されるだらう。トルストイは、千八百十二年の(ナポレオンの)ロシア遠征は、全く運命に支配され、フランスやロシアの將軍達は唯運命の掌中に躍る傀儡に過ぎなかつたことを、證明すべく努力した。これは一力作として、或は大思想家の哲學の啓示として、頗る興味があるものである。然かしそれもナポレオンの性質と經歷を十分に研究した者をば欺き得ない。蓋し所謂『大軍』の蒙つた慘烈な災害は、結局何を措いても困難な冬期戰、或はナポレオンが戰術運動と稱したスモレンスク附近の冬營陣地に同つての退却を賭してまでも、モスコウを支持し、ロシア皇帝アレクサンドルを威嚇せんとする、彼れの決心に其の原因を歸すべきである。此の戰慄すべき出來事

は、最も極限した意味から云へば、運命が演じたドラマと云へよう。然かし其の事を決定した主動力は、例によつて純粹な計算に基いて動く、主演俳優の決心そのものであつた。ナポレオンは同様な危険をエジプトに於て冒した。更に千八百五年には、それをプロローニエのフロティアに依つて、冒さうと切望した。然かし前者はネルソンが、後者はヴィルヌーヴが彼れの努力を妨げて了つた。ところがモスコウに於ては、冬が彼れを禁錮し、而して彼の女(冬)の當然受取るべき決算を請求するまで、彼れを我儘一杯に振舞まはせたのであつた。

今運命に就いて種々縷述するに當り、然からばナポレオンが目安としてゐたものは、何であつたらうかと云ふ問題に當面する。彼れは總べてを理論に基いて處理した。然からば其の場合に於ける理論とはどんなものであつたか。恐らく茲でも、多くの場合と同様に、彼れの幼時の修行が、吾々に手懸りを與へる。自分は、彼れがギリシア人の運命觀に影響されたのは、確かな事實と信ずる。ナポレオンはブルタークの英雄傳を、非常な興味を以て愛讀した。而して同書に書かれてゐる

多くの事柄は、ギリシア人とローマ人に及ぼした運命觀の影響を物語つてゐる。其の中でブルタークも云つてゐる通り、ティモレオンの傳記が、最も幸運に恵まれたものゝ適例である。彼れは戰術に未熟であつたが、暴君ディオニシウスやカルタゴ人の壓制に苦しむシシリーを解放する爲に、僅少のコリント人を率ゐて、これに赴かうとした。兵力其の他物質の點から見ると、此の計畫は無謀の様であつたが、前兆は非常に吉祥であつた。彼れの出發に先立つてコリントで擧げられた儀式の眞最中、式場の裝飾から一つの勝利の冠が離脱して、偶然にもティモレオンの頭上に載さつた。そして出帆してからも、天來の光明が彼れの船をレジウムの方へ案内して行つた。斯くして彼れは手練と熟達とを以て、カルタゴの船を回避しつゝ、メッシナ海峡に迂り込み、油斷してゐる敵に、大膽な突撃を加へて勝利を獲た。神の恵に驚いたギリシアの諸市は、續々ティモレオンの身方となつた。而して彼れはシラキューズの城塞を占領し、其の王ディオニシウスをすら捕虜にすることが出来、又彼れ(ティモレオン)を殺さうとした陰謀は、此の英雄の生命を奪はん

とする下手人を、親近者の仇として狙つてゐたものが打倒したので失敗に歸して了つた。總べて此れらの出来事は、人々をしてティモレオンを、シシリイの爲に復讐し、且それを救ふべく、天が差遣したる神聖な人として尊敬し又擁護せしむるに至つた。(とブルタークは云つてゐる。) ティモレオンはカルタゴ人に向つて此の光輝ある戦を開く前に、恰もウイリアム征服王が、ベヴェンシイ灣に上陸した時示した様な、巧妙さを以て、兇兆と見えるものを、吉兆に轉換したのであつた。シシリイに自由と正當な政治を興へた後、彼れは神々が自分に興へた惠澤に感謝し、其の成功は總べて神助によるものとして、邸内に幸福の神の祠を建立した。斯くの如き連勝は、大體神が彼れに特別な恩惠を許したと信じた結果であることは明かである。

此の話はナポレオンが熟く知つてゐた。其の上、地中海上に生れた野生兒である彼れ、原始的な人民、半狩獵民族、半漁獵的民族の裡に育てられた彼れは、迷信の力を十分に體得してゐた。否、恐らくは一時彼れもそれに浮かされてゐたことがあつ

たかも知れない。これは前に述べた様に、彼れが吉報を接受した時、胸に十字を切る習慣を、依然續けたことでも解る。彼れは早くから啓示宗教を排斥したが、フレデリック大王同様、尙幸福に對して一つの意見を持つてゐた。彼れは軍人、農民、並びに身分の高い人達が概して幸運、即ち總べての原始的儀式の陰影を崇拜することを知つてゐた。されば彼れの運星、廻り合せ、乃至宿縁に對する訴は、取りも直さず、地中海民族の間にも力あり、そしてアレクサンドル大王、エバミノンダス、或はティモレオン等に致した力以上のベストを盡さしむべくギリシア人を鼓舞する、其の粗野なれども力強い意念を、彼れの身方とする企圖に外ならざりしことは、可成り確かである。或る將帥は幸福であり、又或るものは不幸である。ナポレオンは幸福なもの一人であるべく決心し、幸福の神は既に自分の身方であるものとして、運命を征服しようとして彼れ自身を賭した。此の計畫は完全に成功した。此の冷靜無比の算數家、嚴正至極の理論の權化が、運命の人と他から云はれるまで、實に徹底的に彼れの考は成功したのである。恰も彼れが夜中に床から起きて星を

觀運勢を占つたかの様に。然かし實際は彼れは斯んな馬鹿なこと(運勢を占ふやうなこと)は一度もしなかつた。よし假令彼れが深更起きてゐたとしても、それは事務を處理するためか、或は翌日の策戦を命ずる前に、幕僚から申告する最新の情報を受けるためであつたのだ。

ナポレオンの經歷中、彼れが明かに迷信に陥つたことを證明する事柄はない。然かしそれに就いて一番尤もらしい話は、シャブタルが記録したものであつて、それはパリーに、ユダヤ人の最高評議會を開くために、ナポレオンが出した招集狀に關係があるものであつた。彼れがシャブタル始め他のものと、午餐を食べてゐた時、皇帝の叔父である大僧正フッシユが、愕いた面持で入つて來た。これを見たナポレオンが、何事かと問うたのに答へて彼れ(フッシユ)は云つた。「御身は此の世の終りが來ても構はないのか。」「何うして。」と皇帝は訊き返した。「御身は聖書に、ユダヤ人が一國家を組み立てるのを公認される時は、世界の終りであると豫言してあるのを知らないのか。」「これを聞いてシャブタル始め一同は笑はうとした。然

かるに皇帝は眞面目になつて、フッシユを控室に伴れ去り、其處で一時間も談じ込んだ。翌日ユダヤ人の最高評議會は解散された。これがシャブタルの話である。今シャブタルの話が眞實であり、又シャブタルがフランスの歴史家であると假定するも、それは必ずしもナポレオンが、ユダヤ人の最高評議會のため、此の世の終りが來ると信じたことを意味しない。これは次の事情以外に出るものではない。即ちナポレオンは輿論と經濟上の信用に對して責任があるので、若しサンジェルメン街の勤王黨、又は巴里株式取引所の賣方が、萬物の終焉近きにありとの風評を流布する時は、容易ならぬ大事が起るのを豫想したのと、又一つには納税の障害を來すばかりでなく、在庫品の暴落を惹き起すことを考慮したのに外ならざるものであつたのではあるまいか。^註吾人は此の問題に就いて、ナポレオンの心の働きの何うであつたかは知らない。然かし大體以上述べた通り、フッシユの述べた無稽の話がナポレオンを心配させたのは、此の世の終りといふことに就いてではなく、國家經濟の破壊についてであつたらうと想像される。

註、グールゴイが其の日記に書いてゐる所であるが、彼れは次の様に述べてゐる。
セント・ヘレナで或る時ナポレオンがグールゴイに向つて、嘗て駐佛オーストリア大使であつたシュワルツェンベルグ將軍が、パリで催した舞踏會の折、そこに恐ろしい火事が起つて數人の人が死んだが、其の時彼れ(ナポレオン)はそれを自分の運命に對する凶兆と考へた。それ故彼れは後年敵となつたシュワルツェンベルグが、ドレスデンの役(千八百十三年八月二十六日、二十七日)で戦死したと聞いた時、『惡運を擔つたのは余でなく、彼れ(シュワルツェンベルグ)であつた』と非常に喜んだと云つた。これがグールゴイの日記に書いてある所である。所が奇妙なことには、シュワルツェンベルグはドレスデンに戦死せずして、翌千八百十四年にはフランスへ侵入して來た。そしてドレスデンで死んだのは、モロイ(嘗てナポレオンの麾下であつたが或る事の爲に追はれて、其の當時は彼れの敵となつてゐた)であつた。グールゴイは此の話を記述し、且それに必要な訂正は加へたが、このナポレオンがシュワルツェンベルグとモロイの戦死とを取違へて、運命の轉換を喜んだ思違に關しては論評する所なかつた。

欠

欠

註、ナポレオンが運命に對して抱懐してゐた所の、前以て述べた種々の希求は到底永續すべくもなかつた。大將マシュー・デューマはプロローイに向つて面白い出来事を話した。それは千八百十三年六月から翌七月に亘つての休戦中、ドレスデンの練兵場で起つたものであつた。フランスの新兵が練兵掛の下士から、其の不器用を口喧しく叱られてゐる最中、皇帝(ナポレオン)が其の場へ出て來た。ナポレオンは下士官が餘り口喧しいのを見兼ねて、自から小銃を執つて、これら可憐の新兵達を訓練しようとしたが、其の結果は少しも思ふ通りにならなかつた。そこでナポレオンはとうとう傍らに呆然と立つてゐたデューマに向つて斯う尋ねた。「お前は奇蹟を信じないか」と。デューマは乃ちこれに應へて、「はい、若し私に十字を切る暇が有つたならば、それを信じます」と云つた。これを聞いたナポレオンは急に話を止めて、自分の本營へ歸つて了つたといふのである。(ド・ブローイ、回想録)

次に文學方面からナポレオンを觀察して見るに、彼れが愛唱した詩は『オシアン』であつたといふことが判る。彼れはそれをケサロッチのイタリア譯で讀んだ。

其の當時はマックファーソンの詩が大變な人氣を博してゐた。それは大體『オシアン』が眞實ケルトの古譚であるか、又マックファーソン自身が創つたものであるか、といふ論争が起つてゐるためであつた。ナポレオンも亦此の問題に、幾分興味を持つてゐた。そして彼れの本性は、イタリア語に譯されても、少しも其の力と雄壯とを失はない、アイルランドの英雄の冒險と功業とに、痛く戦いた。彼れは屢々イギリス人に向つて、自分は『オシアン』を讚美してゐると云つた。又千八百十四年、彼れはファンテースブローで、此の詩には非常に好戰的の或るものが存在してゐると云つてゐる。軍艦ノーザンバードに乗せられて、セント・ヘレナに向つて航海中、彼れは此の詩の寫を秘書官グロヴァーに示し、彼れ(グロヴァー)が嘗てそれを讀んだかどうかを尋ね、それはフランス語に於ても、頗る立派なものであると云つた。然かしセント・ヘレナに到着後、マルコム夫人には、イタリア譯の方がそれよりも遙かに結構であると云つてゐる。吾人は今茲に、『オシアン』は單に誇大の言葉に充ちたものに過ぎないと考へる。然かし此の誇張に富む形式は、此の詩の

取扱つてゐる題材に、不似合のものではない。そして其の點が確かにナポレオンを喜ばせたのであらう。而して此の事實は彼れの文學上の嗜好を物語つてゐる。彼れは修辭澤山の詩を感賞した。そして自分の胸に觸れる詩や散文によつて、情操を高めて行つた。さり乍ら彼れには幽玄な詩感は無かつた。彼れの手簡、や文書の熱心な且同情ある研究家ギイヨア氏は、ナポレオンの書いたもの、中、詩的であるとして稱し得るものは、唯一つしか見ないと云つてゐる。それは、『遂に春が來た。そして木々の葉は今發芽してゐる』と云ふのである。然かし此の批評は片寄つてゐて公明なものとは云へない。ラカイズに送つた手紙、即ち彼れがヴァランスに居た頃、コロンビエ嬢と初戀に陥り、二人は或る朝早く嬢の母の果樹園に落ち合つて、一緒に櫻の實を食べた時の情景の如き、確かに輕妙な田園詩である。然かのみならず、ジ・セフィンと結婚した當座、彼れが新妻に送つた手紙の如きは、熱情の極致を示してゐる。此れらの手紙は單純なる文學の形式問題を一笑に附する底の偉大なものである。彼れが一度感動するや、世界に向つて、火の如き修辭を用ひ、

感情に慄ふ宣言、書翰、演説等を發表した。そこには屢々詩の詩に勝る散文の詩があつた。ナポレオンは間々、詩並びに散文の兩者が共に其の源泉を見出す高所にまで到達したのである。

物事に熱心な性質の人と雖も、凡べての點に於て熱心であることは不可能である。ナポレオンも亦或る方面には通曉しない所があつた。音楽と美術の方面がそれであつた。音楽に對する彼れの嗜好は、若い頃非常に感賞してゐたルイソ一の歌の様な、單純な小曲に限られてゐた。又繪畫と彫刻に關する、彼れの審美の標準は、精緻と云ふことにのみ限られてゐたとシ、ブタルは斷言してゐる。自分の戴冠式を描いた大幅を檢閲するために、ダヴィッドの畫室を訪れた時、皇帝は其の畫をしみじみと見たが、然かしそれは畫中に描かれた人物の似顔や態度が實物に類似してゐるかどうかの點に就いてゐあつた。更に又彼れはルーヴル美術館に陳列してある諸大家の作品に對しても、何等興味を感じないことを表示した。彼れが名作の前に立ち止まるのは、單に『これは誰の作であるか』と側近の者に尋ねる

ために過ぎなかつた。ナポレオンは千八百七年七月ドレムデンで、美術館を觀覽したが、彼れは其の時急ぎ足に歩いたので、扈從してゐたサクソニア國王は、大骨折りで、先に立つて行く彼れに辛うじて付いて行く始末であつた。次に建築方面に就いて見るのに、彼れの心に最も協つたのは、宏壯雄偉のものであつた。自分が一番愕いたのは、エチプトのピラミッドとフレオンと稱する巨人の身長とであつたと、彼れは屢々云つたことがある。吾人はナポレオンがパリーに建設した、主要な記念物、例へばローマにあるコンスタンチン大王の凱旋門に刺戟されて造つた大凱旋門や、トラヤヌス帝の大圓柱を見て造つたヴァンドームの大圓柱等の宏壯を、皇帝の壯大雄渾を好む、特性に歸することが出来る。

主として學問の見地から世界を觀察する思索家は、生涯の大部分を政治に費した人のために魅了せらるゝ傾向がある。事實書齋にばかり閉籠もつてゐる思想家は、實際家を自分に勝るものと見做して、喜んでよく色々の讚辭を呈する。確か

にゲーテも此の例に漏れず、ナポレオンと會談するのを、彼れ一生涯の特筆すべき出来事の一と考へた。而して彼れは、死ぬ前の年千八百三十一年に、エッケルマンに向つて、ナポレオンは生れながらの世界統治者であり、統治に於てのみ幸福を發見する人達の一人であり、如何なる位置、如何なる境遇に於ても、恆に其の好適者であり、而して彼れ特有の明晰にして不拔なる意志に、確然として立脚する人であつたと云ふ批評を書き送つてゐる。新世界を現實の裡に招致すべく盡力した大政治家を、理想に生きる此の大詩人が讚美すべきは尤ものことであつた。從來ドイツの學者を悩ました繁雜な制限を、半ば倦怠の中に、半ば皮肉的に觀てゐたフュウストの著者は、偉大な征服者であり又組織者であるナポレオンの訓令に依り、西部及び南方ドイツの上に齎らされた大變革を、狂喜して諦視せざるを得なかつたのである。平等なる法律の公布、宗教上の自由、並びに嫉妬深き君主のために檻に入れられ、舊陋な封建制度によつて階級付けられたドイツ諸國に對する、開明政治の設張は、深い意味を含む大事件であつた。然かもフュウストの前生涯の物寂しい

否定生活を、フランス革命前の曖昧な時代に比較し、彼れの第二の生涯の多面的の活動を、新カロロ大帝ナポレオンのチヤートン王國が出現せんとする、此の盛大な時代と比較することは、餘りに困難である。

皇帝がゲーテと會見した話は二通りある。一つはタレーランの回想録第一卷の中に見えてゐるのがそれで、他の一つはゲーテ自身のものである。然かしながら此の二つの記録は、殆どあらゆる點で喰違つてゐる。それ故ナポレオンとゲーテは一度も面談したことがないと云ふ様な、破壊的批判すら支持されたのであつた。然かし二人は確かに會見してゐるのであつて、この齟齬は容易に説明することが出来る。即ちタレーランは概して個人的方面及び政治的題材を取り扱つてゐるのに、一方ゲーテは彼れ自身が興味を感じた所を書いてゐるからである。ゲーテの記録の中で取り別け注意に値するものは、ゲーテ自ら譯した、ヴァルテイル作の『マホメット』に對する、ナポレオンの批評である。ナポレオンは同著が、雷名噴々たる此の世界征服者をつまらなく描寫したのを非難した。彼れは又運命が

主役を演ずる劇には、全く不賛成なる旨を表明し、次の様な自己啓示の言葉の中に、非難を要約して云つた。「それら(劇)は其の宿命説によつて何を云はうとするのか、これに依れば政治は運命である。」と。

註、奇妙なことには、此の『マホメット』が數日後、エルフルトで上演された。然かしこれは疑もなく、其の筋書の中に、ナポレオンの經歷に適應する點が多々あつたからである。殊に次の聯句は其の適例である。

征服者及び勝利者の名稱に、

彼れは治安者の名稱を結び付けようと欲した。

此の聯句を聴いたナポレオンには明瞭に感動の色が現はれた。そして同感の波動が、劇場全體に擴がつた。

ナポレオンは思想や文體の簡明を賞讃した所から、ゲーテの『ウエルテルの哀』を非常に好んだ。彼れが同書を數回反覆して愛讀したと云ふことは確かである。

而して其の愛好の程度は、説明出來ない程強いものであつた。彼れは同書の技巧上の缺點を指摘した。それはウエルテルの自殺熱は、單り失戀からのみ生れ出たのではなく、希望の挫折も亦其の一因であるといふ點であつた。何んな場合にも明瞭と正確とを欣ぶ彼れは、動機の混合は自然に反すると考へたのである。而かもゲーテはこのナポレオンの意見に同意した。皇帝の批評と著者の同意とは、兩つながら不可思議なことである。如何となれば、ルイスが其の著『ゲーテの生涯と作品』に於て(千八百五十五年)指摘した通り、ウエルテルのモデルであるエルサレムは、二つの原因から自殺を遂げたからである。であるから、ゲーテが同書を校訂した際、ヘルデルから受けた、ほと同様の批評を重んじて、自殺の原因を單一化したことに就いては勿論であるが、ナポレオンの意見に同意した時にも亦、此の事實を無視しなければならなかつたのである。此の題目に就いて、ルイスが堂々事實に訴へて、ナポレオン、ヘルデル、及びゲーテの三人を是正したのは大手柄であつた。それから二三日後、ワイマールでゲーテと會談した時、皇帝は、ヴァルテイルや「オ

シアン』を賞美する彼れの口からは、當然豫期される事ではあるが、侮蔑的な口吻でシ・クスピアに論及した。これに關聯してナポレオンは又、ゲーテが博識であつて型に嵌まることを好まないの感嘆したが、然かしゲーテはこれには何とも應へなかつた。更に皇帝は悲劇について暗示的に意見を述べ、終に彼れ(ゲーテ)に向つて、ヴェルテイルの筆致よりも、一層の雄渾さを以て、シーザーが暗殺されなかつたならば、一層偉大な事業を遂行したであらうといふ事を示すべく、『シーザーの死』を書く様に勧めた。次に來たのは、ゲーテにワイマールを去つて、パリに移り住めといふ提言であつた。此の招致は彼れに絶大なる光榮を加へるものであつた。然かしゲーテの老齡は、彼れがフランスの首都に移住し得ざることについて、十分な理由を提供した。然かも若し彼れがパリに移住したならば、十中八九皇帝の欽定詩宗の列に加へられて、其の天稟を空しく朽ちさせたであらうと推想される。

ワイマールで催された舞踏會中、ナポレオンは當時有名な文學者であつたヴィ

ーランドを相手に、タシタスに就いて潑刺たる議論を上下した。此の議論は、悲劇は素養ある人には一種の學校であり、又或る一面から見れば、歴史に優るものであるといふ言葉から起つたものであつた。此の時既に學識ある人々の一群は、廣間の一隅に集まつてゐた。皇帝は引續いて次の様に論じた。

『卿がいつも引合に出す歴史家タシタスは、未だ余に何ものをも教へないことは確かだ。卿は彼れよりも強大なる、又或る場合もつと不公平な人類の非難者を見たことがあるか。彼れは最も單純な行爲にも、罪惡的動機を當嵌めた。彼れは、ローマ諸帝王の真相を剔抉したる天才といふ稱讚を得るために、彼等を總べて甚しき惡漢なりと貶黜した。彼れの著「歴史」は、正確に云へば帝國(ローマ)の歴史と稱するよりも、寧ろ帝室の記録の拔萃と云ふべきものだ。同書は浴場で氣分を霽らすローマ人、ローマ國民を非難すること以外には、何等語る所がない。彼れは密告者を論難するが、實は彼れ自身が其の首魁であ

る。何と云ふ書き方であらう。何と云ふ救はれ難い曖昧振りだらう。余は造詣深いラテン學者ではない。然かしタシタスの不明瞭さは、余の讀破した十餘のフランス譯及びイタリア譯の何れにも、明瞭に顯れてゐる。故に余はタシタスの不明瞭を、彼れの性來、所謂彼れの精神、乃至彼れの文體に原因し、其の思想形式に源を發し、従つて彼れの表現の形式と離すべからざる、痼癖と推斷する。余は彼れがローマの暴君に、恐怖の念を懷かせたために、世人から稱讚されるのを耳にする。タシタスは確かに暴君をして人民を怖れしめた。然かしそれは又、人民自身に取つても不幸なことであつた」と。

茲まで云つてナポレオンは、半ば辯疏的に其の批評を打切り、人々の注意を、ロシア朝廷のダンスの優れてゐることに惹き付けた。並み居た一同は此の新題目よりも、手近な智的闘争により多く興味を持つてゐた。ナポレオンの赤裸々な議論に刺戟されたヴィーランドは、謙讓的な態度で、皇帝の挑戦に對し、タシタスがロー

マの諸帝王を摘發したのは、單に墮落退化させられた、ローマ國民のためばかりでなく、凡有る時代の人類のためであつたと云つて、應戰を始めた。そして終にヴィーランドは、人類は從來感情によつて統治された代りに、將來は多分理性によつて支配されるだらう、と云ふ豫期を宣言した。ナポレオンはこれに對へて云つた。『それは哲學者が皆云ふ所だ。然かし余は其の理性の力なるものを尋ねてゐるが、未だ何處にも發見しない』と。此の時ヴィーランドは大膽に、理性の力の發達した證據は、古代に於ける最も偉大なカラリストとラシーヌが呼んだ、タシタスに世人から投ぜられる深刻な注意が、それであると述べた。ローマ帝國は其の當時、怪物が統治してゐた。タシタスは其の怪物を懲らしたのであつた。リヴィは主としてローマの軍隊に伍して居たのに、^註タシタスは研究の必要から、自身をローマの記録の中に禁錮して了つた。人々はタシタスの著書に於て、君主と人民が相互に對手の恐しさに戰慄しつゝ、尙敵對してゐた不幸な時代を見出す。然かし彼れが筆を進めて、帝國と自由が協調した時代に説き及んだ時、人々はその史論を明かに人

類最大の發見と見做すのである。

註、タシタスは彼れ自ら研究題目の範圍狭小を歎いた。

ヴィーランドの論が茲まで來ると、滿場に稱讚の咳き起つた。そこでナポレオンも大きく勝利が對手に歸したのを認めた。然かしナポレオンは決して此の儘敗けぎりにはならなかつた。彼れはヴィーランドに、彼れとベルリンの歴史家ヨーハン・ファン・ミッレルとの間に聯絡が有るか無いかを質問することによつて、巧みに對手の背後を衝いた。それはミッレルがヴィーランドに、ナポレオンがタシタスを良く思つてゐないことを豫告したに違ひなかつたからである。ヴィーランドは彼れ自身の狼狽と、衆客の皇帝への義理立ての牽制運動のために、それに相違ない旨を白狀して了つた。有利の地歩を回復した皇帝は、タシタスは事件の深奥に横はる原因を啓示せず、且それら原因の神秘的な關係を黙過したといふこと

を力説して討論を打切つた。要するにナポレオンの所論は、政治は唯その環象に従つてのみ批評さるべきものだといふにあつた。斯くして、此の偉人は討論の名譽を勇敢な相手と別け合つて引上げた。いつもの様にこゝでもナポレオンは、自分の心を知り、それを明確に力強く表現する人を、尊敬し稱讚したのであつた。彼れは最後の日まで、依然としてタシタスを嫌つた。であるからセント・ヘレナに於ても、最初フランス學士院で論述した、タシタスは巧妙な寫實家であつたけれども、人の行動に深い影響を及ぼす動機を説明しなかつたといふ、彼れ獨特の論説を再び力説した位であつた。更にナポレオンは、タシタスの皇帝チベリウスに對する物語は、理窟に合はないこと、^註皇帝ネロがローマを非常に愛してゐたにも拘らず、何故それを焼いたかといふ問題に、彼れは何の説明も加へなかつたこと等を論じ、尋いで流人(ナポレオン)は、其のタシタスを嫌ふのは、タシタスが専制政治に反對した爲であるといふ、世の見解を笑殺した。

註、ローマの火災の原因を、ネロとするか、偶然に歸するか、タシタスが疑問のままに遺したのは注意を要する所である。云ひ古るされたネロの物語は、タシタスの書いたものには見えず、餘り有名でないスウィートニアスが述べた所に係る。

茲に至つて自分は、タシタスが書いたチベリウスの描寫の正確なりや否やに關して、疑問の第一聲を擧げたナポレオンに、總べての歴史研究者は、感謝する義理あることを、進んで認めるものである。現在學者は一般に、其の敘事文の陰慘と嫌惡が、誇張に過ぎてゐるのを認めてゐる。而してナポレオンが、それを發見した第一人者であることは、其の聰明を證する有力な證據である。

皇帝の宗教的觀念は、研究題目として非常に難解であるが、又頗る面白いものである。彼れの全盛時代には、コンコーダットの創案者相應に、此の項目に就いては、極端に沈黙を守り續けた。故に彼れを熟く知るシヤプタルは、彼の胸奥に不信仰

の胚種を見付けたものと確信してゐた。然かし他のものは、彼れが屢々教會のミサに臨むばかりでなく、參會中は、嘗てルイ十六世やマリア・アントアネットが全盛時代に示したよりも、一層敬虔に振舞つたので、彼れを善良なカトリック教徒と考へたのであつた。此の行爲は確かに彼れの名譽となり、又彼れに篤信の評判を加へたものである。然かし余は茲に、彼れの若い時分の文書、手紙、或は非常に打解けた告白等に於て、純粹の宗教的觀念の象徴を、殆んど認めることが出來ず、況して宗教的悔罪等は、到底發見し得ないことを明言する。例を彼れの少壯期の述作に採つて見るに、ルソーが宗教を攻撃したことを、ジュネヅの牧師が非難したのに對して、ナポレオンの爲した返答は、此の哲學者の(ルソーの)ための熱情的、否殆んど狂的な辯護であつた。ナポレオンはカトリック教を以て、將來せらるべき理想政治に逆行するものと考へたが、而かも又一方プロテスタンティズム(新教)をも決して援護しなかつた。と云ふのは、同教義は、輿論の渾一を毀損すると認められたからであつた。彼れは其の當時、宗教を目して世人に來世の應報を豫想せしめ、現世の

自由を欲求することから心を變轉させる非社會的勢力であると考へた。然かし後年彼れは、ジャコベン主義者だつた頃、宗教を攻撃したのと同一の理由によつて、逆にそれを尊重したのである。

イタリア遠征中、ナポレオンは一時、ローマ法王の世俗的勢力を顛覆しようと思つたこともあつたが、到頭トのつまり彼れは、宗教を世界に於ける偉大な勢力として重んずるに至つた。而して吾人が既に第三講で論じた様に、彼れは道德と秩序のために、コンコルダットの勢力を利用するのを、最も肝要なことと考へ、其の後も尙引續いて、政治上の鎮靜劑として、宗教の尊重に努力したのであつた。アウステルリッツの大戦後間も無く、ナポレオンはラランドといふ學識ある男が、フランス學士院で宗教攻撃をしたのを聞いて、それに對する嚴酷な譴責を、出征先からパリに送つたことがある。皇帝は云つた。「斯の様な不合理で又危險な意見を吐露するからには、彼れは老耄してゐるに相違ない。でなければ、虚榮或は賣名せんとする希望に動かされたのだ。何故ならば、無神論は人間から凡べての慰藉と希望を

剝奪して、凡べての社會組織を破壊する教理であるからだ」と。其の後復た、千八百八年エルフルトで、彼れに敬意を表すべく集つた學者達に、斯う云つて訣別を告げた。「諸君、哲學者達は法式を創造する爲に、自分自身を苦しめる。彼等がキリスト教より良いものを發見しようと欲するのは無益だ。キリスト教こそ人間を満足せしめ、社會秩序や國家の安寧を確乎たらしむるものである。卿等の觀念は夢幻の存在期を解消せしめる。大衆に取つては——個人にも同様であるが——夢幻に酔ふ時期は即ち幸福の時期である」と。

千八百七年から十四年に至る七年間、ナポレオンがローマ法王に加へた見苦しき待遇に關する事實は、次講に譲るとして、自分は茲に諸君に向つて、セント・ヘレナで彼れが發表した、二三のステイツメントに注意されることを希望する。此の時に至つては、既に政治上の假面も、真相隠蔽の手段も、彼れには不必要のものとなつてゐた。乃ち爰に吾人は宗教に關する彼れの偽らざる意向を見出し得るものである。將軍グーロゴーに向つて、彼れは頗る明瞭に、自分の胸を打明けた。屢々彼

れは性來の短氣からか、或は——例へばモーゼの政治運動の歴史を書けと提案して、彼れ(グールゴ)をからかつた様に、——此の若い男をからかふ氣持からか、彼れ(ナポレオン)の主張を出来る限り誇大に表明した。グールゴはベルトランや、カイズ或はモンترون等が、殆んど無神論者であつたのに反して、宗教に身方する、善良なカトリック教徒であつたらしく思はれる。ナポレオンは屢々彼れに「人間は全く地球から生れたもので、日光に溫暖られ、電氣的流動體によつて結合せられる、卑しい實體に過ぎない。であるから、牡牛も勿論人間と全然違つたものでなく、唯人間は、より良く組織せられた素材で組立てられた、牡牛の優等な種類である。而して恐らく將來は、此の地上に吾人人類よりも、優良な生物が現出するだらう」と云つた。更に彼れは附言した。「何處に赤兒や狂人の靈魂があらう。靈魂は肉體次第になるものだ。だからそれは幼少の時に發達して、老年に衰へる。……兎に角彼れは斯う結んで云つた、神の理想は極く單純である。それならば複雑限り無い森羅萬象は、何人が造つたものであらうか」と。

又よく彼れは、キリスト教の道德は單にソクラテスやプラトンの道德に過ぎないと公言したし、又屢々キリストが事實存在したのかどうかの疑念を表示したこともあつた。そして東方民族のためには、キリスト教より寧ろマホメット教を採るべきだと切に力説した。彼れがエジプトに遠征した際、土人の酋長は彼れに向つて、三位一體とは何ぞやの質問をなし、而してそれを誤解して、ヨーロッパ人は三體の神を崇拜する、されば彼等こそ多神教徒であると主張して、彼れを苦しめたと云つてゐる。更にナポレオンは引續いて、マホメットは其の當時知られてゐた世界の半分を征服するに、僅かに十年を費したのみであつたのに、キリスト教は同一の事業を、三世紀かゝつて漸く仕上げたと云ひ、マホメットが宗教弘布のために戦を宣したのを嘆稱してゐた。彼れが此の様にマホメット教を好んだのは、大體軍事的の精神に基くものであつたのは明かである。彼れはキリスト教を目して、人間をして死を恐れしむる如く、感化するものだと思へてゐたらしい。即ち彼れは嘗てグールゴに向ひ「自分が若し因果應報の大法を司るといふ神を信じたな

らば、戦争を恐れたであらう。これに引き換へて、マホメット教は、立派な好戦的教義である』と云つたことがある。

これを要するにナポレオンは宗教を、人間に劇しい積極的活動をさせるやう刺戟し、大動亂後の社會秩序を整頓し、而して常に、貧窮者が運命の虐待に苦しむのを慰めるに役立つ政治的勢力と見たのである。故に彼れに取つては、衆人が宗教的勤行の何たるかを、會得してゐるか何うかは、敢へて構ふ所ではなかつた。或る時^註彼れは、ローマカトリックの教義とイギリス國教の教義とを比較して、前者を以て後者に優るものであると云つた。其の理由は、前者の信者は晩禱會で詠唱されるものを理解せずに、唯共に讀むばかりであるからといふのにあつた。彼れの考によれば、民衆が宗教を理解するのは、餘り感心し得ない所であつた。

註、グールゴイ「日記」。ナポレオンは若い時も信仰家であつたかどうか疑はしい。

メール夫人はコンコルダット締結の折千八百二年四月十八日、ローデレルに向つて、小

さなことであるが面白い話をした。それは、其の年の復活祭の一寸前、夫人が令息に向つて『あゝ、これから教會の大彌撒に、嫌がるお前を遣るのに、お前の耳を叩く必要はなくなつたよ』と云つたのを、側に聞いてゐたナポレオンが引取つて、『否や、今度は私がお前さんの耳を叩く必要が生じた』と云つて、メール夫人を軽く叩いたと云ふ話である。

然らば千八百四十年に初めて公表されたもので、ナポレオンがキリストの帝國に對して、自分の帝國の果敢い^{はかな}ことを對比した、美しい言葉に就いて、吾人は如何なる見解を持つべきであらうか。異教並びにリコルゴスと孔子の教義に就いて、長い該博な論證をした後、皇帝は斯ういふことを云つたと云はれてゐる。『それはキリストと同一なるものではない。キリストに現はれた凡べては余を驚愕せしめるものである。彼れの精神は高く吾人の頭上に翱翔し、彼れの意志は余を眩惑する。彼れを古來世界に生れ出でた他の人物と比較することは不可能である。實に彼れは凡べてのものより隔絶した一存在である。キリストの理想と其の情操、彼れが闡明した眞理、他を信服せしめる態度、これらは皆人類の機構、又は事物の資

質に依つては説明すること能はざるものである。彼れの生誕、其の經歷、凡有る異常な艱難に遭遇するとも堂々それらを解決する教理の深遠、彼れの與ふる福音、此の神秘的な存在の特異性、彼れの出現、彼れの帝國、世紀より世紀に互りて衰へず、國より國に轉行して益々旺んな彼れの行軍、これらは凡べて余に取つて一の怪異であり、脱出し得ざる夢幻の裡に余を投ずる不可測の奇蹟であり、而して眼前に存在し、持續し、而してそれを否認し得ず、又解釋し得ざる一の神秘である。余はこれに於て何等人間的のものを見ない。それらは皆超人的である。……余が貧弱な統治と、宣傳され、淨化され、愛せられ、尊崇せられ、全世界に互つて生命ある、彼れの無窮の統治との間に横はれる深淵の、如何に大なることよ。それは死か。寧ろそれは生に非ざるか。斯の如きがキリストの死である。これこそ神の死である」と。

此の高尙な文章の眞實性を支持する證據は、極めて薄弱である。此の文書は、千八百四十年のナポレオン黨の再興を援助するために書かれた一つの著述の中に現はれたもので、而して此の書物はナポレオンの隨員として、セント・ヘレナに赴い

た伯爵モン・トロンの感化されたと云はれる、シュヴァリエ・ド・ボーテルヌが發行者となつてゐる。然かしながらモン・トロンはセント・ヘレナに滞在中、同僚のベルトラン・程宗教に歸依してゐなかつた様に見えるし、又ボーテルヌの著書の發行に關する事實の曖昧なこと、又ナポレオンがセント・ヘレナに流謫中間、違無く彼れの口から出た意見とは反對の意味を表示する此の見解、並びにナポレオンの書振りと、は非常に違つた筆致等から判斷して、吾人は此の狂詩的文書を後日の創作なりと斷言し得るものである。

次の文章は前のものよりも、確實な證據の上に立ち、而かも一層寫實的である。此の一節は千八百十六年六月八日に書かれたものである。

萬象は神の存在を示す。其れは疑を容れざる確かな事實である。然かし吾々の宗教は明かに總べて人間が創造したものである。人間は最後の瞬間に臨みて如何なることを行ふか、誓約することは出来ないが、然かし余は臨終

に際して、一人の懺悔聽問僧を待たずとも死ねる信念を、確かり抱いてゐる。それは兎に角として、こゝに居るセント・ヘレナに隨行した人達の内には、恐らく余に向つて最後の告白をするものがあるだらう。余は確かに所謂無神論者とは、大に其の類を異にしてゐる。然かし假令虚言者或は偽君子の言ならずとも、理性に矛盾して説かるゝものは、其の何たるかを問はず、余はそれを信ずることは出来ない。帝政時代殊にマリアルイザと結婚して以來、從來のフランス國王の慣例に依り、余が正式にノートルダムに赴き、聖餐式に臨む様、多くの努力が人々によつて拂はれた。然かし余は絶対にそれを拒絶した。余の信仰は、儀式に臨んでまで自分の爲に、神の恵を享けたいと考へる程強烈でなく、又冷然と聖物奪取の大罪を犯すにしては、餘りに大であつた。……余は何處から來たか、余は如何なる者か、余は何處へ行くべきものであるか、といふことを察知するのは、及びもつかないことである。余は實在するも、それ自身を了解せざる時計である。……余は神の法廷に出頭し、少しも怖れず神の判決

を待つことが出来る。神は余の胸の中に、余と同様な經歷を乗つた人々に共通である。虐殺、毒殺、不法な謀殺の意志の無かつたことを、察知するであらう。余は唯フランスの名譽、フランスの強大、フランスの光輝を希つたのみである。此の仕事の爲に、余は余の能力、努力、時間の全部を投入した。それが罪過であり得よう筈がない。余にはそれらの努力は道德と考へられる。(ラ・カイズの回想録)

茲に吾人は、活動の人と、自身の活動を阻害する生命の神祕を認める人々との間に差違あるのを發見する。哲學の隱語は、墮落甚しいエビキラスの追蹤者に伍せしむべく、此等無脊椎動物に口實を供する。其の心的状態は魅惑的に下の詩に寫されてゐる。

此の宇宙に理由を知らず、

又出所も知らずに、(自分は)水の様に否が應でも流れ込む。
そして其所から沙漠を吹渡る風の様に、

自分は何處へとも知らずに、否が應でも吹き送られる。

*

*

*

*

今日の亂痴氣は昨日が用意した。

明日の沈黙は、勝利か將た絶望か、

飲め！ なぜなら、汝は何處から來たのか、何故來たのか、知らないではないか。
か。

飲め！ なぜなら、汝は何故行くのか、何處へ去るのか、知らないではないか。

然かりナポレオンはオーマー・カイラムが描いた様な、情氣満々たる夢幻の國に、
長い間低徊願望してゐるやうなことは、殆んど無かつた。彼れは決してそんな所
を住所として擇ばなかつた。彼れの無限のエネルギーは、斯かる境地に陥ること

から彼れを救つたのであつた。一時代後のカーライルと同様に、ナポレオンは困
惑する問題に處する最善の方法は、漂浪することでもなく、又酒を飲むことでもな
くして、人と競争をし、而して働くことであるのを發見したのであつた。彼れの信
仰乃至不信仰に就いて、考へる所は何れであれ、吾人は彼れが深刻なる人生の事々
物々に直面した所の、其の明白さと大膽さとに、心からの尊敬を拂はざるを得ない。
而して彼れが唯理性にのみ力を借りて、『余は何者であるか』『何故余は此所に居
るのか』『萬象を造つたものは誰であるか』といふ、永久に反響し続ける質問を口
にしたがら、世界の偉大なる聖壇を、奮闘しつゝ、攀ち登る所に、吾人は同感を表す
ものである。

第七講 世界統治者

『吾れは世界の主なり。』——ナポレオン、ローデレルに向つて。千八百年十二月一日。

古代ローマ人の性格で、特に目立つ點は、彼等が宏壯を愛することであつた。此の特性は、彼等の建築術、國家政策、公共事業、或は遊戯等に其の精神を吹込んだ。力の節約を必要とするまでに労働の貴重な國から、イタリアに來た旅人は、ヴェロナの様な比較的小さな都會にある、あの大きな圓形劇場、ローマの宏壯な浴場や水道、又は通常の一都市を建設するに足る程の材料を用ゐたティヴオリ附近のハドリアンの離宮等を、驚きの目を以て見る。ギリシア人に取つては、美と均齊が凡べてであつた。然かしながらローマ人に對しては、それに宏壯が加味されない時には、物の數とされなかつた。此の特性は中世のイタリアに於てもまだ認められた。

而してそれは、堂々たる宮殿や市街を、城砦の集合と化したのみならず、堅牢で高い塔閣や、人口の必要以上に巨大な教會を作り上げた。ローマの典禮、文學或は演劇は、種々の點に於て、イタリア人の大規模を愛する性質を明瞭にする。

既に述べた通り、ナポレオンの少年時代の研究は、主として古代ローマ人の大功業に向けられ、そして其の雄壯な物語は、彼れの本體の組織に織り込まれた。彼れがシーザーの『ガリア戰記』を好んで反覆熟讀した事實によつても、ローマ愛好の熱心さが推測し得られる。『ガリア戰記』の中に無限の愉悅を見出した此の少年は、眞底からローマ人たらざるを得なかつた。そして早くからシーザーを崇拜すべき英雄と考へた彼れは、シーザーより偉大な人物にならうと心懸けた。古代ローマの隆盛は、彼れの活躍に對する不斷の刺戟であつた。彼れはラテン民族を昏睡から覺醒させ、それを基礎として、シーザーの建設に勝らずとも劣らざるものを造らうと欲した。

ナポレオンの資性に根ざしたローマ的精神は、千七百九十八年に彼れを驅つて、

東方諸國の征服を企てさせるに至つた。或る點から見て、この遠征は彼れの生涯中、最も冒險的の企である。中央ヨーロッパとイタリアとが、フランスの壓迫に憤慨し、一方ユニオン・ヂャックが揚々として海に翻つてゐる時、彼れはエチプトの攻略を提議し、而もそれを、一層擴張した計畫、即ちインド征服の踏臺に利用しようとした。場合によつては、ナポレオンはアレクサンドル大王より遙かに大膽であつた。アレクサンドルは小アジアに進發する際、先づ以て隣國アテネと諒解して、ヨーロッパとの聯絡を確保し、兵站根據地から遮斷される凡有る危険を防遏したものであつた。然るにナポレオンに取つては、此の場合、中央ヨーロッパやイタリアの敵對行動があるばかりでなく、イギリス艦隊の攻撃も無いとは保證することが出来なかつた。これが疑もなく史家チエールをして、千七百九十八年のエチプト遠征を、『歴史に記録された最も亂暴な企圖、モスコウ遠征よりも不見向な計畫』と斷言させた理由であつた。彼れは更に云つた、『此の遠征はナポレオンのそれ以後の生涯の胚種を藏したものであつた。又それは、彼れの偉大な綜合力と斷行力、並び

に彼れの蠻性を示したものであつた。そして此の蠻性によつて、彼れの想像が、彼れに有形無形凡有る障碍を輕視させたのである』と。

此れはナポレオン崇拜者の言葉である。然かし此の議論は餘り嚴正なものではない。セント・ヴィンセント岬沖とキャンバーダウン沖との海戦以後、イギリス艦隊は制海權を掌握した。千七百九十六年の末、同艦隊が地中海から撤退したのは、これらの勝利を獲るに必要な勢力集中の運動に他ならざるものであつたのである。これらの海戦後、尠くとも一時、イギリスの海岸は確かに安全であつた。而してイギリス艦隊の撤退を見て、ユニオン・ジャックが最早再度地中海に翻らないだらうと假定したのは、此の年若いコルシカ人に取つて、非常に危険なことであつた。誤算は彼れの企圖を顛覆した。ナイル河口でネルソンが勝利を得た後に於ては、インド河或はボスポロス海峡に進軍しようとする一層遠大な計畫は、企てるも無駄なことであつた。ナポレオンはフランスと聯絡を斷られた手兵を以て確かにエチプトを固持することは出来た。然かし東方を征服することは、殆ど不可能となつた。

けれども尙依然として東方征服の夢は、彼れを惱まし續けた。恐らくナポレオンはマハン大佐が詳論した海上權力の緊縛的效果を、十分に深く悟らなかつたのであらう。然かし大體に於て、海上權力の効果は、十八世紀の君主や將帥達によく知られてゐたものであつて、其の實例はナポレオンの様な熱心なる戰爭研究者の眼から、逃れることはなかつた筈である。守將シドニスミスがナポレオンの攻城砲を海上で拿捕し、それをフランスの包圍軍に向けたアクレの攻圍後、海上權力の交戦に及ぼす實效を否認することは出来なかつた。

それは扱て措き、ナポレオンは其の最後の日まで、アクレの土壁は彼れと彼れの幸運東方征伐とを隔離したと主張し通した。然かし彼れは確かに、全計畫成否の分水點は、アクレに於ける敗戦に非ずして、ナイルの海戦であつたことを悟つてゐたに違ひない。アクレは海上の勝利から來た結果の一つに過ぎなかつた。フランスから援軍が來なくなつたこと、マホメット教徒を元氣付けたこと、マルタ人がフランス軍に反抗したこと、彼れ自身の兵が意氣沮喪したこと、而してトルコ朝廷

がエチプトを奪回しようとして決心したこと等々、これらは皆ナイル海戦の結果に他ならざるものであつた。而も其の時、彼れの軍隊は疫病に悩まされてゐたので、東方に遠征する資格は既に全くなつてゐたのである。然らばナポレオンは何故、アクレが彼れの生涯の變換點だと、繰返し繰返し云つたのであらうか。これに對して二種の解釋が示される。其の一つは、彼れは眞實、海上權力の一つの顯れに他ならぬアクレの防戦を頗る重大視したことである。されば彼れは後年セント・ヘレナで、屢々側近の者に向つて、アクレの失敗は一大不運であつたと語つたのであり、又嘗てはクレールベルが命ぜられた攻撃を拒んだ卑怯を非難し、且自分が當時猶他に四門の十二ポンド砲を持つてゐたならば、アクレを占領することが出来たし、インドで一隊の精兵を動かしたならば、同地からイギリス人を驅逐し得たであらうと主張したのであつた。

他の解釋とは斯ういふのである。彼れは海上權の威力を十分に了知し、且東方遠征の大計畫は不可能であるのも覺悟しながら、尙依然フランス兵の眼に、陸離燦

爛たる東洋帝國の幻影を映じて、其の想像を煽る方が利益だと考へた。然るに其の幻影は、單なるアクレ事件のために消失して了つた。然かし此の豫望は單純なる出來事のために頓挫したものであるが故に、他日より良き形勢の下に、それを實現することが出来るとしたものである。これが第二の解釋である。即ち第一の解釋はアクレを彼れの運命の挫折點と考へ、他の解釋は其處を運命の打開點と做したものである。余は此の方が能く眞相を穿つてゐるものと考へる。それはナポレオン特有の鋭い理解力、並びに目に見えない人間の行動の源泉をよく知つてゐる、彼れの知識と一致するからである。若し諸君が人々をして、——殊にフランス人を——彼等は今將にアレクサンドル大王以來最も大なる功業を、完成せんとしつゝあるものなりと信じさせたならば、其のエネルギーを倍加せしめ得るだらう。又若し諸君が失敗を、アクレ事件の如き明確な出來事、或は疫病に歸したならば、それは諸君が彼等の大事業に對する欲望を刺戟するものである。畢竟人間は想像の動物である。而して偉大な人間の操縦者であるナポレオンは、フランス人

の眼の前に掲げたモゴル帝國の王冠は、損害の記憶を全部抹削し、更に十字軍を前進させる、不斷の刺戟たることを熟知してゐたのである。

シシリイ沖でネルソンの巡洋艦隊を回避し、祖國フランスの運命が危機に頻した千七百九十九年の秋、無事歸國し得たるナポレオンの幸運は、フランス人の注視から、エジプト遠征の破滅的失敗を陰蔽した。而してそれに引續いた數年間の出來事は、彼れをして、其の冒險的政策を停止し、最も堅實であり又恆久性に富む彼れの事業、即ちフランスの改造を行はすべく餘儀なからしめた。然かし彼れの頭は斷えず椽大なる計畫で一杯になつてゐた。即ち彼れはイスパニアと、イタリア領の巧みな交換に成功して、ルイジアナの繼承權を獲得したのみならず、更に又サン・ドミンゴを根據地として、カリフォルニアのイスパニア領に達する、廣漠たる地域を開拓せんとした。ナポレオンの海外政策は此の上更に擴大して、中央オウストラリアにも、フランスの植民地を創める計畫を立てるに至つた。其の他千八百一年から翌年にかけて、オランダ共和國を強壓したのは、同國の植民地、殊に喜望峯植

民地を略取する前奏であると思ふべきものであつた。

譯者註、千八百年三月アメリカ合衆國との平和談判が端緒となつて、ナポレオンは、イタリアのバルマをイスパニアに與へ、其の代りイスパニア領ルイジアナを譲り受けた。

千八百二年八月ナポレオンが、終身の第一統領に就任してから、彼れの世界帝國創建の希望は、頗る光彩あるものとなつた。其の當時フランスに於ては勿論のこと、隣接の國々に於ても、彼れの意志は其の儘法律であつた。彼れはビエドモントとエルバを併合したが、これに續いてバルマとエトルリアも亦遂に彼れの權力下に統制せられた。更にスウィス諸州に對するフランスの干涉は、その臣服を確乎たるものたらしめた。而してセキュラリジエイションとして知られる、ドイツ諸侯の教會領奪掠の連續は、彼れの忠實な隨從者を富裕とし、又オーストリアを犠牲として、バヴァリア、プロシヤ等の友邦(ナポレオンの)を擴大するに效力ある手段を

ナポレオンに提供した。斯くして千七百九十七年五月、イタリアのモンベロで彼れが云つた「ドイツが組織立つてゐないなら、フランスの便宜のために、特にそれを組織立てる必要がある」といふ豫望は充たされたのである。一方此の時に於ける列強の情勢を見るに、ロシアは年少の皇帝アレクサンドル一世が、自由解放主義に心酔してゐて、敢へて外に向つて動かうとはしなかつたし、ジージ三世とアッディントン^①の振はざる施政の下に、蹣跚しつゝあつたイギリスは、其の實力聲望兩つながら陵夷して他を睨ふ氣力も無く、又アメリカ合衆國は痛く彼れのルイジアナ占領計畫の風評に激昂しながらも、尙未だ彼れに向つて、敵對行動に出づることを敢へてせざる情勢であつた。列國の狀態が此の様であつた折、又彼れは一時對伊政策を變更して、フロリダを占領するの希望をすら有つてゐることを明示した。ナポレオンの幸運は單にそれらの上に止まらなかつた。即ち彼れは更にアミアン條約によつて、前年の戦争で失つたフランス植民地の全部をも回復したのであつた。此の他オランダ領は事實彼れの支配の裡に入り、イスパニアも亦、彼れの從

順な屬邦であつて、其の時は未だ、其の皇女の爲にイタリアで無價値な且不確定な領土を得るのと引換へに、アメリカに於てルイジアナとフロリダを失ふことを豫示する變化には、何の不滿をも見せなかつた。インドも殆ど彼れの手に入る様に見受けられた。なぜならば、彼れとマラッタ種族との交渉は、三色旗(フランスの)の下に力強い同盟を作り、ユニオン・ジャックを驅逐することを約束したからである。加之エチプトの回復も何等困難とは考へられなかつた。ナポレオンの命令の儘に千八百三年一月三十日のモニター紙上に公表したセバスタニのレバント報告は、六千のフランス兵は容易に同地を席卷すべしと強調したものであつた。イオニア諸島を見るに、これもフランスの三色旗の掲揚を熱望してゐる状態であつた。

譯者註 ルイジアナを得たナポレオンは更に其の東フロリダをも手に入れようとして、千八百年これをイスパニアより譲られた。

以上の如き事實はよく記憶すべきである。即ち千八百二年に於ては、全世界はナポレオンの脚下に在つたのである。後間もなくロシア政府が明示した様に、フランス人は幾十回の戦争に依つて獲たと同等のものを、最後の戦争（ロシア遠征）で失つたとはいへ、平和の期間に於ては、彼等は著しく權勢を伸展することに成功したのであつた。全く其の通りに違ひなかつた。ナポレオンは戦争で獲たと同程度の結果を外交によつても收めた。炯眼な觀察者グヴェルニール・モーリスが論評した通り、アミアン條約の締結及びそれに引續いて生起した事件に對するイギリスの黙許は、其の存立を危ううるかときまで見えた。摘要するに、千八百二年ナポレオンは、ルイジアナ、フロリダを獲得し、又エチプト、インドの一部、及びオーストラリアの一部を略取すると共に、オランダ植民帝國の相續出来るならば、イスパニアの繼承權をも掌握するの豫想を懐いてゐた。成る程千八百七年のチルジット條約以後、彼れの地位は頗る華やかなものであつた。然かし自分の判斷からする時は、千八百二年に於ける彼れの地位は、所謂世界帝國の創設に、最善の機會を彼れに提供するものであつたと思はれる。

譯者註　ルイジアナとフロリダとは、前掲譯者註の如く、千八百年イスパニアよりこれらをナポレオンに割讓した。

若しナポレオンにして、フランスの海軍が十分に活躍出来るまで、靜かに待機してゐたならば、假令一時的であつたとしても、多分成功を贏ち得たであらう。アムステルダムからジエノアまでの造船所の殆ど全部が意の儘になつた彼れとしては、遠からずイギリスの海上權の優越に、挑戦すべき望を抱き得るものであつた。此の時彼れの胸裡に潜む慎慮は、彼れに自制と猶豫とを守るべく進言した。然かし其の忠告は無駄であつた。ナポレオンの天性を成す南歐の性急は、彼れに猶豫を許さなかつた。六週間の後將軍デカンのインド派遣軍と具體化したかのセバスタチニの報告は、イギリス政府を警戒せしめた。而してフランスが地中海で得